

来
未 夢 創
遊



ふぞろいのみらい塾3期生・・・・・・・・

3つの林檎

誕生！27人の地域プロデューサー

笑顔
夢と
元気



H15. 3. 8

まえがき

淡海に、
年齢も職業も住所も趣味も、やりたいことも、
てんでばらばらの27人がいました。

2年前、
その27人は、それぞれの理由でおうみ未来塾に入塾し、
開講式の会場に集まりました。

そして、
2年の月日が過ぎました。
年齢も職業も住所も趣味も、やりたいことも、
てんでばらばらのままでした。

でも、この2年間で、27人全員が一緒にもったものが二つだけあります。

ひとつは、「夢をかたちにすること」への強い意志。
もうひとつは、同じ、「夢をかたちにすること」への強い意志を持った、
自分以外の26人の仲間たち。

それぞれの地域へかえって、27人が夢をかたちにしたとき。
ともに喜んでくれる仲間がいること。それは、どれだけ大きな宝でしょうか。

「夢をかたちにすること」への意志と、仲間たちという、
大きな宝を得た私たちは、この淡海で、
これからそれぞれ27の新しい物語を紡いでいきます。
その物語が、淡海をより豊かに、美しく、
楽しいものにすることに成功したとき、はじめて私たちは、
未来塾に恩返しができることでしょう。

その日まで、倦まず、たゆまず、目を開きながら夢を見続けましょう。
そして、また、淡海で、再会を願いながら。

かたみにおもうちよろずのこころのはしをひとことに
さきくとばかりうたうなり

目 次

◇ 卒塾写真	
◇ まえがき	
◇ 目 次	
◇ 私達がプロデュースした講義	1
◇ お泊まり研修（コミュニケーション編）	
県内研修	5
滋賀県マキノ町～高島町	
県外研修	6
福井県今立町～大野市	
◇ 楽しかったね！塾生の活動訪問	
こんぜ桃源郷（里山保全）	7
カヌー体験講座とマキノ	8
西の村コンサート	9
ままやで日高先生を囲む会	10
◇ 「グループ分け」から「グループ研究合宿」まで	11
◇ 卒 塾 式	13
◇ グループ研究報告書	
駄菓子探偵団	14
ハートアンドハート	52
グリーンソーリズム	80
てんしょく	108
◇ ひとり一人の思い	138
◇ 先生ありがとう！お世話になりました。	
日高敏隆先生へのインタビュー	191
北村裕明先生へのインタビュー	192
運営委員の先生へインタビュー	194
織田直文先生・藤井絢子先生・岸田眞代先生・辻川作男先生	
◇ 事務局から一言	197
◇ 編集後記	198
添付資料	

私たちがプロデュースした講義

入塾からサブ講義まで

①入塾式

2001年 6月9日

入塾式と塾長講演

講師／ 日高 敏隆（総合地球環境学研究所）

講演名／「持続可能性と未来可能性」

ネットワークセンター



入学式っぽい緊張感とどんなことに出会えるだろうというわくわく感が漂う中、先輩方、先生方に見守られながらの入塾式。大人になっても、うれし恥ずかし一年生という気分。式のあと、日高塾長の講演。「持続可能性と未来可能性」持続可能性ではなくて、未来可能性というのが適切とか。また Think-globally・Act-locally というが、ローカルに考え、ローカルに行動する事が、グローバルにつながるというお話をされ、今後、地域でがんばりたいという私達の励みになりました。



②講義

2001年 7月14日 10:00～17:00

講義名／「コミュニケーション」

講師／ 岸田 眞代

（おうみ未来塾運営委員・NPOパートナーシップ・サポートセンター 常務理事&事務局長）

＜ジョハリの窓＞＜理解促進問題＞＜コミュニケーションゲーム＞＜積極的傾聴＞などについて学びました。中でも＜コミュニケーションゲーム＞は、ある絵を見てそれを言葉で伝えていくというものでしたが、なんと伝わらないものか、ということを実感しました。

知っているはずの自分なのに…。まずは自分を知る、仲間を知ることから。コミュニケーションゲームを通じて、頭ではわかっている、なかなかできない上手なコミュニケーションを体感。「きくばり」コミュニケーション、積極的傾聴から、上手な人間関係づくりのためのコミュニケーションを学びました。

③サブ講義

2001年 7月24日 19:00～

講義名／「人間関係が楽しくなる方法」

講師／ 金沢 恵美（おうみ未来塾1期生）



「自分の性格を知ること、人との付き合いがうまく

なる」動物占いの原点・・・個性心理学を6年やっていてプロフェッサーになった金沢講師。誕生日から地球、月、太陽に3分類。マスコット（動物）に12分類。自分の本質や、周りの人とのコミュニケーションに役立たせることができたのではないかと思います。



④講義

2001年8月11日 13:30～

講義名／「パートナーシップ型地域運営のすすめ」

講師／ 北村 裕明

(おうみ未来塾運営委員長・滋賀大学経済学部長)

市民の自発性と主体性による地域のニーズや資源を発見し、それを事業化するにあたって行政の支援は何が求められるか、国内・海外の先行事例を分析し、キャッチアップ型からフロントランナー型への日本社会の変換が21世紀地域運営だということを学びました。

⑤サブ講義

2001年 8月28日 19:00～

講義名／「環境を切り口とした地域づくりと人との出会い」

講師／澤 孝彦・遠藤恵子（おうみ未来塾1期生）

先輩からグループ活動の進め方を学ぶ

1期生の中でも顕著な活動成果を挙げられているセブンドロップス。グループの成立～展開について直接お話を伺いました。どのように同期からグループが生まれたか／メンバー個々の思いからグループのミッションへの形成／チームワークのための全員参加原則やリーダーシップのあり方／外部ネットワークの重要性／リラックスし、楽しむ姿勢の重要性など、得るものが多くありました。

⑥講義

2001年9月8日 13:30～

講義名／「NPOに求められる政策形成力」

講師／ 木原 勝彬

(おうみ未来塾運営委員・NPO政策研究所理事長)



サステイナブル・コミュニティ（持続可能な地域づくり）をめざし、生活者及びコミュニティ再生の現場からのボトムアップ型政策形成シンクタンクについて学び、NPOに求められる政策形成力は何かについて学びました。

⑦サブ講義

2001年9月25日 18:30～

講義名／「市民によるNPO支援について」

講師／ 辻川 作雄

(おうみ未来塾運営委員・おうみ未来塾1期生)



持続可能なまちづくりにおいて、支援センターの重要性を学びました。ひとまかせではなく、自らが動いて汗を流さないと、成功は得られないと痛感しました。

まちづくりをおこなう大前提として、わがまちに対するほこりをもつことがあると気づいた。そのような自分を犠牲にしてまでやれるかどうか、そのようなバイタリティーがあつてこそ、黒壁のようなものができることができました。

⑧講義

2001年10月6日 13:00～17:00

講義名／「まちづくりと担い手」

講師／ 岡崎 昌之

(おうみ未来塾運営委員・法政大学現代福祉学部教授)



地域社会を取り巻く状況や地域再生にむけた視点について、熊本県小国町や愛媛県内子町など先進地の事例などを通してイメージが広がりました。まちづくりの担い手（地域プロデューサー）として必要な視点を学ぶことができました。

⑨講義

2002年12月16日 13:30～

講義名／「NPOで五方よし」

講師／ 藤井 絢子（滋賀県環境生活協同組合理事長）

海東英和（新旭町長）



～足もとから固めた地域づくり～

環境問題など様々な課題に対しての市民活動は、身近なところから徐々に国レベルまで広域に広げていくという視野が必要であるが、今回の藤井・海東両氏のお話から、「地域適正レベル」という視点を頂きました。つまり、地産地消の仕組みづくりなど、足元を見直し、足元の活動から固めていくことが大切ということです。

また、はじめから壮大なビジョンを思い描いてしまいがちだが、いい活動に発展しているものを振り返ってみると、必ず「スモール・スタート」ということを重視していることがわかる。一步一步ということだ。それにしても両氏のエネルギーはすごい！見習いたい！



⑩講義

2002年 5月19日10:00～

講義名／課題解決手法

講師／ 岸田真代

(NPOパートナーシップ・サポートセンター 常務理事&事務局長)

4つのグループに分かれ問題の洗い出しを行う。問題を設定し課題が明らかになったら問題を分析。課題の重要度・優先度（目標）を設定し、解決のためにアイデアを創出。次に手順を決め総合評価を行うという手法を学んだ。グループが出来たばかりで、今後の方向性を決めるのに大変役立ちました。

⑪講義

2002年 7月13日

講義名／葦（ヨシ）との共生

講師／ 西川嘉弘（ヨシ博物館館長）ほか

水辺保全の熱き思いを学ぶ



葦を通じて、西川さんたちの西の湖から琵琶湖そして世界の湖沼へと広がる水辺環境の保全への熱き思いと実践活動の一端を学びました。そして、午後の優雅な西の湖遊覧と船上でのすき焼きパーティーでは、豊かな琵琶湖の原風景に触れることができ、自然環境について“人間は考える葦である。そして、行動する葦でありたい”との思いを強くしました。



⑫講義

2003年1月25日 10:00～17:00

講義名／ 未来組織を担う「リーダーシップ」研修

講師／ 岸田 真代

(NPOパートナーシップ・サポートセンター 常務理事&事務局長)

リーダーに求められている要件・能力、組織における役割などリーダーシップのあり方について、グループワークを取り入れながら学びました。強固なピラミッド型の組織やNPOなどフラットな関係の組織など社会組織のあり方に変化が生じているが、どんな組織においても通用するこれからのリーダー像をとらえることができたと思います。

県内研修

滋賀県マキノ町 ～ 高島町

日 時：2001年11月18日（日）朝～13：00頃まで

参加者：浅居、川尻、糸、澤、菅、山口、田淵、名田、西村、久泉、藤井、藤田、

前川、松石、松田直子、吉見、天川

（計16名）

日 程

7：00～ 朝食

8：00～ マキノ発

9：00～ 朽木村日曜朝市見学

9：30～ 朽木村発

10：00～ 高島町着、

ビレッジ今西さんの説明

（ビレッジ1号館）

1～4号館見学、

全体ディスカッション

（ビレッジ1号館）

12：30～ 昼食（ビレッジ2号館「あぶみ」）

現地解散



県内研修はマキノの内田さん塾生訪問と温泉宿泊に引き続いて、近江高島町びれっじ訪問でした。前夜の楽しい興奮さめやらぬまま朝御飯を頂き、そのまま朽木村の朝市へ。新鮮な野菜や名産の鯖ずしを買ったり、暖かいおみそ汁に舌鼓をうったりして朽木の朝を満喫したのち、一路近江高島町へ。ビレッジの今西さんにお話を伺いました。

まちづくりにはひとかたならぬ努力と根気、そして継続していくビジョンと根気が必要。そんなことを再確認させていただいた。

貴重なお話を伺うことが出来ました。アイルランドとの交流という、特に国際色とまちづくりをとりいれた試みや、観光スポットとしてまちづくりに貢献しようとする強い意欲が伺え、今後自分たちがどのようにまちづくりや地域支援事業に取り組んでいけばいいかについての参考になったと思います。

なによりも、近江高島町のしっとりした町並み、美しい琵琶湖の風景のなかに、人々の何十年にもわたる努力を改めて感じさせられた、貴重な研修となりました。

県外研修

福井県今立町 ～ 大野市

日 時：2002年8月17日（土）13：00～18日（日）13：00

参加者：岡崎先生、内田、桑、澤、山口、前川、松田元、松田直子、吉見、川尻、天川
(計11名)

日 程：

8月17日（土）

12：00～ 今立町パピルス館

12：15～ おそば屋さん

13：00～ パピルス館、卯立の館

14：00～ 勤労青少年ホームにて

谷端淳一郎さん「そばにかけた人生」

15：00～ 佐々木哲夫さん「今立町のまちづくり」

16：00～ 市民共同発電所を見学

17：00～ 大野市へ

19：00～ 扇屋宿泊・大野市の方々と懇親会



8月18日（日）

8：30 平成大野屋→七間朝市→ギャラリーくのり→もっこの会

→南部酒造（お酒の学校）→末吉町庵→ひだまりの家

12：00 NPO「田んぼの学校」にて昼食・説明

13：00 帰郷



8月、真夏の猛暑の中、福井県今立町と大野市へと県外研修に出かけました。テーマは、まちづくり。和紙で有名な今立町・パピルス館で和紙の奥深さに触れたあと、勤労青少年ホームにて、そば輸入会社を立ち上げられた元今立町職員の谷端さんに興味深いお話を伺い、続いて佐々木さんに今立町の文化重視のまちづくりについてお話を伺いました。その後も大野市のみなさんに暖かく迎えていただき、懇親

会で楽しいひとときを過ごさせていただきました。

大野の朝は早く始まりました。大野市のみなさまの熱意のもと、いくつものNPOを視察させていただき、大野のまちづくりについて学ばせていただきました。感性はがき展、もっこの会の方々の作品、南部酒造のご主人の取り組み、田んぼの学校での昼食とお話、全てとても良い勉強になりました。ありがとうございました。

こんぜ桃源郷（里山保全）



日時／2001年10月13日（土）

会場／栗東市

10:00～ 現地集合

バーベキュー・すき焼き会
場・準備

11:30～ 昼食

懇親会及び情報交換

13:00～ 澤氏 南京玉すだれ披露
活動エリア紹介

塾生感想より

● 熊…？いやいや「九麻ちゃん」の桃源郷

澤 九麻男さんの里山にお邪魔して、腹いっぱい「松茸」を頂きました。…とこんな調子で、感想を終われませんが参加して本当に良かったと思います。

この里山には、「ほのぼのとした時間（トキ）」が流れているようで、大人にとっても子供にとっても良い時を過ごせる様な気がしました。例えば、自分の体験から子供の頃、近くの空き地に近所から拾ってきた廃材を利用してバラックを組み立て、幾人かの悪ガキが集まって夢を語ったものでした。そんな「秘密の基地」のようなものを思い出されて、何かほのぼのと心地よいものを感じたのです。

今日、「癒し」がブームのように、にわかに注目を浴びていますが、この里山には、ずっと昔から大勢の人々がそれぞれの感覚で自分を癒すことの出来る場所だったのかもしれない。そういう意味で、私は子供の頃のことを思い出し、「ほのぼのとしたような、切ないような感じ」を与えられ、何時の間にか溜まっていた「ストレス」が大いに「癒された」様な気がしました。

最後に、こんな素晴らしい「里山の空間」をこのままにしないでそれぞれの思いを持った「秘密の基地」となる拠点が出来たら良いのにとします。（浅居）

● 澤さんの桃源郷は、さすが金勝の山の中。何もないのが魅力。澤さんの言葉から夢が一杯感じられます。皆で食べたマツタケやシイタケのすき焼きやバーベキュー。竹で炊いた御飯。まさに滋賀県は広い。湖があれば山もある。車でちょっと走るだけで自然にどっぴりとつかることができました。澤さんの10年後、どんな活動をしているのか、どんな桃源郷ができているのか楽しみ。（菅）

カヌー体験講座とマキノ



日時／2001年11月17日(土)

会場／マキノ町

14:10～ マキノ東小学校前

(カヌー体験講座)

準備→説明→準備体操

体験→カヌー返却→後片付け

(二重の虹が出ました！)

すごくきれいで感動しました)

塾生感想より

●県内研修、虹のカヌー、内田さんとい

これが3期の動きにドライブをかけた、最大の行事だったと思います。

タイミングとして絶妙でした。みんながある程度なじんできた時期に、泊りがけでゆっくりと話し合う、遊ぶ。そこには、内田さんのお人柄と活動のありかたを生で拝見できたこと、さらに、水上からの2重の虹という大幸運。伝説に残りそうな吉兆でしたよね。

翌朝の「おもしろいことになりそうだなー。」という内田さんのエエ声が、今でも耳に残っています。(名田)

●琵琶湖をはさんで彦根と反対側に來たのが初めてでそれだけでわくわくしていました。多くの人の協力のおかげで楽しい思い出ができました。勉強しに行ったはずなのに、今思うとボカーンと口を開けていただけだったと思います。カヌーには初めて乗ってはいしゃいでいましたがすでにここから？マークの登場でした。内田さんのおかげということはわかってはいるけど何で僕らは小学校のカヌーで遊ばしてもらってるんだろー？と。しかも、小学校の先生までも応援に駆けつけてくれて、いったい内田さんとは何者や？と。学校の職員ではないけれど、地域作りという形で学校と付き合っていく。地域との関わり方としてそんなあり方があることを実感できました。次の日行った高島町の古い空き家を利用した商売は多分僕らのグループのやりたいことをイメージすることに結局つながった。しかし、家賃が税金分だけというところまで持っていたのには驚きました。そんな物件はある、しかしそれは全部すさまじい根気の上に成り立ってる。そして、思いは実現する。そんな勇気までもらいました。(藤田)

楽しかったね！

塾生の活動訪問 西村 ますみ

西の村コンサート

普通の民家でもコンサートができる！

「西の村」とは、将来・・音楽や絵画などの趣味やレストラン、農業などをやってみたい方々に利用していただくスペースにしたいと考えております。玄関を改築したところ思いがけず音が響くようになったのをきっかけにコンサートを開くようになりました。



フルート：水野ゆりか

(京都教育大学音楽科卒・NPO 法人音楽療法の)

ピアノ：八木美砂子

(大阪音楽大学音楽部ピアノ科卒・音楽療法家)

日時／2002年1月12日（土）

会場／守山市播磨田町970

第1部

16:30～ フルートコンサート

第2部

17:30～ おでんパーティー

ひたすら……食べる。飲む。喋る。
語る。交流する。夢を描くなどなど

塾生感想より

●素晴らしい音色を聞き、心がリフレッシュしました。聞くだけではなく、一緒に楽器を持つの参加型コンサートで、「場」が一体化して、とても楽しい時間を過ごせました。大きなお鍋で食べるおでんも美味しかったです。準備して頂いた皆様に感謝の気持ちで一杯です。(松田直子)

●おでんパーティー、西村さんとこ

「西の村」という魅力的なスペースで繰り広げられたフルートの演奏会。西の村の主催者、麗しの西村さんがご尽力されたからこそ実現した催しです。私個人にとっては、ブレイクする（日本語訳：壊れる）きっかけとなった企画でした。ありがとうございましたと言うべきか、いつもいつもご迷惑おかけしてますというべきか……。 (山口)



ままやで日高先生を囲む会



「ままや」に来ていただいてありがとうございました。
いました。

お手伝いしていただいた方々ありがとうございました。くまちゃん、お肉、しいたけ
おいしかったー。そんなに、恐ろしげに寒くもなく、本当にほっとしました。「ままや」は
人が来て下ってこそ「ままや」ですので、また、みんなで集まりませうね。夏ならお泊
りも大丈夫です。いつでも、おくどさんでご飯炊きますよー。では、またいつか...

日時／ 2003年2月9日（日）

会場／ 甲賀町 こさじままや

14:00～ 日高先生をお迎えする

15:00～ インタビュー

15:30～ 糸さんの手作りこんにゃく
おくどさんで炊いたご飯
澤さんのイノシシとしいたけ
などお酒をいただきながら

塾生感想より

ままやのままさん、ありがとうございました。おいしいお惣菜もありがとうございました。
おくどさんのご飯はやっぱりおいしかったですね。楽しいひとときをありがとうございました。
出席は無理かなと思っていたのですが、何とか仕事をやりくりして出かけて良
かったわ。）（菅）

今日は、日高先生を囲んでいいお話を聞いて、おいし
い、かまどで焚いたまんまと手作りこんにゃくに、天川さ
んの見繕っていただいたお惣菜。そして、こんぜの山で取
れた、シシ汁のいのしし肉としいたけのバター焼き。どれ
も最高でした。

「ままや」ほんとにいいところですね。糸さん。心が温ま
りました。ありがとうございます。名田さんやら、菅さん
やら、西村さんやら、みなさん。お手伝いをありがとうござ
いました。わたし、何にも手伝わずにすみませんでした。
日高先生も、本当にたのしそうでしたね。よかったです。

これからも、3期生はいい付き合いを続けて行きたいと、心からそう思いました。（吉見）



「グループ分け」から「グループ研究合宿」まで

1月19日の第1回テーマ出しから4月13日の研究合宿まで3ヶ月を費やして4つの研究グループが誕生するまでのプロセスは、和気藹々の雰囲気の中で生き生きとした活気に溢れた交流ができました。これは、入塾以来「塾生の活動訪問」でこんぜ桃源郷に行ってすき焼きパーティをしたり、マキノでカヌー体験をしたり、西の村コンサート&おでんパーティなど塾生間の交流を目的に相互理解の機会づくりに取組んできた成果のあらわれだと思いました。

1. グループ研究に当たってのテーマ出し～グループ分けまで

1月19日～2月23日まで、計4回にわたって個人のテーマ発表をおこないました。

①1月19日

テーマ(思い)を出し合って、共有化してグループ分けをしてゆこうという最初のステップでした。必ず各自がテーマを出すというものではなく、聞くこと話すことによりグループづくりをしようという考えに基づいていました。この日は、7人のメンバーが発表しました。



②1月27日

前回に引き続きテーマ出しです。どんどん積極的に発表があり、この日までに14人からお話がありました。発表は口頭だけでも良いことにして全員が話しました。共通するテーマもいくつかありました。書かれて出されているものは資料として全員に配布されました。

③2月10日

個人からのテーマ出しは、書きものとして12人から出ました。もちろん、各回出席した人はみんな自分のテーマは話しました。この頃からみんなは、自分のやりたいテーマや興味あるテーマに関心が動き始めたようです。この人と一緒にやりたいなどの思いも芽生えてきたと思います。自分の活動とちがう分野のテーマについても興味が高まって、広い範囲の活動が見えてきました。このプロセスが大事なのだと思いました。

④2月23日

最初のグループ分けの日でした。グループ分けの前に個人発表～1人1分とボード書き込みタイムです。出席者19人全員が「未来塾で何をしたいのか」についてスピーチをしました。話すだけでなく、発表内容は黒板にも自書して明らかにしました。ここでは1人3つまで優先順位つけてテーマを選んで良いことになっています。まだまだグループを固定せず出入りが許される仕組みです。

つぎは、話し合いタイムです。フィールド別か、分野別か、プロジェクト別かということを議論しました。提案テーマ別のプロジェクトにしました。そして最初のグループピングタイムです。呼び込み

タイムでもあります。暫定的なグループ分けです。結局、グループは6つ出来上がりました。それでも、5月末頃まではグループ間の出入りは自由にすることを申し合わせました。個人個人の思いを消しこまないで生かして行くためです。

まさに、可塑性あるグループづくりの考え方でした。

⑤3月16日

この日は、2期生の卒塾式のあと塾生会をもって、前回分けたグループが輪になってそれぞれの思いを発表し、グループ以外の人で囲んで聞き質問するかたちで、3つのグループが順に出て各人が発表しました。時間は短かったのですが、セレモニーとして面白かったと思います。残り3つのグループは次回です。

⑥3月30日

いよいよグループ分けの本番です。この日は午前と午後の終日の時間をとって行われました。出席者は24名と最高の出席率でした。午前中は、前回の残り3グループの車座発表です。午後からは、今までの欠席者からもテーマ発表を聞きました。ここで新しいテーマが出て、かなり反響がありました。つぎに、メンバー入れ替え・新規グループタイムをつくりました。この時点で出入り自由な時間に移動することができます。その結果、新しいグループが1つできあがりました。この日新しく出たテーマに人が集まったのです。グループは整理されて4つになりました。最後にグループごとに集まって、グループでは最初のディスカッションをしました。そしてその内容を、グループごとに全員が発表しました。このあとは、いよいよ合宿研修でグループ内のコンセンサスを深めようという流れに展開されていきました。

2. グループ研修合宿からグループ活動スタート

近江八幡長命寺の湖水亭に1泊研修です。

午後1時に集まって、オリエンテーションのあと4つのグループに分かれて事業計画と予算作りをテーマにディスカッションをしました。

夜は、食事と交流会です。例によって余興やゲームでにぎやかに遅くまで親しく交流しました。司会や、酒、夜食の調達など役割もしっかり出来上がっています。

また、毎回新しいスターが誕生してエンターテナーの層が厚くなってゆきます。この日は、いつもしとやかなTさんがみんなをどっと和ませてくれました。楽しんでも乱れる人のないのも幹事の雰囲気づくりが良いからでしょう。

つぎの日は、前日のまとめ作業です。そして、今後は自主的に日や場所を決めグループ活動をすすめるための予定作りです。最後に、各グループからの事業計画の発表です。これで、4つのグループに分かれて行動することが中心になってゆく分岐点だが、グループ分けのあとも、できるだけ全体で顔を合わせる機会を作ろうと申し合わせました。



卒 塾 式

日時 平成15年3月8日(土)

場所 県民交流センター207会議室

17時～開会

日高塾長あいさつ

国松滋賀県知事あいさつ

修了証書授与(日高塾長より)

3期生代表 西村ますみ

記念品贈呈(山川理事長より)

代表 桑 昌見・山口 吾往子

3期生あいさつ

代表 吉見 精二

17時30分 閉会

熱のこもったグループ研究成果発表も終わり、塾長・運営委員の先生方の手厳しくも優しさの感じられる講評をいただきいよいよ終盤の卒塾式。

塾長より「苦しみ、楽しみながら活動し人間性が豊かになった3期生。何かをやりたがっている人達に何をやればいいのか示唆してあげれる地域プロデューサーになってほしい。」との言葉をいただき、県知事からは、未来塾を今後生かすには3代目(3期生)がしっかりとしていないと先がおかしくなるとの激励のことば。胸にきざみました。

3期生代表の吉見さんからは、ネットワークセンターに先ず感謝。塾生の交流や1・2期生から4期生へつないでゆく縦へと繋がる楽しさが語られました。未来塾が今後も発展してゆくことに期待して先ずは卒塾でした。



卒 塾 作 品 製 作

平成14年12月、3期生塾生の吉見さんを講師に、世界でただ一つの陶芸作品づくりに挑戦。未来塾で学んだ証として一生懸命作りました。

卒塾式の日には、吉見さんが3日3晩、信楽の登り窯で焼いてくれた作品に再会。割れることなくひとつひとつしっかりと個性を発揮して完成していました。ありがとうございました。見るたびに未来塾3期生の一員であったことを自覚できそうです。



グループ研究報告書

駄菓子探偵団		14
ハートアンドハート		52
グリーンツーリズム		80
てんしょく		108

なつ菓子い、お菓子い、だ菓子、さ菓子 しが駄菓子



卒塾報告書

淡海ネットワークセンター未来塾3期生
駄菓子探偵団グループ

西村ますみ（団長）・藤丸昌弘・松宮孝明
浅居浩・松田直子・西山順子

駄菓子
探偵団

目次

1. 駄菓子探偵団概要

1. 我々の研究内容とは・・・

＜検証1：紙芝居について＞

＜検証2：駄菓子について＞

＜検証3：駄菓子と紙芝居について＞

1. かんぴょう駄菓子レシピ

1. かんぴょう駄菓子アンケート結果

1. 検証1 紙芝居

1. 検証2 駄菓子

1. 検証3 駄菓子と紙芝居

1. 事件ふぁいる総集編

＜NO. 1～6より抜粋＞

1. しが駄菓子認定証

駄菓子探偵団概要・・・

発 足 平成 14 年 3 月

キャッチフレーズ

なつ菓子い、お菓子い、だ菓子、さ菓子 滋賀駄菓子
上から読んでも下から読んでも（しがだがし）だよ。
4C 仮面（懐かしい、お菓子、駄菓子、探し）を目標
に調査と研究が誓いの言葉。



活動目的

「駄菓子」「紙芝居」をツールにして懐かしい庶民文化を発掘し「コミュニティの再生」を目指す。私たち探偵団は、遊び心を大切にしながら心の文化を取り戻し、その心を未来につなげたい。とにかく楽しんで！

1. 地域活動の活性化
2. 住民の地域コミュニティ意識の向上
3. コミュニケーションを大切にした世代を越えた仲間作り

活動内容

- ・ 地域の中の特性を生かした駄菓子創作で地域の活性化
- ・ 紙芝居作りによる地域の活性化・お年寄りや子どもによる創作紙芝居
- ・ 上記の「駄菓子」と「紙芝居」を組み合わせる生かす地域コミュニティ
- ・ 広報誌「事件簿ふぁいる」の発行

今までの活動

日時	内容		広報発行
5 月 3 日	川西市	「やっさんの紙芝居」取材	事件ふぁいる N01 事件ふぁいる N02
6 月 30 日	彦根市	菓子問屋「三口屋」取材	事件ふぁいる N03
	長浜市	駄菓子屋「いせや」取材	
8 月 23 日	守山市	播磨田町地蔵盆にて地元につながるお話 紙芝居「子授け地蔵さま」を上演	事件ふぁいる N04
9 月 29 日	大津市	淡海ネットワークセンター 屋台村おもしろ劇場にて上記紙芝居上演	事件ふぁいる N05
10 月 27 日	草津市	草津市民交流プラザ 中間発表会	事件ふぁいる N05
H15.2 月 2 日	水口町	高尾敏夫宅 かんぴょう農家取材	事件ふぁいる N06

助成金申請について

今年5月に2つほど駄菓子探偵団で助成金を申請いたしました。そのうちの一つ「サラリーマン（ウーマン）ボランティア活動助成（大同生命）⇒14万円」を頂くことになり10月から活動の資金として活用。

我々の研究内容とは・・・

我々のグループは、現代社会のあらゆる面において効率性（あるいは経済性）、同質性（あるいは没個性）に偏重したグローバリズムの行き過ぎた進展とそれがもたらした地域のアイデンティティ（地域の個性）の喪失が、高齢者から子どもたちまで多様な人々が生き生きと暮らす健全な地域社会にとって大きな危機であり、この状況を少しでも改革するためには、日常 人々が身近に感じている、広がりをもつ地域（小学校区以下の範囲）での“コミュニティ再生”がまず重要であるという共通の思いに至った。

そして、その再生の手段の一つとして地域に密着していながら今はもう忘れ去られた伝承や昔話あるいは食材の掘り起こしと、それを素材にした紙芝居づくりや駄菓子づくりが有効ではないかと仮定し、調査と実践を通じて検証を行った。

短期間の取り組みであったが、現時点での検証結果（一部、仮説を含む）を要約して以下に示す。

ツール	その効果
創作紙芝居 手作り駄菓子	・ 地域の風土・歴史の再発見（地域アイデンティティへの気づき） ・ 高齢者の知恵・知識への尊敬 ・ 世代間のコミュニケーションの活性化 ・ 創る・演じる楽しさの共通体験（地域アイデンティティのもつ価値の共有化とその継承への動機付け） ・ ファーストフードからスローフードへのヒント
駄菓子屋	・ 店のおばちゃんとのやりとり（子どもたちの生活力、創造力のトレーニングの場） ・ 店のおばちゃんとの対話の持つ役割（少子・核家族化での地域における高齢者の役割、気楽なコミュニケーションの場） ・ 地域の「ほっとステーション」としての役割（安心して道草できる場、地域とのつながりを実感できる場、思い出に残るふるさとの原風景）

具体的には、以下の3項目で研究を進めてきた。別紙フローチャーも参照していただきたい。

①＜検証 1：紙芝居について＞

「地域コミュニティの再生」と言いつつ、グループ名は、「駄菓子探偵団」である。

それは、そのツールに、駄菓子がある！ 駄菓子が有効ではないか！と考えたからである。

そして、その駄菓子と聞いて想起したのが、幼少の頃の思い出にあり、今も昔ながらに伝承されている大道芸としての紙芝居の時に同時に提供される型抜きやポン菓子や景品つきのお菓子（駄菓子）である。

そこで、まず、紙芝居に着目し、その取材を敢行した。

紙芝居の取材

兵庫県川西市の「やっさん」に出会い、その紙芝居の上演や駄菓子の提供風景を取材した。（詳しくは、事件簿ファイル参照）

この取材報告で、一番に知ってほしいのは、紙芝居の前に群がる子どもたちの目の輝きである。コミュニティの再生に「紙芝居」がものすごいパワーをもち、私たちの目指していることのツールにきつとなるという確信をもった。そして、そこで提供される駄菓子類についても、子どもたちの周りでその光景を懐かしそうに、ほほえましく見守る保護者・大人の顔から、きつと有効なツールになるという確信をもたせてくれた。

地域に眠る「歴史と文化の伝承」を、紙芝居で！

「やっさん」の取材を終えて、いよいよやる気になった。そして、既存の紙芝居を上演するのが私たちの本来の目的ではないことも見えてきた。そう、滋賀県内、各地に眠る「歴史と文化」を掘り起こし、その上演機会を得て、「地域コミュニティの再生」に貢献することである。

掘り起こした素材をもとに

手作り紙芝居の上演

滋賀県守山市播磨田地区のお地藏様にあつわる話を聞き取り、紙芝居にし、地藏盆の時に、その地域の方々や子ども会の方の協力のもと、上演した。

まず、驚くのは、小さい子どもたちの反応ではなく、その保護者である若い大人の層の反応である。つまり、普段近く



紙芝居「子さづけ地藏様」絵：浅居 浩

を通りかかっている、そのいわれ等について知らなかった！　こういう話を子どもたちに伝えていきたい！　こういう話の中に、ずっと伝え残したい「心」があるような気がするという反応である。うれしかった。純粋に、本当にうれしかった。子どもたちの反応の素晴らしかったのはもちろんである。

キラキラ倶楽部のバックアップ！

この経験をして、私たちが思い描いたのは、毎年、播磨田地区で紙芝居をし続けるということではないということである。

ずっとその地域に居つづけるのではない！

私たちの活動の有効性に気づいてくれたその地域の方々によって、継続され、また違う話等を紙芝居にしたり、寸劇やミュージカル等にして発展させてくださることを願う。

家に、子どもが小さかった頃の絵本がたくさんあり、何とか有効に活用したいと思っていたが、何かヒントをもらったような気がするといっていたおばあちゃんが居たこともうれしかったことだ。

他地域でもやっていきたい！

この経験をもとに、他地域でもやっていきたい。その過程の中では、その地域で製作スタッフを募集し、上演に参加してもらい、年々上演回数を増やし、その地域において発信していったらいいと思う。

②＜検証２：駄菓子について＞

あれ！駄菓子がメインじゃ……。そんな思いはメンバーの中にきちっと残っていた。そこで、駄菓子に注目すべく、駄菓子屋の取材を敢行した。

駄菓子屋の取材

滋賀県彦根市の「三口屋」という菓子問屋と滋賀県長浜市三ツ矢元町の「いせや」という駄菓子屋を取材した。（詳しくは、事件簿ファイル参照）

駄菓子屋に残る、「地域コミュニティ」

取材して、駄菓子屋にこそ、「地域コミュニティ」が残っているということがわかった。コンビニでは、一言もしゃべらずに買い物をして出て来ることはできるが、駄菓子屋のおばちゃんは、「あいさつすること」「買い物のコツ、計算の仕方」「家の家族のこと」等の会話を大事にするというのである。

また、駄菓子屋は、店主となじみのお年寄りたちのコミュニティの場にもなっているということがわかった。そうすると、その方々と買い物に来る子どもたちとの間にも、交流が生まれているのである。

駄菓子の有効性！ 発掘の意義と創作意欲！

これらの取材から、駄菓子のもつ魅力について確信をもった。

そして、そのことから、滋賀県内の各地に残る手作り駄菓子や駄菓子屋を調査し、聞き取り、まとめていったり、再生の手助けをしたいと考えた。

そのためには、こまめに、聞き取ったり、各地に会員を増やしていきたい。それぞれのレシピをしっかりとまとめて、蓄積していきたいと思う。

「しが駄菓子」として顕彰！

これらの活動を形にし、つなげていくためにも、「しが駄菓子」として駄菓子認定証を発行していきたい。
・・・第1号は水口町の高尾敏夫さん

「駄菓子屋サロン」の開設！

そして、よい機会をとらえて、「駄菓子屋サロン」を開設し、文化交流の場を作っていつてはどうだろうかと考えている。

③＜検証3：駄菓子と紙芝居について＞

いよいよ見えてきた、駄菓子と紙芝居の因果関係！これまでの研究によって、駄菓子と紙芝居の接点がだいぶ明らかになってきた。

そして、もう1つ、鮮明にイメージできてきたことは、紙芝居屋のプロになるのではない！ということである。

つまり、紙芝居上演の練習をするのではなく、地域に入り込み、聞き取り、その地域の伝承すべき歴史と文化を紙芝居にすることが主である。そして、駄菓子とつなげるのである。そこで、その両者をうまくミックスさせた研究素材として、滋賀県甲賀郡水口町に残る、「かんぴょう」作りに注目した。

「かんぴょう」作りの取材

かんぴょう作りといえば現在は栃木県壬生町が有名だが、滋賀県甲賀郡水口町八光が、ほんとうの発祥の地である。その八光で、先祖代々かんぴょう作りをされてきた高尾敏夫おじいちゃん一家を訪ね、取材を敢行した。（詳しくは、事件簿ファイル参照）

「地域の歴史と文化」を掘り起こし、それを、紙芝居に！



紙芝居「福兵衛どん」

取材を終えて、おじいちゃんのあつい思いを受けて、創作に入った。当然、どの家でもかんぴょう作りをしてほしいと訴えるのではない。

- ・ この地域が発祥の地だったんだ！
- ・ その当時、この地域の人々の生活を支えたのだ！日照りにも強いかんぴょうが、命を救ったのだ！ということ

- ・ それから今まで、この伝統を、面々と支え、続けてこられた人たちが居るんだ！
 - ・ 一人ひとり、かんぴょうとのかかわり方は違っても、この地域の誇りの1つなんだ！こんなことを、紙芝居で伝えられたら…。そして、地域の人たちが語り継いでくれたら…
- (紙芝居の上演については、こうご期待！)

そこから、創作駄菓子を！

そして、かねてからの課題である、紙芝居と駄菓子との融合である！

- ・ 今回は、かんぴょう！
- ・ 現代の子どもたちがより身近に、普段から接することができるように！
- ・ 手作りであること
- ・ 地元の方たちが工夫してこられたものを伝えていく
- ・ そして、私たちの悪戦苦闘の創作駄菓子！

手作り
かんぴょう
菓子



かんぴょうゴマ

かんぴょうチップ

砂糖や黄粉
をまぶして
もおいしい

その提供の場を、地域の子どもたちに



水戸黄門に出演した高尾氏とふくべ

当初は、3月、子ども会で小学校6年生のお別れ会が催されると聞いて、その時と思っていたが、ちょっと日程的に無理みたいなので、夏、本当にかんぴょう干し（収穫）をされるときをうまく利用し、披露できたらなと思っている。（思わぬ、体験学習が仕組めるかも…！）

新たな形に発展！・・・かんぴょうの実「ふくべ」そのものを素材として！

- ・ 取材の中で、何とかかんぴょうを、まき寿司中に入れて
いるものというだけではなく、広めていかなければ・・・
という思いが強くなった。
- ・ そんななかで、もともとかぼちゃの大きいような形を
しているかんぴょうの実「ふくべ」に注目してみよう
というアイディアが出た。
- ・ 子どもたちの宝物になったらな～（伝統になったりし
て・・・）
- ・ 「田園アート」っていうのはどうだろう。この地域で
時々見られるのだ！
- ・ 畑の真ん中に2～3の「ふくべ」がころがっている風景を！ まさしく、野外のアート
ととらえることはできないだろうか。これもこの地域の風物詩になりえる！

ふくべのアート
（くりぬいて中にローソクを）



ヒューマン・コミュニティー・ルネッサンス（心地よい人間関係の復興）

今までの研究活動を通して、現代社会の人間関係の希薄化というものが浮き彫りになってきたように思う。

子どもたちの生活をみても、テレビ・コミック・テレビゲーム・携帯電話の急激な普及などからコミュニケーションの希薄化が問題点として浮かび上がる。

私たちの活動が、本来大事にされるべき「心地よい人間関係」を取り戻すことへの一助となることを願ってやまない。

～今後の活動展開～

検証の結果、各ツールは地域のコミュニティ再生に取って、少なからず有効であることが認められた。

これを踏まえて、今後もグループ活動を展開していく予定である。

ただし、我々の活動の原点がグローバリズムへの抵抗であることから、その活動の歩みはゆっくりと楽しみながら一歩ずつメンバーの足並みをそろえて発展的継続をしていきたい。

言い換えれば、“スローライフ”の実践である。

ツール	当面の活動	発展的活動
創作紙芝居	・ 埋もれた伝承・民話のサーチと紙芝居づくり ・ 伝承者の顕彰	・ 駄菓子屋サロン（コミュニティビジネスとして商店街の空き家活用）も考えられる。
駄菓子づくり	・ 駄菓子屋リサーチと所在マップづくり ・ 埋もれた食材のサーチと駄菓子レシピの提案および“しがだがし”マップづくり ・ 伝承者の顕彰	同上
情報発信	_____	・ ホームページの作成 ・ 創作ミュージカル（地域の音楽家とのセッションなど） ・ 活動記録の出版
その他		・ 活動助成金の取得

～情報発信のもととなる本作りを目指して！～

集大成はまだまだだが、目指すところをしっかりとしたいという願いも生まれた。
また、地道に、それぞれの地域に入り込み、「聞き取ること」の重要性も実感した。
このことも大事にしながら、きちっとした本にまとめていきたいと思う。
そのためにも、今後、以下のような計画をもって望みたい。

- 地域に残る「忘れ去りたくない」「未来世代に伝え継ぎたい」素材を紙芝居にしませんか！という情報発信
- 各地に残る大事な「駄菓子屋」をまとめてみませんか！情報提供ください！という情報発信
- 各地に残る手作りお菓子（駄菓子）を埋没させることなく、未来永劫伝えていくため、まとめて見ませんか！という情報発信
- これらを、滋賀県地図にプロットし、特色あるマップにする！
【駄菓子屋 MAP】 【地域駄菓子 MAP】
- それらの情報を集約する「駄菓子探偵団」ホームページの立ち上げ
- 地域会員の募集と、それをつなぐネットワークの形成

以上、まだまだ夢は大きくですが、着実に一歩ずつと思っていますので、応援のほどよろしく願います。

かんぴょう駄菓子レシピ

水口かんぴょう農家の高尾しげさんより

●かんぴょうの砂糖漬け

- ① もどしたかんぴょう(もどし方は下記を参照)を軽く水を切り、一口大にむすぶ。
- ② 厚手のなべに①と同重量の上白糖と、①を入れて水分がなくなるまで煮る。
- ③ さましてからグラニュー糖をまぶす。

駄菓子探偵団研究結果より

●かんぴょうのきな粉まぶしと胡麻まぶし

- ① もどしたかんぴょうを 13～15 センチに切る。
- ② 厚手のなべに①の 80% 重量の上白糖と、①を入れて飴状近くまで煮る。
- ③ あら熱が取れたらきれいに結び、きな粉・胡麻をまぶして軽く押さえつける。

●かんぴょうチップス

- ① もどしたかんぴょうを軽く水を切り、一口大にむすんでペーパータオルではさんで十分に水気を取る。
- ② 低めの油でゆっくり揚げて、塩をふる。



ちょっと上級の和菓子風レシピ

水口かんぴょう農家の高尾しげさんより

●かんぴょうのゼリー

- ① もどしたかんぴょうを小さめの一口大にむすび、甘く煮る。
- ② 農協青りんごゼリー液を分量同どうりに作る。
- ③ 型に半量だけ流し込み、冷やし固めてから①のかんぴょうをのせ、残りのゼリー液を流して固める。

駄菓子探偵団研究結果より

●かんぴょう葛もち



- ① もどしたかんぴょうを細かく刻み、砂糖と白しょうゆで煮ておく。
- ② 本葛粉 50 g に水 200cc を徐々に加えて溶かし、上白糖 80 g も加えてよく混ぜる。
- ③ ②を中火にかけ、手早く混ぜ乳白色になったら火を止め、熱いうちに木杓子の上で一個分にまとめ、水でぬらした手で①をつつみこむ。
- ④ 蒸し器で透明になるまで 5～6 分蒸し、全体に水をかけて一気に冷やす。

かんぴょうの上手なもどし方

水洗いして少量の塩でやわらかくなるまでもむ。

塩を洗い流して水気を絞り、たっぷりの熱湯で使用方法にあわせてゆであげる。

◆ かんぴょう駄菓子アンケート結果 ◆

研究発表時に、団員が試作した「かんぴょうの駄菓子」を試食（かんぴょうチップ、胡麻まぶし、きなこまぶし）をして頂きました。下記のとおりアンケートに対してチップスが一番人気で、酒やビールのつまみにという声がありました。きなこは、食感や甘味が良かったなど意見が多く出ました。胡麻は、歯ごたえと香りが良かったという意見があり、きなこ、胡麻とも甲乙つけ難いという意見がありました。



創作かんぴょう駄菓子の感想をお聞かせください。

また、3種類のうちで、どれが美味しかったですか。

【美味しかったもの】



かんぴょうを使った駄菓子のレシピのアイディアがあれば、ぜひお聞かせください。

回答：かんぴょう麺・ぼん菓子、レモン味、シナモン味、黒砂糖、ココア味、チョコバー、フライ、かんぴょうラーメン、はちみつ、梅ジャム味、ヨーグルト味、カレー味など

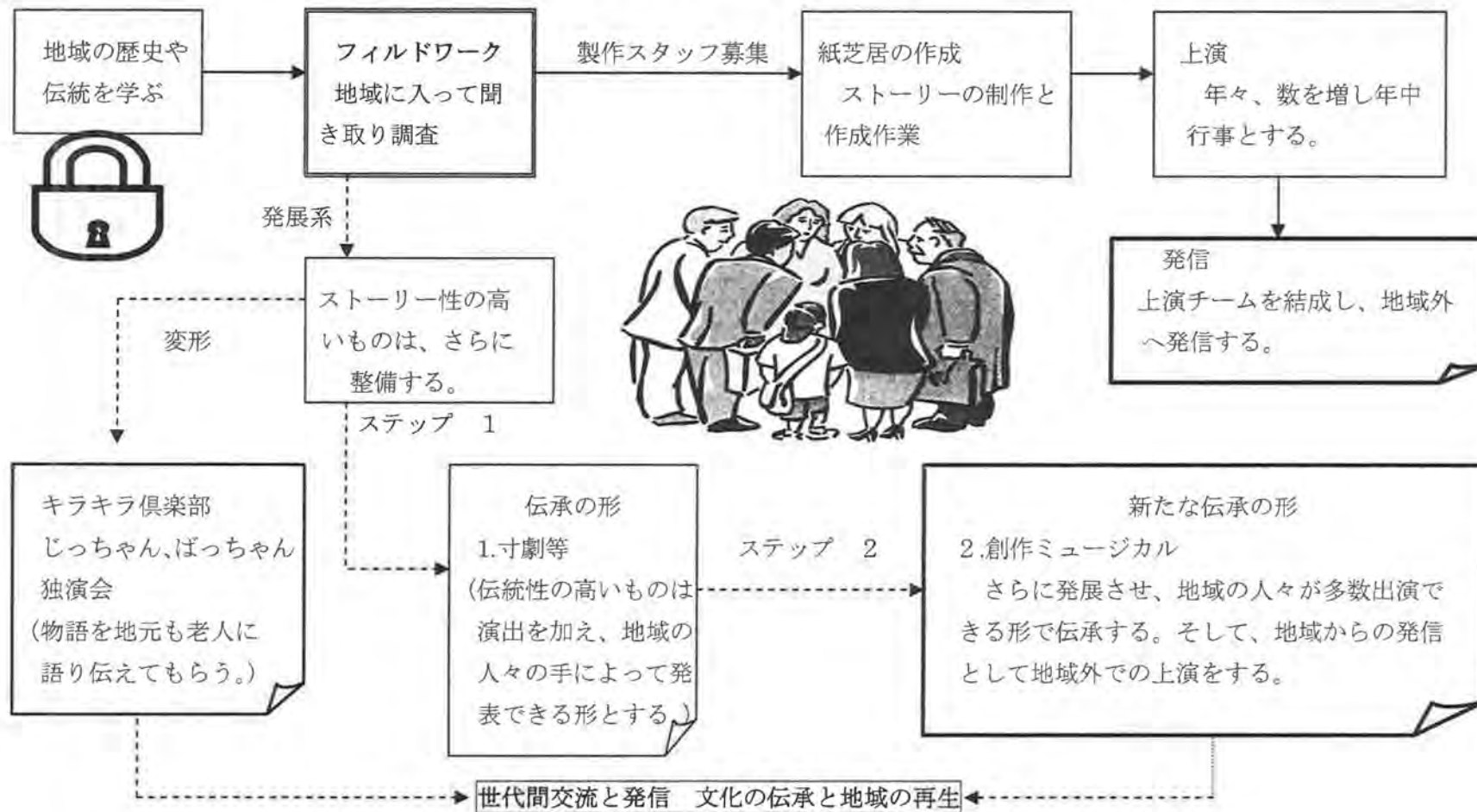
駄菓子探偵団では、滋賀県ならではの“しが駄菓子”を発信していきたいと考えています。“しが駄菓子”としてお勧めな食材やふさわしいテーマがありましたら、教えてください。

回答：干し柿、こんにゃく、米、はす、日野大根、へちま、水菜、小豆、近江栗、イチゴ、ブルーベリー、マスカット、もち米、ひしの実、かもうりなど

検証：1 紙芝居

歴史と文化の伝承の形

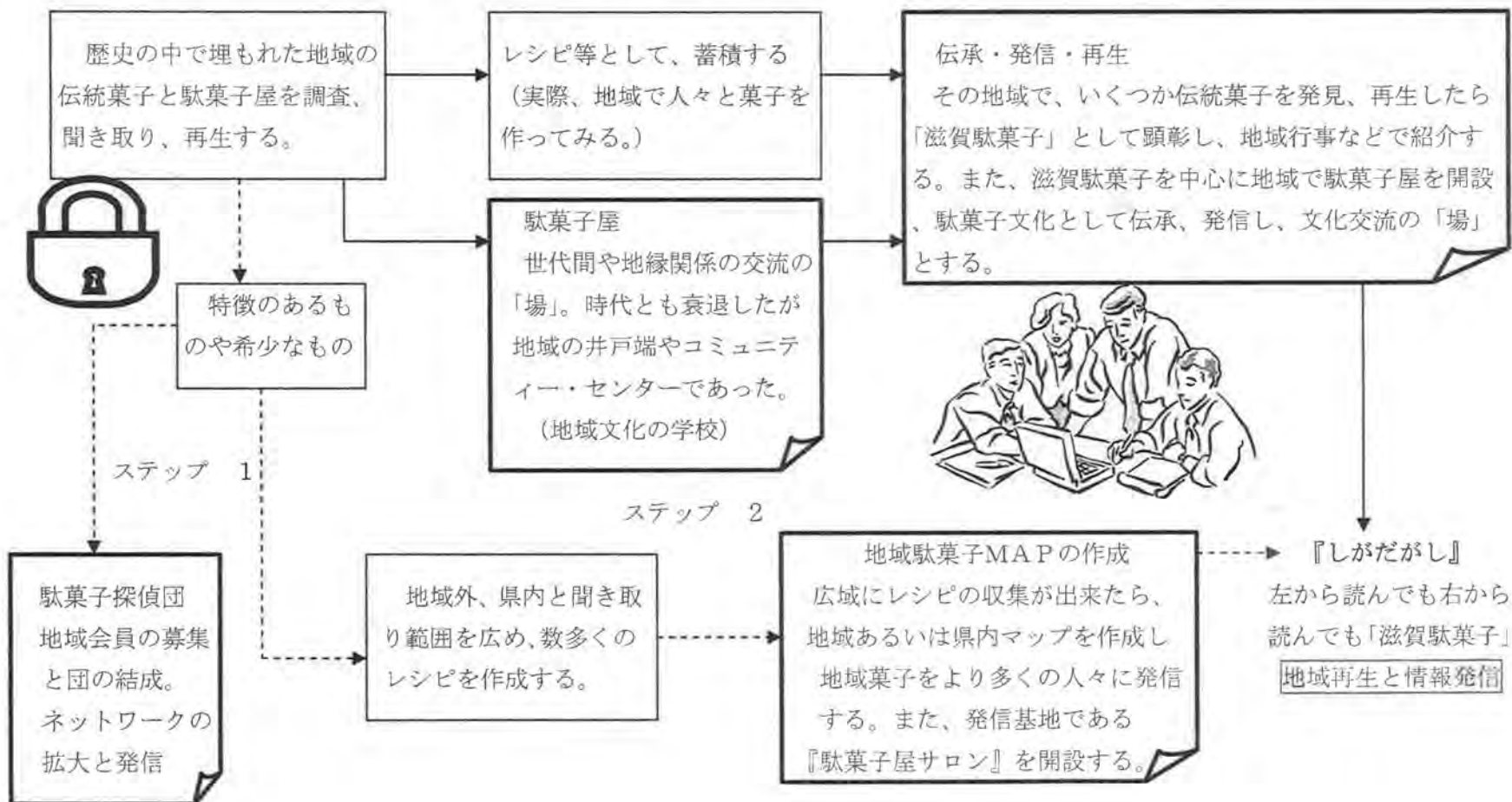
地域に眠っている「歴史や文化」の中で、世代間を超え伝承すべきものをその地域の人々とともに顕彰し、紙芝居という形にまとめる。



検証：2 駄菓子

歴史と文化の伝承の形

地域で忘れられた「地域の伝統菓子」に注目し、また、子供たちや老人のコミュニティの「場」であった駄菓子屋。これら全てが、地域文化であり、その駄菓子の作り方等を地域において学び再生することによって、世代間交流や地縁関係の再構築を図る。



検証：3 駄菓子と紙芝居

紙芝居と駄菓子について、調査を行いその因果関係を探る。

紙芝居が商売として成り立っていた頃、子供の気をひくための「道具（生活の糧(かて)）」であった。



駄菓子探偵団

事件簿ふぁいる

総集編



事件ふぁいる No. 1 紙芝居検証

やっさんの紙芝居 安野侑志氏取材

日時／2002. 5. 3 場所／兵庫県川西市清和台

「怪人：やっさん」発見！



2002年5月3日、それまでまだ誰も見た事のない「怪人：やっさん（本名：安野 侑志氏）」

阪急オアシス清和台店（兵庫川西市）に現れるという有力情報を得て、我ら「駄菓子探団」が全員集合し、現場へと赴き、遂にその正体を解き明かすこととなった。

現場は市内のショッピングモール街の一角で、既に子供たちに取り囲まれた

「やっさん」の姿があった。遠巻きに調査開始した…。作務衣に身をまとい、愛車（昭和30年代の運搬用自転車）に大きな黒い箱を乗せ、しかも、「犬（ワン）夜叉」「ポケ（デキ）モン」「とっこ（やっこ）ハム太郎」など等、子供たちが喜びそうなプロマイドをたくさん所持していた。しかも、割り箸にあめをカラメてせんべいのような物でサンドし、チョコレート色の妙な液状のものでせんべいに絵を書き込み広場に子供たちに与えていた。さらに、そのかたわらで「おばちゃん仮面」も子供たちにピンク色の板状のようなものを手渡している。実に怪しい様子であった。

調査中

Q：紙芝居の内容が非常に説明的では？

A：「教えのようなもの」例えば、交通ルール、子育ての苦労等

Q：子供たちへの語りかけは？

A：子供に語りかけているようで、実は親にも語りかけている。



Q：「やっさん」は今の世の中、何が大切だと思われていますか？

A：アナログ的な人間関係、例えば、会場でも「大きい子と小さい子」「いじめといじめられ」を体験する場が大切。

Q：紙芝居のネットワーク等で、滋賀に誰かいませんか？

A：現時点ではない。

Q：紙芝居には、文字がほとんど書いていないようだが？

A：オリジナルな語り、読み芝居

Q：紙芝居は誰が考え、製作するのか？

A：昔のオリジナルと自作のストーリーで、製作は専門家に任せる。「紙芝居劇団」のオーナーなんです。



Q：何故、屋外にこだわるのか？

A：紙芝居は大道芸であり、屋外はその原点であるから。

Q：何故、紙芝居なのか？

A：昭和47年に免許を取得し、老後の楽しみとして始めた。その背景に、子供たちが通りから消えるのが寂しいと思ったから。

Q：行政との関係は？

A：川西市と年間契約（150万円程度）をしている。今日は、子供の日のイベントとして行っている。他にも、市内の幼稚園や保育園老人ホーム等もまわる。

Q：市と年間契約しているのに、駄菓子売っているのは？

A：一種のこだわり、紙芝居と駄菓子という本来からのスタイルを厳守。しかし、その売上の5割ほどは還元するようにしている。

Q：売上や後継者問題については？

A：1日1万円から、日曜日は2万円の売上がある。後継者はいない。順調に行けばビジネスにもなるが…、パトロンが必要である。しかし、今日の不況下では、お勧めできない。

Q：生意気な子供もいたが、終盤になるとみんなやっさんのペースになっているが？

A：子供でもあくまでお客さんであり、いかにこちらに振り向かせるかは難しい。相手は、上の立場となっているが、導き方によって立場も逆転する。そこがまた面白いところでもある。子供たちの目が輝いている

Q：紙芝居の中に、「死」の残酷なシーンがあったが？

A：泣き出す子供もいるが、あえて「命」の尊さを知って欲しい。

Q：小さな子供を前列にしたり、交通ルールのクイズをおこなったりしているが、行政からの指示か？

A：大きい子と小さい子の競争は、いじめの構造と同じで大きい子がどうしても前の席をとるため、予め小さな子を前に座らせる。別に行政の指導はないが、還元の手法である。行政からの指示は別にある。

Q：できるだけ多くの子供に、還元するための工夫は？

A：目配りし、できるだけ指名できるようにしているが、実際は難しい。ブツブツ文句をいう子供もいるが、小さい子供のために「アンパンマン」を登場させている、これである程度モウラできる。

Q：親に教えてもらって答えている子供もいるが？

A：ある種、仕方のないこと。大人も参加していいと思っている。イベントでもあるし。

Q：これは、一種のコミュニティ・ビジネスですね？

A：その通りだ。

「やっさん」調査報告書

1. 身長は1 m60 c m前後かな。
2. 体重は70 k g くらい。
3. やや小柄だが、体格は良い。
4. 出身は山形県で育ちは東京だと。
5. 顔は、やや大きめで牛乳ビンの底のようなメガネを使用。



「やっさん」の元気の良い声は、何か心がスカッとする様な響きがあった。屋外にこだわり、マイクも使わずにあれだけの声が出せるのには少々驚きの観があるが、その声の魅力は、子供たちも十分知っているようである。また、ビジネスと言えども子供たちへの「還

元」は、まさにNPOの原点であり、紙芝居と言う伝達機能は「戒めや教え」の伝承の場となっていた。これこそ、今、ゆとり教育が求めようとする家庭、地域塾（家庭や地域で子供を育てる）ではないのか？

次々と届く報告に、「やっさん」の実態が明らかになってきた。また、当初なぞとされていた割り箸にあめをカラメてせんべいでサンドした物は、実は懐かしい「駄菓子」で、



チョコレート色の妙な液状「ソース」と判明、ちょっとアン・マッチングで創造出来にくい味、また、そのかたわらにいたのは「やっさんの奥さん」で子供たちにピンク色の板状のようなものを手渡していたのは、「方抜き」と呼んでいるこれも一種の駄菓子でそこに「ハイ!...、何となくいい顔していませんか？」描かれている形をくり抜いたり逆に周りを残してその形をくり抜いたりして、上手に出来たら懸賞が当たるというものだった。

時代や世代を超えて「駄菓子」は、脈々と生き抜いてきた。紙芝居と駄菓子という実に不思議な組み合わせはなぜか懐かしい雰囲気を出していた。

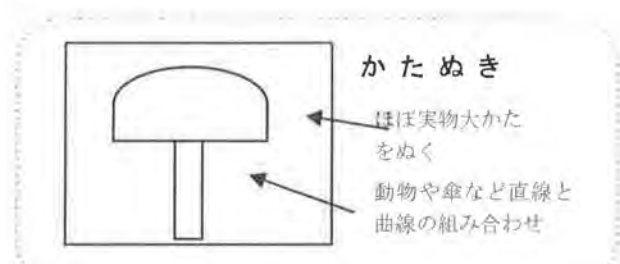
切ないような少年時代に遡って、夢中で方抜きに挑戦したけれど菓子の大きさが「あんなに、小さかったっけ」と思ったのは、我々だけであったのだろうか？

事件簿ふぁいるNo. 001 より抜粋

◆青空劇場の前座 やっさん Part2

14時50分 阪急オアシス・センターモール前に到着

すでに青空劇場のセットは完了し、ヤッサンが駄菓子、お連れ合いさんがかたぬきを販売していた。時折、駄菓子を作っているヤッサンと子供たちが大きな声でやり取りをし、コミュニケーションをはかっている。私たちはかたぬきにチャレンジしたが、浅居さんのみ成功。さすがはアーティスト！子供たちを見ると、何枚も買ってチャレンジしている子や、つばをつけてやわらかくしてからかたぬきをしている子も。ちょっと水で濡らしてやるとうまくできるそうで、「昔も今も変わらないなあ（笑）。昔のかたぬきの方が大きくなかった？」と藤丸さん、西山さんが話していました。



◆青空劇場のはじまり、はじまり

15 時 05 分 駄菓子・かたぬき販売を一旦中断して青空劇場紙芝居座の始まり

紙芝居の内容（順番に）途中で1回休憩あり

○クイズを交えて交通安全

印象に残ったこと

- ・道に飛び出して交通事故にあい、首がとれ、血が大量に噴き出している子供の絵
- ・お母さんのお腹に何日いるのかという質問

○黄金バット

○紙芝居のおっちゃんにお菓子を買いに行く子の話

○ヤス坊（40年前の紙芝居）ーシャボン玉にまつわるヤス坊と妹の話

○クイズー動物、キャラクターあてなど

紙芝居はヤッサンのテンポの良い口調で、子供たちに質問を投げかけたり、ダジャレを言ったり、クイズなどを交えながら子供たちとたっぷりコミュニケーションをとりながら、進められる。クイズでは景品をもらえることもあって、子供たちは一生懸命手を挙げて、大きな声を出している。子供たちの声がだんだんと大きくなり、最後は興奮の渦につつまれたまま、おしまい。

16 時 30 分頃 青空劇場紙芝居座の終わり

子供たちは駄菓子、かたぬきを買い求めるために大勢順番に並んでいる。私たちは一足先にセンターモール内のお好み焼き屋で、お疲れさま、乾杯。

17 時頃

ヤッサン、お連れ合いさんとの交流（松宮さんの記録より再現）

○今の世の中で大切に思っていること

アナログ的な人と人との接する機会が減っているので、いじめ、いじめられの体験学校のような機会を作っていきたいと思い、紙芝居をしている。

○紙芝居について

紙芝居は顔を隠して読むというイメージがあるが、それだと読み芝居になってしまい、テレビに近くなってしまう。また、絵本とも違った魅力があり、絵は1つの要素でしかなく、絵本の絵自体はひとつの作品である。紙芝居は、ひとつはせりふを言う「語り」、ひとつは「抜き」の技術が必要である。

○参加者・子供たちをみて

- * 参観していてどんどん子供の声が大きくなり、生き生きしてくるのがわかる。一人の親が「子供ってこんなに大きな声が出るんやな」とつぶやいていた。それよりもその周りの親・大人の表情が段々とやわらかくなっていくのがわかる。子供たちに語りかけているようで、親（大人）たちに話している部分も多いのでは。

子供はものすごく性能の良い録音機であり、録音機の再生の回路を開けようとしている。子供と同じ立場で接し「双方向紙芝居」をしているので、静かに読み聞かせる必要はない。テレビやゲームは一方向である。

指を刺して、できるだけ多くの子を当てる。今の世の中は結果の平等を求めすぎで、（機会の平等は必要だが）、大人が子供に合わせようとすると、子供は蜚蜚楼のように逃げていく。子供はおべんちゃらをつかってでも、大人にあわせてくる。小さな子の前に大きい子がいると見えないということを教えるだけでも時間がかかった。全国巡回して思うことは、子供が全国どこでも画一化してきていることである。

○街頭で演じることのこだわり

街頭で演じるのは、エネルギーが充満しないようにである。雨の時などに室内で行うこともあるが、エネルギーがこもってしまう。街頭は場の空気、臨場感がある。

○紙芝居に関わる思い

大阪府は全国で唯一「紙芝居業者条例」があり、免許も取得。30代で昭和47年から約30年間続けてきた。戦後は軍隊から帰ってきて職のない人がやっており、昭和45年頃から子供が町から消えてきたので、老後の楽しみにしようと思っていたが、紙芝居をすることに。あんな生き方をしている人があることを見せたいし、憧れる商売にしたい。

ヤッサンは紙芝居のプロデューサーではなく、紙芝居劇団のオーナーである。紙芝居復活論には、スポンサーが必要で、コミュニティ・ビジネス的な発送もある。最近の講演は自治体、教育委員会などで、美術館、博物館からの依頼もある。

○駄菓子の役割

商品であり、買うのに並んで待つことがいい。できあいのものや並べておくのはあまりよくない。天ソ（せんべい、てんかす、レンニユウ）もあり。

○滋賀のネットワーク 残念ながら、ない。

18時頃 帰路へ

参考ホームページ

子供が元気になる青空劇場「ヤッサンの紙芝居」

事件簿ふぁいるNo.002より抜粋



事件ふぁいる No. 3 駄菓子屋検証

日時／2002. 6. 30

場所／長浜市 駄菓子屋「いせや」 水田みちこ氏

彦根市 菓子問屋「三口屋」

片隅のおもちゃ箱

ちょっと思い出してください？子供の頃十円玉を握り締めて近所の駄菓子屋に通い詰めたことを、ちょっと切ない感じででもほのぼのとして、あの頃買いたくても買えなかった駄菓子が、小々、姿かたちを代えて店頭に並んでいる。まるで「タイムスリップ」したような空間がそのこの広がっていた。

彦根の「菓子問屋の三口屋」は、まさにそんな場所だった。週末の午後3時を越えたにも関わらず大勢の客でにぎわっていた。店は、倉庫（間口7m×奥行15m）をそのまま使っていて、常時5千から7千の品を置き、しかも全商品2割引きのとあってはこの賑わいも納得する。所狭しと菓子や玩具等が並べてあった。その玩具の中には、かつて子供だった頃の懐かしい品々があった。

店のご主人には、お話を聞けなかった（忙しくて取材拒否）が、2代目がレジのお客さんを相手しながら、取材に答えてくれた。流石である。

Q「この店は、何年やっているのか？」

A「昭和35年頃からやっていて、現在の場所に移転してきてからも15年ほどになる」

Q「商売として成り立っているのか？」

A「親がやっているので仕方が無い」

Q「メーカーや職人はどうか？」

A「職人は、確実に減っている。また、メーカーも販売価値の低いものは少しずつその数を減らしている。」

Q「子駄菓子を作る後継者はいないのか？」

A「現時点ではいない。」

Q「結構お客さんが入っているようだが？」



A「週末は、こんなものでしょう」

Q「お客さん何処でこの店のことを聞いてくるのか？」

A「ほとんどのお客さんは、常連さんで、口コミによってが多い。全品 2 割引きで扱っているのです、それも影響しているかもしれない。」

Q「最近、こうした駄菓子を扱う小売店が少なくなったから、問屋で直接売っているのか？」

A「それもありますが、大人が喜んで買いに来られたり、地域のイベントなどに使うため数多く買いに来てくれたりするので。」

Q「駄菓子の扱っているメーカーは？」

A「現在のところ、カバヤ、フルタ、オリオンなどがある。」

Q「これからこういう店をやろうとする人は？」

A「もう無いと思う。現状を維持しているだけで、家業じゃなければ継いでいない。」
形や品が変わっても、変わらぬものがここにあるような気がする。駄菓子をツールに子供は初対面で興味津々、大人は懐かしいに感激といった感じで店内はぎわっていた。

コンビニや大型店が軒を連ねる中、菓子類のみで今日まで営業を続けられた背景に、何か秘密があるようだ。それが何であるかは明らかではないが、強いて言うなら人間の成長過程において『駄菓子』は深い関わりを持っていて、前述したように大人と子供が共有」できるツールとなっているのではないかと、そこから発展する会話や行動が、やがて「伝承」へと移っていくのではないかと。

今、流行り病のように流行する物事や言葉が、果たして「次世代に伝承するか」と言えば、疑問が残る。安易に、大きな投資が大きな成果を生むとは言えないのではないかと。例え、品袖素朴なものであっても「世代を超えて共有」できれば、それはそれなりに形を替え次世代に「継承」されていく。つまり、駄菓子はそんな可能性を秘めているのではないだろうか。

『三口屋』さんは、ディスカウントやコンビニのハシリのような要素を持ちながら、スー

パーに負けない品揃えをしている。また、地域の客の「口コミ」によって安いが看板となり、新しい客を呼ぶ「近江商人の訓えに、客が客を

おかしい！怪人 4C 仮面の仕業か？
ム・ム・ム…
この金田一をさて置いて



呼ぶ」とあるが、正にこのことではないだろうか？客としては、好きなものを好きなだけ選べ、しかも会話が弾む。なかには、「子供の頃貧しくて、これ買えなかったよなあ」と駄菓子屋を懐かしむ声まであったりして、店内はいつまでも賑わっていた。まるで、押入れの隅にあったおもちゃ箱を見つけ、片付けもせず、いつまでも懐かしんでいる風景に類似するところがあるようだ。

次の取材地は、長浜市内にある駄菓子屋『いせや』さんである。その昔、この店は「饅頭」を製造販売していたようだが、戦後、国の貧しき環境や物資不足の影響から家業の転換を余儀なくされた。

この店は、長浜市の北部三ツ矢町にあり、約 100 年ほどこの地で生き抜いてきた。

駄菓子屋のおばあちゃん先生

子供の頃、口うるさいおばあちゃんの店に何故だか駄菓子を買いにいく自分があったが、何に魅力があって通いつめたのか自分自身でも不思議である。だが、その口うるささを今思ってもイヤミが無いように思う。そんなところに郷愁を寄せるのだろうか。

Q「この店は何年くらいやっておられるのか？」

A「約 100 年、戦前は塩饅頭を作って売っていたが、約 50 ほど前からは駄菓子屋を営むようになった」

Q「おばあちゃんはいつこの家に来られたのか？」

A「結婚か？結婚したのは、昭和 24 年頃。」

Q「駄菓子屋は、いつから始めたのか？」

A「勤め人だった夫が、体を壊し家に居るようになってから始めた。」



Q「今と昔の客層は？」

A「ほとんどが、近所の子供。昔は、大勢来たが今は近所の子だけ。けどたまに大人が懐かしんで来る。この間も、工事をしていた 20 歳過ぎくらいの兄ちゃんが、ジュースを買って入ってきて懐かしがっていた。」

Q「最近の子供の変化については？」

A「この辺りの子供は、みんなん良い子や。たまに、駄菓子の買い慣れん子が来て何時までも迷っているの、叱ったら、後で親が怒鳴り込みにきたことがあったが、買いなれている子は、この買い計算も早い。そうやなあ子供の変わったことと言われると、黙っ

てることかな。

店といっても人の家に入る時は挨拶ぐらいするやろ、この間も、黙って入ってきたからしかってやったら、挨拶しおった。最近、コンビニにでも黙って入って黙って買いのもして帰るが、それとおんなじように思っている。」



Q「男の子と女の子では？」

A「随分違う。私も女やけど、女の子は何時までも恨みよる。その点、男の子はあっさりしてる。また、懐かしく思ってくれるのも男の子や。この間も、子供の頃、よく来てくれた子が大人になって寄ってくれた。おばちゃんによう怒られたなといいながら懐かしんでくれていた。男の子の方があっさりして良い。私も男の子のほうが好きやしなあ。」

Q「これからも続けられますか？」

A「近所の子に、おばちゃん何時までも店やってナと言われる。こんのものを売ってもいくらにもならないが、ボケ防止に続けているだけや。でも、最近、小学校や中学校、また、養護学校からも見学にきてくれて、励ましの手紙をたくさん送ってきてくれるので嬉しいことや。」

Q「子供意外に地域の人は？」

A「最近、お年よりも良くここに来る。集まると病気の話やが、団らんの場合やな」
最初は遠慮がちにポツポツと話していたが、段々、話が弾んできた。不思議だが、そんな時の人間の顔って本当に「いい顔」をしている。また、何十年も前に取材を受けた時の広報誌を、大切にあってあったらしく、奥から出して我々に見せてくれた。
それは、長浜市の「アメニティーニュース（1989.1.13 発刊）」と題し、今から13年程前に出されたものだった。何十年の間、子供たちを見て来ただけに「一言ひとことのことばの重み」と「ほのぼのとした温かさ」を感じた。子供に、社会や世の中のルールを教えて、地域の人たちの良き相談相手となる地域の「母親的存在」でもあった。
その昔、駄菓子屋さんは地域のサロンだったのかもしれない。政治・経済・産業と、果ては隣の猫が何匹子供を生んだなどと情報発信をしたり、悩み相談をしたり極めつけは「子供のしつけ」で、コンビニやスーパーでは感じられない「温かさ」があるようだ。
たしかに「こんにちわ」「いらっしゃいませ」とコンビニやスーパーの店員は、しっかりとマニュアルにしたがって、最高の接待をしてくれるが、「こんにちは」「これください」「ありがとう」と客が受け答えをしているところなどあまり見たことがない、実に殺風景だ。こうした細かなところにも、おばあちゃん存在が実に大きく駄菓子屋のおばあちゃんは「社会雑学の先生」だった。

事件簿ふぁいるNo003 より抜粋

事件ふぁいる No. 4 紙芝居検証

日時／2002. 8. 30 場所／守山市播磨田町

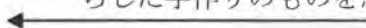
創作紙芝居「子さづけ地蔵さま」 駄菓子探偵団紙芝居一座

検証：1

緊張の初上演『子さづけ地蔵さま』



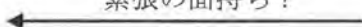
1. まずは、「灯籠流し」から始まった。それぞれに、工夫を
らした手作りのものを思い思いに流す。



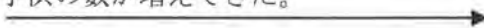
2. 緊張の面持ちで会場まで、まるで
仮装行列のような、何だか怪しい
変な団体？



3. 「参上！駄菓子探偵団」
準備万端、ハイ！記念の1枚でも…、男性人は
緊張の面持ち？



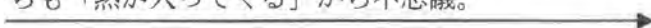
4. 灯籠流しも終わって、徐々に
子供の数が増えてきた。



5. 「よっしゃあ！始めるか」と…団長が上演前の
演説。なかなか、上手だね。昔とった何とか…」かな？



6. 播磨田始まって以来の人出？いや、子供の
数に関係者も驚き、団員の少々ビビリ気味。
それでも、真剣な目で見つめられると、こち
らも「熱が入ってくる」から不思議。





7. 「流石は、松宮へん探偵。」子供たちとのコミュニケーションの図り方は抜群。
次第に、会場が和んでくる。

8. いよいよスタート創作紙芝居の始まり始まり！
「掛け合いの語り部」も順調な滑り出し。



9. そして、お楽しみクイズ大会が始まり
クイズに答えて、「当てもの景品」を子供たちが次々とゲット。子供たちの真剣な眼差しに、驚く！



10. 会場は、熱気に包まれ「ハーイ」と大きな声を出す
子供たち、久しぶりに見た。そしてその声を聞いた。



11. そして、終了の時間になごり惜しそうに、家路を急ぐ
子供たち。紙芝居が惜しまれるのか？景品が惜しまれる
のか？来年はみんなで上演してね。

12. 今回の実施検証で、「やっさんの紙芝居（事件簿ふぁいるNo. 001）」
の熱気と雰囲気を感じた。また、掛け合いの「語り部」の面白さは
我々の苦肉の策とは言えオリジナリティーである。



日 時：平成 14 年 8 月 23 日（金）19 時 30 分～20 時頃

場 所：『西の村（西村家）地蔵堂』

参 加 者：西村・藤丸・松宮・松田・浅居

（特）笹山

地域コミュニティ再生の視点からみた創作紙芝居の果たす役割

我々グループの活動も約 1/3 の期間を過ぎようとしています。今回西村団長のご尽力により、活動テーマである地域コミュニティの再生手段の一つとして、創作紙芝居の効果を検証する機会を得たので私見ではあるが、考察を述べる。創作紙芝居の評価に先立ち、我々のテーマである

“地域コミュニティとは何か”

この『地域コミュニティとは何か?』をメンバーの共通理解を図る意味から今一度、定義しておく。

このテーマには、大きく2つの意味が含まれている。

1つ目は、地域の風土（文化、歴史、自然環境など）とそこに住まう人々との結びつきや関わりとしてのコミュニティという側面である。現代のあらゆる社会構造におけるグローバリズムの浸透は、日常生活におけるゆとり、うるおいといった側面を経済的な効率性からはずれたムダとして切り捨て、地域の風土における個性（アイデンティティ）を喪失させ、金太郎アメのような無個性な地域社会が生まれている。そのような地域では、高齢者は一方的に弱者であり、また、こどもたちは創造性、個性を育む体験をする多様な機会を無くしている。



この現状に対して、創作紙芝居の制作と上映プロセスは高齢者の実体験や昔からの伝承を通じて、その地域にある身近な文化財産を発見することにより、“その地域に住まう”ことへの愛着を新たな住民の中に育み、また、高齢者にとっては“知恵ある語り部”として自らの社会的存在意義を確認する動機付けの場となり得る。私自身、今回の上演を通じて、今までまったく生活体験のない播磨田という地域に少しばかり郷愁に近い思いをもった。

また、地蔵盆という土着の風習を知ってはいたが、今までにない新鮮で親しみ深い文化として、見直すきっかけとなった。要約すると、地域コミュニティの再生には、「地域に住まう人々がその地域風土との関係を再発見すること」がまず必要であるという点であり、創作紙芝居は、その効果的な手段といえる。

2つ目は、地域の人と人との関わりという視点からのコミュニティである。古くから、我々日本人の多くは、昭和初期に至るまで農耕を主体の自給自足の生活を営んできた。そこでは、村という地域社会が運命共同体を形成していた。とくに、農耕における“水の使用と管理”という協働作業を通じて、人々は強く結びつい

ていた。

しかし、戦後の急速な日本社会の変革の中で、このような結びつきが希薄になり、都市生活者が、主体となった今日の多くの自治組織（自治会等）は、その存在意義を無くしてきており維持運営が困難になってきているのは、他のグループの研究テーマ（自治会お助け隊）からも明らかである。

つまり、地域社会で人々が協働して作業するプロセスが少なくなったことが、地域コミュニティを衰退させた主要因である。これは、1つ目の地域と人との結びつきが希薄になったことにも通じる点である。

この点に対して、創作紙芝居は制作から上演まで、すべてのプロセスをワークショップ（協働作業）することにより、参加者の相互理解や連帯、問題の共有化が深まり“互いが、この地域に住もう”という意識を醸成する効果を持つといえる。今回は、すべてのプロセスをメンバーによるワークショップによりおこなったが、今後は、このプロセスを地域の人々が主体的に担っていくことにより、2つ目の定義による地域コミュニティの再生に大きく貢献すると考える。

語り部について紙芝居に果たす語り部の役割は、3つあると思う。



1. 14インチのちっぽけな画面を広い・深い時空間として観衆に空想の翼を羽ばたかせること。
2. 言葉を通じて観衆の心が、自由にのびのびと広がる手助けをすること。
3. 言葉を通じて観衆の心の中に彩り豊かな世界を描く手助けをすること。

地域スタンダードの試金石

ほんの20年ほど前、近所に駄菓子屋のおばちゃんが出て、子供たちに社会のルールや経済の仕組み（商売と金勘定）を教えていた。地域の『雑学博士』のような存在で、いつのまにか「子供文化の担い手」「地域の子供の受入先」としての機能を持ち、そこが、子供の経済や社会勉強の実践的な「場」であり「サロン」となっていた。

現在、少子化、受験戦争による遊び時間の減少、経営者の高齢化、不況の波に飲まれ「子供たちのサロン」は衰退してしまった。（事件簿ふぁいるNo003）

また、核家族化によって目上の人との会話や接し方が出来にくくなっている子供たちがいる。これは、人と人の「心地よい距離」が図れないためで、世代間交流によって身に付くものと思われる。

そのため、子供の受入先となる「場（昔は、それこそ家庭や地域であったが、現在は児童館・地域の子供センター等がある）があちらこちらにでき、また、幼稚園や保育園児が施設訪問を実施するなどしている。さらにボランティアとして、またNPOを立ち上げ活動

する団体も出てきた。地域における体制は整ったかに思えたが、実際、これらの「場」が十分機能していないのではないだろうか。

経済や政治の分野では、グローバル・スタンダードが、それこそ「標準」となり一定の尺度として物事全てを図っているような観があるが、こと「文化や地域」といった分野においては、一定の尺度では図れない「特異性」（柳田國男さんは「民俗学」の中で、まさにこのことを言い、ここにまちづくりの原点を問い掛けている。）があり、全てのものを「標準化」することは難しいのではないだろうか。

いま、「何が本当に大切なのか」「何をもって豊かさを感じるのか」を改めて思う時、地域の担うものの重さを思い知らされたかたちとなった。

「駄菓子屋のおばちゃん」の代わりにはならないものの、われわれがツールとする「紙芝居」が、地域の文化の伝承と世代間交流の一助を成す『試金石』となるかは、今後の検証によってさらにはっきりとしたものとなるだろう。しかし、短期間での検証には少々「難」がある。

事件簿ふぁいるNo.004 より抜粋

日時／2002. 9. 29 場所／淡海ネットワークセンター

創作紙芝居「子さづけ地藏さま」

屋台村おもしろ小劇場の記録



3人で頑張った。『おもしろ小劇場』・・・
開始直後は、観客もマバラでどうなることかと思いましたが、センターのみなさんの協力でどうにかかたちになりました。
ありがとうございました。

いつの間にか大人も子供も「紙芝居」
にのめり込み、笑顔があちこちで満開。
緊張もほぐれて、お楽しみ「クイズ」で
会場は喜びいっぱい・・・。

9月29日（日）は、夢いっぱい・・・



事件ふぁいる No. 5 紙芝居検証その2

日時／2002. 10. 27 場所／淡海ネットワークセンター

創作紙芝居「子さづけ地蔵さま」 中間発表にて上演

中間発表殺人未遂事件

探偵のみなさん、中間発表ご苦労さまでした。想像を上まわる反応で浮かれている間に、まさかの殺人未遂事件が起こり、大石八チン伯爵とハート・ト・ハート夫人が倒れてしまいました。辛うじて、わたしたちとママやのママさんは無事でしたが…」



金田一「事件の解決ですね。腕が鳴る。」

松宮へん「これは奇怪なことです。あれだけ元気があったお二人が…、不思議ですね。」

金田一「もしや、4C 仮面の仕業か？ おのれ4C 仮面、ゆるさん！」

ナオコ「今後の動向が…？」

浅い川「まあまあ、生きていただけても見つけモンということで…！」

団 長「おだまり、仲間が倒れたというのに少しふさげすぎです。そこで、それぞれ会場に居たときのことを思い出してみして下さい。」

金田一「事件を振り返る訳ですね。じゃ、わたくしから…」

金田一探偵

紙芝居の実演もこれが最後かと思うと寂しい限りです。

それにしてもいやはや、紙芝居のアイスブレイク効果は実にすばらしいと感心しました。

中間発表会という少々堅苦しい場をあっという間に、和やかなコミュニティの場に変身させてしまうのですから。いつも怖い、怖～い！藤井絢子先生を無邪気で優しい少女に変身させてしまったのですから！紙芝居は、永遠に不滅です！さて、何時までも感傷にふけっている暇は、ありません。次は、駄菓子、駄菓子と……どこまでも。

金田一「いやあ～、実に感傷的で我ながら恥ずかしい……。いやいや、これも4C 仮面の仕業では？危ないところだ。気を引き締め、駄菓子の追求に邁進を!!」



松宮へん探偵

中間発表会の感想

発表はうまくできたし、他へのインパクトもあったし、ほくとしては、満足しています。発表にむけての、発表のなかみの検討、形式の検討、準備等々、団長の引っ張りこりリーダーシップのもと、みんなでできたと思うし、



でも、ひょっとしたら・・・と思うことがあったので、書きます

それは、8月にむけて、5～7月のミーティングで、小さくてもいいから実践にうつしましょう（実際に何かをやりましょう。）と提案しました。そのことが大事だと思ったからです

でも、他を見ていると、まだ何もできていないけど、まだ、思いは大きいという感じでした。でもそのほうが、本当はいいのかと思ったのです。つまり、我々はこじんまりとまとまり過ぎたのかと。それは私のせいかと

でも、2年間のグループ研究というのはそういうものだ。その先は別だが、とも思っています。

でも、「2年間のグループ研究というのはそういうものだ。その先は別だが、とも思っています。」

松宮へん「まあ！…キザですが？こんなところで」

西の村団長

中間発表は、みらい塾幹部会の陰謀により

・・・一番目の発表となりました。中間発表か痛感発表か、昼間発表か、我々グループは、最初であろうが最後であろうが、4C仮面を追いかけて、事件解決のため日々努力しているので動じません。

駄菓子探偵団・・・堂々人生～です。

さて、大人対象に紙芝居を上演。子どもになれるか塾生たち！？次の瞬間「シートに座って・・・」と声をかけると・・・次々前へ・・・シートに座って紙芝居を鑑賞する3期生や審査の先生方が、子どもの目に返って行くのが舞台の袖から見ての私には良く分かりました。しかし、最後のクイズに、答えられない大人・・・元気良く手を挙げるのが子どもより遅い大人・・・子どもの目から大人の目に戻った瞬間も目撃したのでした。

て・・・ことで無事中間発表も終わり更なるステップ・・・！思いはすでに、駄菓子調査に心が向かっている団長です！



浅い川探偵

ほっとしたのが実感ですが、最近、各地で紙芝居が見直されているのにビックリします。東京の下町文化として発祥した「紙芝居」が、時代や世代を超えて再び陽の目を浴びようとしている。ハイテクの時代にあえて「アナログ文化」をもって一石を投じたかった背景に、大勢の者が集まり手づくりによる文化の伝承をという思いがあり、そのツールとして選んだのが「紙芝居」であった。

そして、もう一つ自分が心情とする言葉がある・・・「文学は時間を現し、絵画は空間を現す、故に「名画」はその両面を持ち合わせ、時代と世代を超え人々の心に「メッセージ」を送り続ける。」

だからこそ、今、改めて注目を浴びている「紙芝居」をツールとして「コミュニティの再生」と「新たな文化の伝承の形式」を検証しようとしていることに、少々、自信がわいてきた。ただ、もう少し角度を変えて検証すべきではないかとは思っている。

浅い川「まあまあ、こんなところで…！」

団 長「たまには貴方も良いことを言うのね…。そのとおり、もう少し角度を変えて検証すべきネ。」

浅い川「団長、ナオコさんの感想が・・・。」

団 長「いいのよ。またの機会にするわ」

団 長「そうでした、急に大きな雷が鳴ったとき、会場が一瞬間に包まれましたネ。問題は、その停電の後、委員会メンバーに少し変化が見られましたが、あれは私の思い過ごしでしょうか？」

松宮～ン「いや、そうではないでしょう。確かに4人の顔つきが変わっていました。」

ナオコ「わたしもそう思います。」

金田一「団長、これはひょっとして4C仮面の仕業なのではないでしょうか？」

団 長「そうかもしれませんネ。あの形相は、今までなかったように思います。」

浅の川「そう言っても、いつ4C仮面が会場に・・・？」

金田一「あの闇の一瞬。もしや、4C仮面の必殺技・・・。」

松宮～ン「すると、あの4人は暗闇の中で暗示でもかけられたと・・・。」

ナオコ「おそらく・・・、ヨリコ団員にかけたのと同じ『必殺：ノックダウン・ビーム』でしょう？」

団 長「ム～！とにかく、4人のいった言葉を思い出すのよ。」



事件簿ふぁいるNo.005 より抜粋

事件ふぁいる No. 6 紙芝居及び創作駄菓子検証

日時／2003. 2. 2 場所／水口町美濃部

かんぴょう取材 高尾敏夫氏 しげ氏

たかが干瓢、されど干瓢…！



「探偵のみなさん、干瓢（かんぴょう）の調査ご苦労さまでした。驚くほどの収穫でした。…？いや、成果でした。」

これほどとは正直いって、思ってもみませんでした。だが、訪問した高尾さんご一家と、下準備をしていた松宮へん探偵に感謝します。

それともう一つ、この調査にヨリコ探偵が復帰し

たこと、本当に嬉しく思います。」

ヨリコ探偵「みなさん、ご心配おかけしました。何とか体調もすこしずつですが戻りつつありますので、また、よろしくお願いします。」

松宮へん探偵「いや～、嬉しいことばかりですね。」

金田一「本当です。我がホームグラウンドに団長はじめ探偵諸君を迎えられたこともこの上ない喜びです。」

団 長「ただ、ナオコ探偵がいないのが、少し寂しい感じです。」

浅い川「何～だか？ 湿っぽいですな。もっとお気楽に……。ネ みなさん」

団 長「おだまり、変にふざけすぎです……。もう、ったく!!」

金田一「え、……。？ 浅い川さん？ あなたも来てたんですか？」

団 長「そんなことより、調査報告をお願いします。」

金田一探偵

○かんぴょうは何処へ

かんぴょうは、夕顔科で別名を“ふくべ”ともいい、江戸時代の版画家である安藤広重の東海道五十三次には、夏の水口宿を象徴する風物詩として登場する。

かんぴょうと水口とのかかわりは、古くは神代にまでさかのぼるといわれ、それほどこの地域とは結びつきのある農作物として、戦後間もなくのころまで周辺地域のほとんどの農家で栽培されていたという。



農作物は、土地を選ぶというが、かんぴょうもその例外ではなくこの地域の土壌に適していたのだろう。そして、貧しい時代の地域の人々にとって、それは鉄・リン・カルシウムという貴重な栄養素を多く含むかけがえのない食材であった。そればかりかこの地域にとって、それは大切な食を通じた風土・文化の重要な要素ではなかったのか？

地域の人々は、畑に“ふくべ”が実るころ夏の訪れを感じ、かんぴょう干しのころ、秋の訪れを感じたのであろう。

そして、冬の訪れとともに食卓に上るかんぴょうは貴重な保存食としてハレの日を演出したのである。

しかし、今では7件ほどの農家を残すまでに廃れてしまい、この地域の原風景ともいえるかんぴょう干しは消えてしまった。

水口のかんぴょうは
まったのだろうか？

その一つのヒントを
ることができる。江戸
ようは、東の下野ノ国

今では、壬生町のか
して全国の生産の大部
しの主役になっている



いったい何処に行ってし

栃木県の壬生町に見つけ
時代、水口藩主のかんぴ
(栃木県)に伝えられた。
んぴょうは町の特産物と
分を占めており、町おこ
と聞く。

元祖産地の衰退振ふりと好対照である。この差は、どこにあるのだろうか？壬生町では、かんぴょうの花（ゆうがお）が町の花として大切に守られている。また、地域の主婦たちは食材としてのかんぴょうを保存する会を結成し、かんぴょうを現在のレシピにアレンジして家庭の食卓から草の根レベルで次代へ食文化として継承しているという。よく耳にする“地産地消”とは、その地域でとれた食材をその地域で消費するというだけではなくて、その地域の文化を食を通じて継承していくという意味もあるのだと思う。

同じく“身土不二”とは、まさに地域風土とそこに住まう人々との一体化であり、食文化を通じた地域アイデンティティの確立と継承に他ならないのではないか？

壬生町の人々の取り組みは、まさにこの実践といえよう。

このように2つの地域住民の意識と取り組みの差が地域のかんぴょう文化の盛衰を分けた要因の一つではないか？（仮説）

最後に、北原白秋のかんぴょうという詩の一部を紹介してこのリサーチ報告のまとめとしたい。

かんぴょう　かんぴょう　かんぴょう　干してる

あのを　こののを　かんぴょうはしろいよ

かんぴょう　かんぴょう　かんぴょう　干してる

あのは　このは　かんぴょうは　ながいよ

サラサラ　サラサラ　かんぴょうは　ゆれるよ

西の村団長

2月2日(土) かんぴょうの取材について 団長 西村ますみ

実は、団長は・・・「かんぴょう」の取材について高尾さん宅に伺うまであまり期待をしていませんでした。が、話を聞いてビックリ！すっかりしっかり「かんぴょう」にはまった団長でした。頭はすでにかんぴょうでいっぱいです。ぐるぐる白いかんぴょうが頭の中を廻っています。たぶん今夜はかんぴょうの夢を見ることでしょう。

- ① かんぴょうには歴史があった→ 広重の絵にかんぴょうが+
- ② かんぴょうには、姉妹都市があった→ 栃木県壬生町
- ③ 水口は、かんぴょうの発祥地→ 神宮皇后が産着を捨てた中にかんぴょうの種
- ④ かんぴょうは縁起物である。→ 結ぶ・寿司・昆布巻きなどお祝いの食材に
- ⑤ かんぴょうは風物詩であった→ 夏には、かんぴょう干しが涼しげ
- ⑥ かんぴょうの農家には継承者不足→
- ⑤ かんぴょうと水戸黄門→ かんぴょう職人が水戸黄門に登場
- ⑥ かんぴょう畑でみつけたもの→ ふくべ ・・・瓢箪と同じようにカラが硬い

たかが・・・かんぴょうされど・・・かんぴょうですね。

私と西山さんは、かんぴょうの駄菓子作り担当。レシピ作りを致します。お楽しみに！

水口住民の藤丸さん～水口は、面白いところだねえ。たった3時間頂けなのにかんぴょう、ヴォーリズの建物、古い町並み、西友やハズイなどなど独特の文化があるじゃないですか。数年前に訪れた時よりいい町って感じましたよ。

高尾さま

かんぴょう一筋、敏夫さんののに敬意を表します。取材を受けていただいた時のひょうひょうとしたお姿は、大変印象に残りました。また、戸黄門出演写真は、ステキです。まるで本物の役者さんのようでした。

しげさんありがとうございます。

いろいろ料理を教えていただいて参考になりました。



中央→高尾 敏夫さん…ほんと、役者さんみたいだね！

かんぴょうのふくべもありがとうございます。あんなにたくさんのふくべを畑に置いておくのはもったいないです。なにか利用できたらいいですね。

ヨリコ探偵

江戸時代にタイムスリップしたような不思議な体験でした。

時の流れに埋もれてしまいそうになっている水口のかんぴょうにもう一度光をあて、地元の人に地域の良さを見直してもらえたら・・・新しく水口に住むようになった人達に愛着のきっかけになれば・・・。

駄菓子探偵団の今後の方向付けに大きな収穫が得られた取材だったと思います。

(駄菓子試作状況)

☆ そのまま（乾いたまま）のかんぴょうを油で揚げてみました。薬品の臭い・えぐみが残っていて、まずく、家族にも不評。

☆ 結んで一口に切った状態で30分ほど水につけ、水分をよくふき取って油で揚げ塩をふってかんぴょうチップスに。薬品は抜けていますが、まあどうってことない味で、ポテトチップスには負ける。

☆ 塩もみして洗い20分ほど水につけた長いままのかんぴょうをなべに入れ、新しい水を加えて12～13分湯がきざるにあげ、一口大にむすび砂糖を加えて煮る。

A かんぴょう重量の80%の砂糖使用ーあめ煮のように甘い

B かんぴょう重量の60%の砂糖使用でも甘い、きなこを

まぶして食べてみると、安倍川餅のようできてかんぴょうらしい食感が残っている。なんとか合格点でしょう。といったところですが、ゆがいたかんぴょうでやってみる。

砂糖を減らしてみる・他の物をまぶして見るなど再挑戦しようと思っています。



干瓢（かんぴょう）作り三代目、高尾敏夫さんご一家を訪問させていただき、貴重なお話を聞かせていただくことが出来ました。大いなる歴史にふれ、あらためて日本人の食文化のすばらしさと、今日まで代々引き継がれてきた重みと難しさを、一度に知らされる調査となりました。ともあれ、高尾さん

ご夫婦の「かんぴょう作り」のお話は、農耕民族のDNAを持つ私たちの魂にまで響くものでした。

また、地域でかんぴょう菓자에挑戦されていることもあって誠に、勝手ながら「ぼくら駄菓子探偵団の『しが駄菓子認定証』を交付させていただき、第1号となさせていただきました。高尾おじいちゃん、おばあさん、ご家族のみなさん、お忙しいところ大勢で押しかけたにもかかわらず手厚いおもてなしを賜り、心から感謝申し上げます。

また、いただいた「かんぴょう」は、駄菓子づくりに活用させていただきます。

認定番号 1号

しが駄菓子認定証

あなたがつくられる菓子は 私たち
が捜し求める地域駄菓子としてふさ
わしいものであることから 勝手なが
らしが駄菓子として認定させていた
だきます。

平成十五年 二月 二日



駄菓子探偵団

団長 西村 ますみ



事件簿ふぁいるNo.006 より抜粋



誰にでもやさしいまちづくりをめざして

まちづくりサポ
ートセンターの
支援

支援・交流
参画

- 1、 個人の思いの変遷
- 2、 グループの流れ（グループの活動内容）
- 3、 訪問調査記録
- 4、 K J 法結果
- 5、 中間発表まとめ
- 6、 NPOサポートセンターに関するアンケート

大槻英理・岸本真理子・菅邦子・谷村節子

久泉和久・藤井伊佐美・松石敏治

個人の想いの変遷(グループ研究にあたってのテーマだし)⇒グループ分け

平成14年	内容	藤井	久泉	菅	大槻	谷村	松石	岸本
1月19日	スタート	パートナーシップについて		楽しい場づくり				
1月27日	発信	人と組織のコーディネート		ボランティアを中心とした夢、環境、情報のネットワーク・公民館、自治会館の活用			外国人支援(言葉) 地域での再生、情報	
2月23日	一人1分スピーチ	障害者、高齢者にやさしいまちとは？各活動のコーディネートを！	歴史や文化に根付いた生活について研究したい	人と人とのネットワーク、ボランティアとのかかわり	地域をよく知っている人達のたまり場、行かなければならない用事、地域にいる者のコミュニティづくり	広く学びの場としたく(淡海生涯カレッジ参加、ホームヘルパーよりみえてくるもの、家庭を基盤に活動できるもの	異文化を学びつつ、地域における外国人との交流をはかる	高齢者福祉「高齢者が痴呆になっても在宅で暮らすことが可能となる」多種多様な在宅福祉サービス
	テーマプロジェクト分け希望グループ	地域、公民館チーム					①グリーン(市民活動)ツーリズム ②地域、公民館チーム	①コーディネーター、空家チーム
	ポイント	システム作り ボランティア活動や 障害者の課題	生まれも育ちも草津	皆の集る場づくり	たまり場づくり	高齢者福祉の交流	外国人支援	高齢者福祉(在宅サービス)
3月30日	仮グループの想い発表		地縁活動の低迷、考えがNPOにシフトしていている。地域密着、人	人のネットワーク、コーディネートをやりたい、NPO	地域にいるから繋がっている公民館(コミュニティづくり)、今後の公民館のあり方		人の掘り起こし、システム、NPOを支援するNPOを作りたい。	地域力が弱っている。モデルケースとしての空家
	グループ分け	地域、公民館(ひと)、情報チーム(8名)						
	今後の課題	地域づくりイメージが固まっていない・公民館は地域の人々が集うコミュニティセンター、地縁の再生、外国人にとってもなくてはならないもの、国際交流、横のつながり						

グループの流れ(平成14年4月～15年3月)

テーマ	月	月日・場所	タイトル	グループの活動内容	メンバーの思い
地域の基盤・自治会に関心あり	4月	4月13日～14日 近江八幡市長命寺	未来塾3期生宿泊研修	自治会業務を請け負うNPOをめざす。地縁を再生し地域の活性化をめざす。 自治会お助け隊のネーミング決定	理想的な自治会組織をめざして(会則・役員選挙規定の見直し提案)
	5月	5月11日(土) 守山市立河西公民館	第1回訪問調査	(相手先) おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」の稲田・松井さん (ねらい) 地域社会に焦点をあて町内会を通じて市民活動のあり方を調査研究する。	個性あふれるいきいき自治会(コミュニティの原点・町内会)でありたい。 自治会をテーマに調査・研究する。活発な自治会を調査・研究し他の自治会を啓発する。自治会リーダー養成プログラムを開発。自治会活動関係者への提言まで発展させる。
		5月11日(土)	第1回グループ会議	グループ名未定・代表 藤井さん・幹事会 は順番で出席すること。 自治会をテーマにする重たさを感じられ、地域の活性化やイベントなどの話も出て、テーマについてはもう少しグループ皆の共通意識を探り、県内の活動家に会い問題点を整理することに合意	いまの時代だからこそ賢く使おう公共施設・調査活動・人との出会い・イベントの創出・活動の継続 生涯現役をテーマに、高齢になっても生きがいのある人生を歩むために、身近な地域貢献を通して人々が集り、具体的な計画を立て、会(一輪の会)を起こし、情報交換、ネットワークづくりがしたい。
		5月19日(日) ピアザ302	未来塾3期生講義	課題解決手法(KJ法)講師 岸田さん 今ある問題点の解決法の整理	ヘルパーとしての経験から高齢者がいきいきと過ごせる場が欲しいと感じる。
		5月29日(水)	第2回グループ会議	グループみんなの考えを確認。皆で何が研究したいのか、みんなの共通するテーマは何なのか。まず、グループ員個々の思いを理解しあうために、各々の在住地域を訪問しながら、近辺在住のキーパーソンを訪問することを決定(まず1期生の先輩の話聞き、蛍の飛び交う虎姫・長浜へ行く事を決定)	自治会が重荷になる人達も現れてきて役員を避けたがったり、入会しない人もいる。地域のふれあいの拠点となる自治会館や空家など有効に活用できるシステムづくりが必要。有益な情報や人との出会いがポイントとなるのではないかな。

地域交流の拠点としての空家・公民館・自治会館の活用を探る	6月	6月2日(日) 虎姫町中野地先・県立虎姫御前山教育キャンプ場	第2回訪問調査	(相手先)おうみ未来塾1期生「心のバリアフリー班」の松井賢一さん (ねらい)農村における村づくり・国際交流ボランティア等の地域活動の取り組みを知る	グループ会議も兼ねていたのだけれどもグループ全員集ることができず残念。しかし、野外でのバーベキューはおいしく、蛍の乱舞も見ることができて楽しく交流できた。
		6月9日(日)	4期生開講式 第3回グループ会議	KJ法のまとめとして、今後の活動の方向性として①空家の利用②外国人との共生③世代間の交流④地域資源の発掘⑤NPOの設立⑥町内会サミットの開催にわかれた。グループの今後のあり方については、活発に動いている県内の地域や、キーパーソンのお話を聞き、今後の活動を詰めていくことを決定。グループ名については「地域お宝発見隊」に変更の案も出たが、今後の活動の方向性について協議。	
		6月22日(土) 彦根市託老所	第3回訪問調査	「サロンいこいのへや」三宅春代さん宅 (相手先)三宅さん他3名 (ねらい)個人の家の空家活用の実態調査	
	7月	7月28日(日) 甲良町保健福祉センター	第4回訪問調査	(相手先)甲良町尼子地域サロンボランティアグループ (ねらい)お年よりによる地域サロンの実態調査(高齢者対象の字サロン)	地域(ひと)の再生をめざして(地域に生まれた人材を知る計画を提案)Mさん
		7月30日(火)	第4回グループ会議	訪問調査を振り返って、今後のグループ活動の方向について協議。	会議出席率が悪く、全員協議が困難。
	みんなの望むまちを構想する	8月	8月25日(日) 域通貨おうみ委員会	第5回訪問調査 第5回グループ会議	(相手先)おうみ通貨委員会 金沢さん (ねらい)草津コミュニティ支援センターとおうみ通貨の話の聞き今後の活動の参考とす 支援センターについて問題点を協議し、各自のグループとしての取り組む方向について再度、協議。
草津市まちづくりセンター					
9月		9月23日(月)	第6回訪問調査	(相手先)NPOひとまち政策研究所の理事 阿部圭宏さん (ねらい)NPOひとまち政策研究所の活動を知り、湖北へのサポートセンター立ち上げの参考とする。	まちづくり支援センターを作るにあたって、しろうと集団がプロ集団になるのはどうすればよいのか。サポートするための力量をもつ必要性がある。

湖北にNPO支援センターを作りたい	10月	10月19日(土)	第6回グループ会議	サポートセンターづくりについて	誰にもやさしいまちづくりをめざして、地域課題や地域活動に関心のある人が集り、話し合い、協働で活動できる環境づくりを、実現化するために、NPOサポートセンターを作りたい。まちづくりの活力をめざすセンターをぜひ、自分の住む地域に作りたい
		10月27日(日)	3期生中間発表	誰にでもやさしいまちづくりをめざして、10月までの活動について報告。今後、NPOまちづくりサポートセンター「ハートアンドハート」の設立をめざして、賛同者とともに、活動計画、理念について支援、交流、参画していくことを発表	
	11月	草津市立市民交流プラザ 11月16日(土)	第7回訪問調査	(相手先)ハートフルプラザ会長 下村定さん(ねらい)湖北サポートセンター立ち上げに中心的役割を担ってほしいグループ代表に組織の現状と活動を聞き、今後の方向性を探る。	長浜(湖北)地方の調査・賛同者への呼びかけ・組織づくり・活動内容の検討
		11月27日(水)	単独訪問調査(Fさん)	(相手先)ネットワーク運営委員 辻川作助さん・湖北地方の情報交換、情報収集	
	12月	12月3日(火) 長浜市社会福祉協議会	第8回訪問調査	(相手先)長浜在住のボランティア(ハートフルプラザ)活動家(ねらい)ハートフルプラザのメンバーと語り、理解を深める。	長浜限定で活躍しているグループではあるが、湖北に支援センターをと願う私達の「ハートアンドハート」と類似点は多々あり、今後、交流を深めていきたい。
	1月	1月19日(日)	第7回グループ会議	湖北サポートセンターの必要性について議論・湖北の現状について調査をする必要あり。具体的にアンケートをすることを決定。対象者、内容、注意点等を各自で検討すること。	
		1月24日(金)	単独訪問調査(Fさん)	湖北地域のボランティア活動の情報収集(長浜・東浅井郡)	
		1月25日(土)	第8回グループ会議	アンケート作成・対象者検討・発送。	
	2月	2月8日(土)	第9回グループ会議	アンケート集計作業・役割分担・各自でアンケートの集約	
		2月22日(土)	第10回グループ会議	湖北サポートセンターの機能について検討・今後の活動について	
	3月	3月1日(土)	第11回グループ会議	アンケート分析・問題点協議・まとめ	
		3月8日(土)	第12回グループ会議 グループ研究発表 卒塾式	まとめ・今後の活動について	

未来塾3期生・訪問調査記録 No.1

分類	自治会の研究発表、おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」	
企画者	久泉	
訪問者	5人（藤井・松石・久泉・谷村・菅）ネットワーク（川尻・天川・川勝）	
訪問日時	平成14年5月11日（土）午後1時～5時	
訪問場所	守山市立河西公民館	
相手先		
相手先出席者	おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」の稲田氏、松井氏	
活動内容	時間	随時
	場所	K町内会、公共施設等の会議室
	開始時期	平成13年4月15日から平成14年3月まで33回
	参加者	「敬天愛人班」のメンバー6人
	対象地区	草津市K町内会
	ねらい	未来塾2期生のグループ研究として、地域社会に焦点をあて町内会を通じて市民活動のあり方を調査研究する。
	具体的内容	メンバーがそれぞれ個別のサブテーマを持ち、町内会の活動や住民の考えを聞き取りや座談会により調査研究し、そこに住む人々が持つ町内会という公共の心を取りまとめた。
	会の悩み	なかなか研究テーマが決まらず、メンバーの居住地が県内バラバラなので、会合する場所の選定に苦心した。
訪問感想	その他	メンバーの感想：日々町内会の運営に苦心している役員や住民にアドバイスするというおこがましいことまではできないので、自分の町内会を他の角度から見た調査報告書として自分の良さを再発見してもらえたら、幸いだと思う。
	4月の近江八幡での宿泊研修にて、自治体の支援活動を目的に「自治会お助け隊」の結成をめざしたが、今回の2期生の研究された内容を聞き、班員の今後の活動としては、何の知識も持ち合わせていない我々には、日々悩み実践している町内会の運営のコーディネートができないのではとの不安からもう少し自治会にとらわれずに他の分野についても調査していくこととした。	
今後の進め方	リーダー＝藤井さん、会計＝菅さん ただし、班員はすべて対等の立場で話す。 会合の司会、書記は出席者の中で順番とする。 幹事会には、菅、久泉、松石さんが交代で出席する。 ★今後の予定 5月19日（日）課題解決の研修 6月2日（日）山東町	

記録者：久泉

未来塾3期生・訪問調査記録No.2

分 類	農村における村づくり・国際交流ボランティア等について	
企 画 者	藤井	
訪 問 者	松石・久保・管・大槻・谷村・藤井・前川・ネットワーク（川尻外2人）	
訪 問 日 時	平成14年6月2日 午後1時～8時	
訪 問 場 所	虎姫町・県立虎御前山教育キャンプ場	
相 手 先		
相手先出席者	おうみ未来塾1期生 「心のバリアフリー班」 松井賢一氏	
活 動 内 容	時 間	6月2日午後1時～8時 研修・懇親会・蛍狩り
	場 所	虎姫町中野地先・県立虎御前山教育キャンプ場
	開 始 時 期	午後1時～
	参 加 者	松井賢一氏の県域の地域活動の報告
	対 象 地 区	県域事例
	費 用	－
	ね ら い	未来塾1期生の松井さんのグループ活動の経過とその現状 取り組み、集落農民の地域おこし、農村での国際交流等の情 報収集する。
	具 体 的 内 容	バリアフリー観光いちご園のオープン、豊かな村づくりの事 例発表（キムチを特産にヒマワリにより広がる友好の輪、福 祉施設での演奏活動、有機野菜等の活動報告をされる。
	他 団 体 と の 連 携	松井賢一氏は仕事を通して、地域の営農活動に個人から集団 化への指導、実践されている。
訪 問 感 想	会 の 悩 み 指 導 助 言	・未来塾活動（卒塾後）も無理をせず、情報交換を年数回し ている。 ・グループ活動の成果も大切だが、情報交換も大切だとい うことです。
	そ の 他	
訪 問 感 想	松井さんの未来塾の活動報告と併せ、仕事を通して（営農指導）住民と共 に共通課題を実践を通して楽しく活動されていることに関心。グループ活 動も会員それぞれ忙しいなか、あせらず活動したことについて理解を得ま した。	
今 後 の 課 題	6月に入り、あと9ヶ月。今後のグループ活動に不安→前進しかない。	
NPOとしての 可 能 性	今後も情報収集活動をするなか、グループが共同認識を持って、具体的 な行動が出来るか不安。 何かボランティア活動の参考（運営）になるための研究・活動を今後も続 けたい。	

記録者：藤井

未来塾3期生・訪問調査記録 No. 3

分類	宅老所『サロンいこいのへや』	
企画者	藤井	
訪問者	7名（藤井夫妻、松石、岸本、天川、川尻、谷村）	
訪問日時	平成14年6月22日（土） 午前9時半～12時	
訪問場所	彦根市御三条町124『サロンいこいのへや』	
相手先	彦根市御三条町124、三宅春代宅、Tel.0749-24-3006	
相手先出席者	4名（三宅さん、イノモトさん、安部さん、Aさん）	
活動内容	時間	毎週火曜日午前9時半～午後3時
	場所	『サロンいこいのへや』（三宅さん個人の空家利用）
	開始時間	平成8年4月29日～
	参加者	会員29名（高齢者・スタッフという概念でなく集う者全員が会員）
	対象地区	彦根市後三条町近隣地域、口コミでの参加者
	費用	毎月会費500円、毎回の食事代300円
	ねらい	何でも話せる場づくり。みんなが同じフロアにたつ。 介護保険のようでない、自主性の尊重、来やすさを考えている。
	具体的内容	昼食の献立を「何が食べたい」と相談してその都度決めている。みんなで作ったり、分担して持ち寄ったりいろいろである。 毎回の集いの内容は決めず、誰かが絵手紙しようと持ちこんでやったり、どくだみ茶をつくったり、カンパ袋が回ってきたりする。 年1回福祉バス旅行。個人車の乗合やレンタカー利用での外出。（県立大学園祭が人気。花見や温泉、リサイクルステーション見学）
	他団体との連携	近くの独居老人の来訪より、口コミで広がっていった。男性は蜂蜜屋さん一人。近隣の主婦とで、現在に至る。会員が市民運動、愛東ヒップアップ、男女参画とそれぞれ重なりあって、活動している。 平成12年8月7日『彦根市やすらぎふれあいの館整備運営費補助金交付要綱』により、建物の改修ができ、月3万の運営補助がもらえ、助かる。
会の悩み		
代表の三宅さんより、順次高齢となるが、ずっと続けていかねばと思う。最後は、一緒に住もうかといったグループホームの発想もできる。 男性会員1人（女性は直感的にあれこれと行動できるが、男性は理論や目的を考え、参加につながらないのでは、男の人の弱さか）		
その他		
生き証人的お年寄りの知恵について、代表の三宅さんはこまめに新聞社への投書をされ、かなりの紙面となる。家族の中では認めてもらえないこともここでは違う。 高齢者の尿漏れについて、座布団が濡れてたことはないが、要介護1・要支援に該当すると思われる人もいるし、デイサービス利用者も3人みえる。 家族との連携について、お年寄りの気持ちを閉ざしてしまうことにもなり、あえて考えない（お年寄りの発言も嫁側からすると成る程といった事もある）。		
訪問感想	代表の三宅さん、その後押し役の阿部さん（未来塾1期の運営委員）、会計イノモトさん、主婦Aさんが連携をうまくされ、皆さん無理なく楽しまれているようであった。非常に多くの事を語って頂いた。特に、外山時でのお年寄りの向学心・好奇心はすごく、要は経験してないだけの事という発言は貴重であった。一方、若いスタッフの確保や安全面の配慮等もされ、外出経験を重ねられていることのすごさとその影響力を思う。 新聞への投書を始め、情報活動や、各種団体との連携にとあれこれ発信されている事に感心した。彦根市の行政整備のよさをうらやましく思うが、足元からこつこつとも教えられたように思う。	
今後の課題	地縁、子育てネットと広く目を向けて、「ぬくもりの場」発信 （この会でも、内部で意地悪があったり、嫌われている人がいたり、ゴソッと物をとる人がいたりする。しかし、恥をかかせないことが大事だ）	
NPOとしての可能性	憲法の基本的人権をうけて、誰もが当たり前のように生活できることが、自然であり当然であるとするノーマライゼーションの考え方の普及や高齢化社会の進展にともなって、1994年「生活福祉空間づくり大綱」が発表され、2000年には介護保険制度も導入された。 『サロンいこいのへや』の活動が、1996年の発足との事で、活動量や情報量ともに、NPOとしての可能性は十分と思えた。	

未来塾 3 期生・訪問調査記録No.4

分 類	高齢者対象の字サロンボランティアグループ	
企 画 者	藤井	
訪 問 者	6 名（藤井・谷村・松石・大槻・菅・川勝（淡海ネットワーク）	
訪問日時	平成 14 年 7 月 28 日（日）午前 9 時 30 分～11 時 30 分	
訪問場所	甲良町保健福祉センター 会議室 （仲介者 甲良町保健福祉課長 小川さん）	
相 手 先	甲良町尼子地域サロン「絆の会」 〒522-0242 甲良町尼子 1 2 3 8・代表者 伊藤徳太郎 Tel 0 7 4 9 - 3 8 - 3 5 5 4	
相手先出席者	4 名（木村かよこ・寺本・伊藤・奥田）	
活 動 内 容	時間	月 2 回木曜日の午後 1 時～3 時半・おやつ有り
	場所	字（尼子）所有の老人の憩いの家（平成の館）
	開始時期	平成 7 年 8 月 10 日～
	参加者	高齢者 50 名位・ボランティア 1 回 15 名位（会員 50 名）
	対象地区	尼子 260 世帯・人口 1100 名・老人クラブ会員 250 名
	費用	参加費 100 円を募金箱に入れる・寄付金お断り・野菜寄付 OK
	ねらい	地元の年寄りが年寄りの面倒を見る、来て楽しいサロンの開催・気楽な集まりをめざす。
	具体的 内 容	手作りおやつや懐かしい歌や健康体操で話しがはずむ。会則なしの自由参加。折り紙等嫌がる人がいるので特に毎回テーマ決めず。 年 2 回 10 時～3 時の昼食あり・買い物ツアーあり
	他 団 体 と の 連 携	当初、赤十字奉仕団に手作りおやつ等の手伝い頼む老人会・区長等との関係、特に問題なし。 町から 1 名当り 300 円の補助金・町社会福祉協議会から年間 3 万円の補助金あり・
	会の悩み	繰越額が年々増えている。使い道に思案するが市町村合併で今後必要かも？参加者に男性が少ない（10 名位）ボランティア・参加者の高齢化。介護保険とのからみで、在宅介護が少なくなりいつかサロンがなりたたなくなる時がくるかも。
	その他	
訪問感想	開設当初から関わり今も皆出席という 4 名の方の熱い情熱が伝わってきました。伊藤さんや奥田さんの男性 2 人が退職後、何か役立つことをしたいと社協からの訪問入浴ボランティアがきっかけとなり、地域に目をむけることになったとのこと。畑仕事や料理が得意な寺本さん、痴呆老人の行き場のないことが気がかりだった木村さん達女性 2 名。絆の活動をきっかけとして、おおらかに楽しみながら地域とかかわっている様子が感じられました。	
今後の課題	介護保険のからみで昔密接だった町の保健婦さんとの出会いが少なくなったとの事。ケアマネージャーとの連携が必要。	
NPO としての可能性	字（自治会）単位のサロン開催は、地域福祉の充実との立場から県内の社会福祉協議会が補助金等を出して活発に展開されている。必要な人に情報が確実に流れているのかその当りが可能か？	

記録者 菅

未来塾 3 期生・訪問調査記録No.5

分 類	支援センターについての話しを聞き今後の活動について考える	
企 画 者	藤井	
訪 問 者	藤井・久泉・谷村・菅	
訪問日時	平成 14 年 8 月 25 日（日）午後 2 時～4 時	
訪問場所	草津「ひとの駅」 特定非営利活動法人（NPO）地域通貨おうみ委員会	
相 手 先	金沢恵美さん（地域通貨おうみ委員会代表・元草津コミュニティ支援センター事務局）	
相手先出席者	金沢さんのみ	
活 動 内 容	時間	
	場所	
	開始時期	
	参加者	
	対象地区	
	費用	
	ねらい	
	具体的 内 容	
	他団体との連携	
	会の悩み	
	その他	
訪問感想	金沢さんが、1999 年に草津市コミュニティセンターの事務局をされていたので、それにまつわる話しを聞きましたが、彼女は現在、おうみ通貨を活発に展開しており事務局の女将として商店街の空家を借りて参加交流ショップ「万屋おうみ」を、訪問した 2 日前から開店しており、もっぱらそちらの方へ私達の関心がいきました。まちづくりやおうみ通貨に関心のある人たちが、気軽に集れる場を作り出したエネルギーに感心。30 人委員会（1 万円の会費）と 3 人の事務局で運営とのことでしたが、金沢さん個人の魅力と相まってアイデアあふれるおうみ委員会の活動に圧倒されました。私達のめざしているものを既実践されているという印象を受けました。 支援センターについては、98 年に 200 万円の資金の中でマンション業者から、駅に近い便利な場所が提供され、その運用が 1 年目は、草津コミュニティ事業団に任せられ 2 年目から利用団体の市民の運営委員会に任せられ、皆に気軽に施設を利用してもらうために利用券を発行（後に地域通貨に発展）。その時 40 団体の利用があり、事務局をボランティアがしたりしましたが、なかなか魅力あるセンターにはなりずらかったよう。NPO の支援等もめざしたが、上手くいかなかった。（いつでも同じ人がいる。ネットワークが出来ている等）現在は、理事会組織（ボランティアスタッフ）で運営されているようす。現在、金沢さんは地域通貨が忙しくごぶさたとのこと。	
今後の課題	センタースタッフの人材	
NPO としての可能性	可能	

記録者 菅

分類	NPO ひとまち政策研究所	
企画者	大槻	
訪問者	3人（藤井・菅・久泉）ネットワーク（川尻）	
訪問日時	平成14年9月23日（月）午前10時～12時	
訪問場所	淡海ネットワークセンター	
相手先出席者	ひとまち政策研究所 理事 阿倍 圭宏	
活動内容	時間	随時
	場所	事務所：近江八幡市桜宮町 207-3
	開始時期	平成14年3月設立総会 平成14年7月NPO取得
	参加者	メンバー約30人
	対象地区	滋賀県内
	ねらい	この法人は、住民、行政、企業、大学等のパートナーシップの基に、それらをネットワークさせ、とくに輝くひと・まちネットワーク滋賀の活動と連携しながら市民活動の支援、地域づくりの政策研究、新たな文化・経済・社会の活性化、人材育成などの事業を行うことにより、地域社会の公益に寄与することを目的とする。
	具体的内容	・ 市民活動の支援とネットワーキング ・ 地域課題解決のためのまちづくり・地域形成に関する調査、計画作成などのコンサルタントや助言 ・ 地域社会の政策向上・コーディネート ・ 新たなコミュニティ・ビジネスの創造や育成 ・ まちづくり・地域形成を担う人材の発掘・育成 ・ 情報誌・機関誌・書籍などの発行
	会の悩み	資金繰りに苦心している。信用金庫や労金から行政からの委託契約書を担保に運転資金を融資してもらっている。
訪問感想	その他	7月にNPOの取得以来すでに3件の受注がある。 現在常勤のスタッフを抱え、NPOのシンクタンクとして、地域に密着した中間支援を展開することが目標。
	ひとまち政策研究所は、まさしく総合コーディネーターとしてコンサルタント業務を行政から請け負うだけのプロ集団と言えるが、一方、私たちのグループは、素人集団である。素人ゆえに一般の人たちと同次元で、NPOの設立に際し、試行錯誤しながら支援していきたいと思う。	

記録者：久泉

おうみ未来塾第3期生・訪問調査記録 No.7

分類	ボランティア活動家との情報交換	
企画者	藤井伊佐美	
訪問者	藤井、岸本、松石、川尻	
訪問日時	平成14年11月16日土曜日	
訪問場所	淡海ネットワークセンター2階会議室	
相手先	長浜市・ハートフル・プラザ、会長下村定様	
相手先出席者	ハートフル・プラザ、会長下村定様	
活動内容	概要	ハートフルプラザ 会長を淡海ネットワークセンターにお招きしその設立の経過活動の経過および現状と将来について熱く語ってもらった。
	経過	平成10年3月、長浜市障害者や高齢者にやさしいまちづくり計画を作成 平成10年秋、ハートフルプラザ（誰にもやさしいまちづくりを進める会）を結成
	活動	平成11年11月の第1回「一日ハートフルプラザ」開催を皮切りに年間数回程度の企画を実施来ている ハートフルギャラリー、シンポジウム、アートフェスタ、スポーツフェスタ、および長浜曳山まつり、花火大会などのイベントに協賛した企画も実施
訪問感想	組織	ハートフルプラザには会則が制定されている、しかし会員の自由闊達な活動が活力と活動継続の原動力となっている 会長のリーダーシップと情熱が活動の支えとなっている NPO化への検討がはじめられているとのことである
	活動	活動は年間を通じて数件のイベントが中心となっていて既に数年間継続してこれた1要素と考えられる、つまり多すぎず少なすぎずである
	費用	行政との連携、地元ロータリークラブとの協調などがあり当面は資金難などはなさそうであるのは強みといえる チラシや企画などにもゆとりとセンスがうかがえ共感もてる
	構成	会の構成員は長浜を中心としたいろいろの分野の皆さんであり自由闊達な議論が交わされている、個々の構成員がそれぞれの分野で活躍しているのがこのハートフルプラザでさらに立体的に展開されていて頼もしい

記録者・松石

未来塾3期生・訪問調査記録 No. 8

分類	ボランティア活動家との情報交換	
企画者	藤井	
訪問者	久泉・藤井	
訪問日時	平成14年12月3日 午後6時30分～8時30分	
訪問場所	長浜市高田町 長浜市社協	
相手先	長浜在住のボランティア活動家（ハートフルプラザ）	
相手先出席者	武藤実（青少年・高齢者・男女共同参画・障害者活動） 下村定（ハートフルプラザ総括） 前田正史（障害者・ユニバーサルデザイン・PTA教育活動） 広部猛司（まちづくり・ひきやま・インターネット活動）	
活動内容	時間	随時
	場所	市内公民館・社協等
	開始時期	平成11年6月29日 ハートフルプラザ設立
	参加人	45人 （職業・年齢を問わず何かのボランティア活動の実践家）
	対象地区	長浜市・勤務する者
	具体的内容	市が「障害者や高齢者にやさしいまちづくり計画書」を市民も参画して作成。より具体的な実践が見られず、計画書に関わった人を中心にボランティア活動を目指して設立され、現在に至っている。一般に行政は計画だおれのなか、計画のチェックとその実践活動は現在市内では唯一の活動団体。各種活動のボランティア実践家がネットワークして「ハートフルプラザ」を設立。下部組織があるので動員、実践力があり、行政にも頼られる組織になっている。 例：1. 長浜曳山まつり 桟敷席の確保、障害者が同じ目線でまつりを鑑賞。 2. 長浜花火大会桟敷席。 3. ロータリークラブ 企業・行政との連携による＝ユニバーサルデザイン、障害者等のイベントに参画。
	他団体との連携	今後はハートフルプラザの事業の大きな柱として各種ボランティアの活動をコーディネートする事業を企画したり、多くのイベントを実施したいということ。
	会の悩み	場所（サロン）
訪問感想	ハートフルプラザの会員は年齢、職業等を問わず、各種ボランティアの活動家の集まりで、計画（企画）し、即実践力がある。私達の「ハートアンドハート」構想とピッタリで、N・P・O法人も設立に向けて検討中であるということです。未来塾「ハートアンドハート」7人のグループ活動も誰にもやさしいまちづくりを目指して「ハートフルプラザ」と交流し、参画し、来年3月卒塾に向けてN・P・O法人設立に向けて参画し、支援してはと考えます。「ハートフルプラザ」の会員の理解も得られそうです。	
NPOとしての可能性	平成15年3月までに設立は無理ですが、設立に向けた理念、活動計画等を整理し、私達が1年半近い活動の成果に結び付けて、平成15年中にN・P・O法人の立ち上げに向けて引き続きグループ活動を継続してはと考えます。	

記録者：藤井

【全体的なこと】

- ・ メリットのある活動組織をつくる
- ・ 自分のできることを考える
- ・ 常に問題発見に努める
- ・ 地域のコーディネーターとして自己を高める

- ・ 町内の問題を解決するには時間が必要

【グループ活動の進め方】

- ・ 自己の問題点をグループに出す
- ・ グループで話し合いの場を重ねる
- ・ 仕掛けする側が共通認識を持つ
- ・ 活用できるものを一覧表にして情報を共有する
- ・ 関心のあることを明確にし共通項を見出す
- ・ 各自の得意分野をディスカッションする
- ・ 収集した情報はみんなに配り共有化する
- ・ 役割分担する

【外国人との共生】

- ・ 外国人と外国語を通して文化交流する
- ・ 外国人のハンディキャップを知り共生の道を探る
- ・ 日本に住む外国人の意見からヒントをもらい活用する

【世代間交流】

- ・ 老人施設と子供たちの交流
- ・ 学校と老人クラブの連携
- ・ 地域老人が子供の面倒を見る
- ・ 老人と子供を結びつける欧州活動がある

【テーマ探し】

- ・ 原点に返って自治会の役割、家族の役割に絞る
- ・ 問題点を整理し、より重点的に絞り込む
- ・ 自治会とかかわりを持つ中でテーマを探す
- ・ 切実に困っている人たちの抱えているテーマを探す
- ・ 地縁に対するテーマを設定する

【具体的テーマや問題点の抽出方法】

- ・ よその町内の実態を考える
- ・ 町内の問題（住民増など）を考える
- ・ 自治会に入らない人の意見を聞き、問題点を探る
- ・ 自治会役員や行政機関にヒアリングする
- ・ 学生や転勤族が何に関心あるのかヒアリングする
- ・ 自治会館を開放して意見箱を設け、問題点を見つける
- ・ 既存のグループで成果の出たテーマを研究し要因を学ぶ
- ・ 問題点を明確にするためケーススタディで特定の町内会に入る
- ・ 淡海ネットワークセンターの情報を活用する
- ・ 知識と活用できるネットワークを出し合う
- ・ 情報のつながりを整理しながら全体を作り上げて行く
- ・ 地域の有意義な人材に出会う

【地域資源発掘】

- ・ キーパーソンのネットワークを利用し多くの人材を探す
- ・ インターネットを活用し地域の活動家を探す
- ・ 地域のキーパーソンを探す
- ・ 教育委員会、学校を通じて地域の活動家を探す
- ・ 地域に住む芸術、芸術技能を持った人材を発掘する
- ・ 小学校の授業で地域の財産を使う
- ・ 歩こう会や勉強会を企画し、自然環境、文化財探訪をする
- ・ 滋賀の探索をする
- ・ 地域にある有形無形の財産を見直し、生活に生かす

【空家の利用】

- ・ 空家を地域のサロンとして利用する
- ・ 地域の古い建物を利用する
- ・ 空家を有効活用するため、ソフトを充実する
- ・ 空家を探すのに老人のつてを活用する
- ・ 空家の提供を交渉する

【NPO団体設立】

- ・ 公民館機能をNPO団体で担う
- ・ 地域の問題を相談できるNPOをつくる
- ・ 公民館と自治会館のリンクをNPOを考える
- ・ 公民館の運営費をNPOに活用する
- ・ NPOに任せられるよう法整備をし、行政を説得する

【町内会サミット開催】

- ・ インターネットで町内会サミットを呼びかける
- ・ 市町村に呼びかけ町内会サミットの代表者を集める
- ・ 町内会サミットを開催し、地域の問題を共有しアイデアを交換する
- ・ 町内会サミットの①大義名分②スポンサー③サポーター、を明確化し、全国規模を想定する

ハート アンド ハート

～誰にでもやさしい
まちづくりをめざして～

2002/10/27

1

はじめまして
『ハート アンド ハート』です。

- ・ 実は、「自治会御助け隊」が、変身しました。
- ・ メンバー紹介
リーダー: 藤井 伊佐美
会 計 : 菅
メンバー: 大槻、岸本、谷村、松石、久泉

2002/10/27

2

メンバーの熱い思い

3月グループ分け

地域、公民館、ひとのネットワーク

4月近江八幡での宿泊研修

(仮称)自治会御助け隊構想

5月課題解決手法の研修

みんなのやりたい事をKJ法にて整理

<各テーマに沿って訪問調査研究>

2002/10/27

3

調査記録1 自治会の研究

おうみ未来塾2期生「敬天愛人班」の報告

「K町による公共によせるころ」から

(内容)

未来塾2期生が、それぞれ個別のサブテーマを持ち草津市内のK町内会を調査研究し、そこに住む人々が持つ町内会という公共の心を取りまとめた。その調査研究の様子を代表者からうかがった。

2002/10/27

4

調査記録2

農村における村づくりと国際交流

おうみ未来塾1期生「心のバリアフリー班」
の松井賢一さんの報告

(内容)

心のバリアフリー班の活動報告と、松井さんの仕事上の営農指導を通じて住民と共に活動されている報告をうかがった。

2002/10/27

5

調査記録3

宅老所「サロンいこいのへや」

個人が開設している老人の憩いのサロン

(内容)

主宰者の個人の空家を利用して近所の独居老人が集まり、食事を作ったりみんなで外出したり、無理なく楽しんでいる。現在彦根市内には、宅老所が5箇所あり、その管理運営方法は異なるが、地域での「支え合い」活動に感心した。

2002/10/27

6

調査記録4

甲良町の尼子地域サロン「絆の会」

尼子地域が所有する老人憩いの家での活動

(内容)

地元のお年寄りが集まり、手作りのおやつや、懐かしい歌、健康体操で楽しく過ごしている。現在甲良町内では、各集落ともユニークな地域サロンを開催している。

2002/10/27

7

調査記録5

草津「ひとの」駅

NPO地域通貨おうみ委員会

まちづくりや、地域通貨おうみに関心のある人たちが気軽に集まれる場となるように、空家を借りて参加交流ショップ「万屋おうみ」が、8月23日にオープンした。

2002/10/27

8

調査記録6

NPOひとまち政策研究所

今年7月「ひとまち政策研究所」がNPO法人の認可を取得。NPOのシンクタンクとして、地域に密着した中間支援を展開。理事の一人である阿部さんにお話をうかがった。

2002/10/27

9

『ハート アンド ハート』構想 まちづくりサポートセンターの支援 —誰にもやさしい まちづくりをめざして—

NPOまちづくりサポート
センター「ハートアンドハート」の設立

- ・湖北 ・賛同者
- ・理念 ・活動計画

支援

←

交流

→

参画

←.....

おうみ未来塾グループ活動

7人

<活動例>

自治会

村おこし

生きがい

シンクタンク

宅老所

地域活動

2002/10/27

10

【目的】

センターの必要性は各地で叫ばれているが、実際、ネットワークが無くても、独自に活発に活動している団体もいくつもあった。また、経験者へのヒアリングなどから、「時期早尚ではないか」等の声もあった。よってここでは、現実に関心を持ち上げる際に、協力を要請する団体リーダーを任意に選定し、調査することによって、センターの差し迫った必要性和、現実に関心を持ち上げた際に起こる問題点について探ることを目的とする。

【アンケート対象者】

東浅井郡と長浜市に拠点を置き、且つ、実際にNPOサポートセンターを設立した際に、中核となって運営していけそうな活動家（事前に面会し趣旨説明済み）と、団体の活動内容から、センターを活用する可能性が高いと思われる団体のリーダー（公的名簿より選定）。全32団体を対象に行う。

【調査方法】

平成15年1月22日から平成15年2月5日。調査票を直接団体リーダーに手渡し、後日、同封の返信封筒により返送いただく。

【回収率】

■全32通中、30通回収。回収率93.8%。

NPOサポートセンターに関するアンケート調査票

1、 貴団体の活動について、次の項目にお答えください。

(1) グループ名及び代表者名

・ グループ名

・ 発足年 年

・ 代表者名

・ 会員数 名

(2) 連絡先（アンケート回答者）

・ 住所

・ 氏名

・ 電話

(3) 団体の設立・趣旨についてご記入ください。

(4) 活動テーマについてあてはまるものを選んでください。

（複数にわたる場合はいくつでも○をしていただいて結構です。

ただし、そのうち主なものに1つに◎をしてください。）

1. 環境

5. 物産・産業振興

9. 自治会活動

2. 福祉

6. 観光・地域振興

10. 生涯学習

3. 文化・芸術

7. 情報ネットワーク

11. 国際交流・協力

4. イベント企画・実施

8. ミニコミ誌発行等

12. その他

（具体的に ）

(5) 活動エリア（該当するものに○をして下さい。）

1. グループが所在する市町村内

2. 隣接する複数市町村

3. 滋賀県全地域

4. 滋賀県内及び全国・世界

5. その他（具体的に ）

(6) ここ2～3年の主な活動内容についてご記入ください。

(7) 現在抱えている課題や問題はどのようなことですか、具体的にご記入ください。

(8) 今後、力を入れていきたい取り組みは、どのようなことですか。

2、 サポートセンターについてお尋ねします。

現在、活動している団体等が個々に孤立することなく、さらに連携をとり交流していくためのサポートセンターの必要性を感じていますが、皆様のご意見をお聞かせください。

- (1) サポートセンターの必要性を感じますか。
1・はい 2・いいえ 3・よくわからない

はいと答えた方のみ、関わり方についてお答えください。

- 1・設立に積極的に関わりたい 2・設立されれば参加したい
3・その他（

- (2) センターに対して期待する内容を、いくつでも選んで○をつけてください。

- 1・情報の収集・提供および相談
- 2・研修・交流ネットワークづくり
- 3・研究・実践の企画に対する相談・コーディネート
- 4・イベント・講演会等の開催
- 5・出版及び情報の発信
- 6・イベントや地域活動などに関する調査・研究
- 7・多様な分野の人々が自由に交流できる場所の提供
- 8・その他（

- (3) その他、センターについてご意見やご提案がありましたらご記入ください。

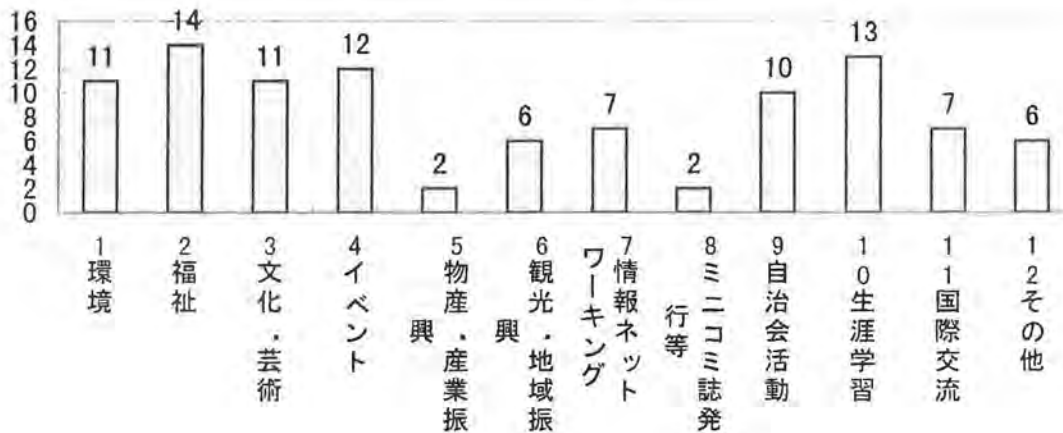
ご協力ありがとうございました。

なお、会則や活動内容のわかる資料がありましたら、1部を回答用紙とともに送付をお願いします。

1-(5) 活動テーマについてあてはまるものを選んでください。(複数回答)

〈選択肢〉 1 環境 2 福祉 3 文化・芸術 4 イベント 5 物産・産業振興 7 情報ネットワーク 8 ミニコミ誌発行等 自治会活動 10 生涯学習 11 国際交流 12 その他

活動のテーマ調査結果



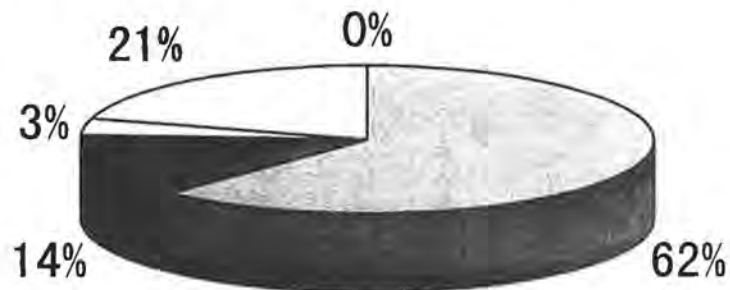
➡ POINT

- テーマは多岐に渡っている。
- 特に「福祉」「生涯学習」をテーマとしている団体が多い。高齢化の影響が伺える。

1-(5) 活動エリア

〈選択肢〉 1グループが所在する市町村内 2隣接する複数市町村 3滋賀県全県域 4滋賀県内及び全国・世界 5その他

活動エリア調査結果



- グループが所在する市町村内(18件)
- 隣接する複数市町村(4件)
- 滋賀県全県域(1件)
- 滋賀県内及び全国・世界(6件)
- その他(0件)

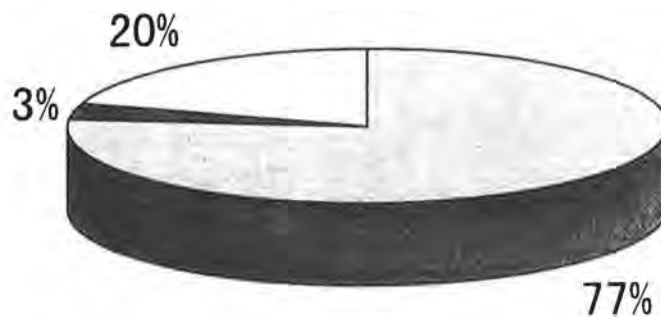
→ POINT

- 市町村内と隣接市町村を合わせると3/4を占める。
- 県全域、全国・世界をエリアに活動するグループも、活動内容を見ると、国際交流以外は地域色が非常に濃い。

2-(1) サポートセンターの必要性を感じますか。

〈選択肢〉 1 はい 2 いいえ 3 よくわからない

サポートセンターの必要性



□ はい(23件)

■ いいえ(1件)

□ よくわからない(6件)

➡ POINT

- 多くの団体が必要性を感じている。
- 「分からない」と答えた団体も2割を占めている。広く活動するためには、より分かりやすく具体的なものを提示することが必要と思われる。

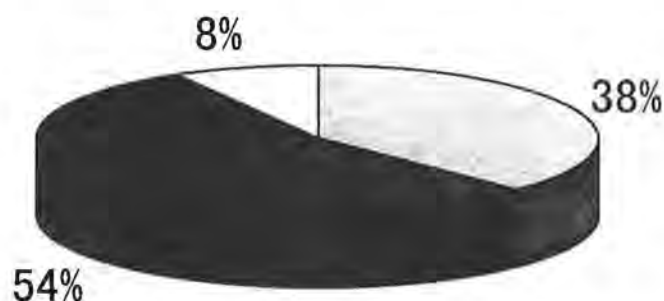
【その他意見】

- 様々なテーマを持つ各団体の共通点を見つけ出すのは困難ではないか。事務所等「場の提供」を行えば良いのでは。

2-(1) 「はい」と答えた方のみ（＝前の問いで「必要性を感じる」と答えた方のみ）、その関わり方についてお答えください。

〈選択肢〉 1 設立に積極的に関わりたい 2 設立されれば参加したい 3 その他

サポートセンターへの関わり方調査結果



□ 設立に積極的に関わりたい(9件)

■ 設立されれば活用したい(13件)

□ その他(2件)

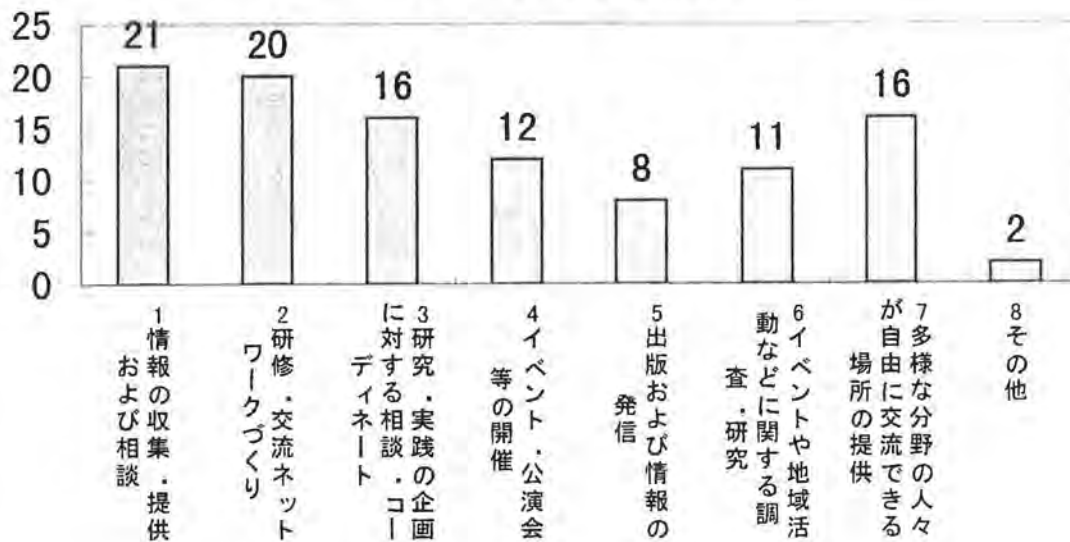
➡ POINT

- 必要性があると答えたうち、9割以上が何らかの関わりを持ちたいと考えている。
- 必要性があると答えながらも、設立への関わりに対する積極性は低い。人材資源の欠乏が懸念される。(個々の団体の問題・課題点でも、16団体が人材欠乏を挙げている)
- 受身的な関わりへの要望が多いことから、サポートセンターを気軽に便利に活用できるような場にすることが重要であると思われる。

2-(2) センターに対して期待する内容を、いくつでも選んで○をつけてください。

- 〈選択肢〉 1 情報の収集・提供および相談 2 研修・交流ネットワークづくり
3 研究・実践の企画に対する相談・コーディネート 4 イベント・講演会等の開催
5 出版および情報の発信 6 イベントや地域活動などに関する調査・研究
7 多様な分野の人々が自由に交流できる場所の提供 8 その他

センターに対する期待



➡ POINT

■ かなり分かれたが、「1 情報の収集・提供および相談」「2 研修・交流ネットワークづくり」が最も多い。個々のグループ活動では人や情報の範囲が狭くなっており、その問題を解消したいという要望が主を占めていることが分かる。

■ 相対的には、「4 イベント・講演会の開催」「5 出版および情報の発信」の要望は低く、広いターゲットに対して、的を絞った情報を発信するのは、あまり求められていない。個々のグループに見合った内容を個別に提供することの方が良いと思われる。

1-(7) 現在抱えている課題や問題はどのようなことですか。(自由記述)

- ・人材不足…16件
- ・財源不足…9件

➡ POINT

- 人材で悩んでいる団体が多い。
- サポートセンターの人材についても偏りや不足が予想される。
- 不況で合理化が推し進められる中、財源についても今後改善される見通しは少ないと思われる。

2-(3) 現在抱えている課題や問題はどのようなことですか。(自由記述)

- 行政の仕事・民間の仕事を分けて、経済という視点以外の、独自のまちづくりを行いたい。
- 現在は行政との対話が無い。新たな枠組みの必要性を感じる。
- HPの立ち上げを行い、人材交流支援の仕組みを作ってはどうか。
- まちづくりの具体的な提案があれば関わりたい。
- 与えられるものだけでなく、自らまちづくりの糸口を探すのが今後は必要。
- 湖北で考える前に、市町村の地固めができているのか。
- できるだけ身近な活動・イベントの情報が知りたい。
- 世情から民活の必要性を感じる。
- 行政で作ったものは限界があり、完全に民間で運営できなければ駄目。
- 自分のまちづくりに関しては、自分たちで議論して考えたい。

等



【今後の方向性について】

- 1) まずは、多くの団体の共通点である、人・場所・情報の問題をサポートできるセンターが必要ではないか。
- 2) 小人数で、効率的に情報収集・提供できる仕組みづくり ⇒ 淡海ネットワークセンターとの連携、インターネット活用等
- 3) センター必要性があると考えている団体のより詳しいヒアリング調査から具体的な展開を模索。
- 4) 高齢者への情報提供方法(インターネットを使わない方への情報提供方法)を考えていくことが必要。

わくわく感動体験プログラムの 開発と仕組みづくり

～『こども』の生活環境からアプローチ～

グリーン・ツーリズム グループ

内田日出史・川尻良治・児島馨・澤九麻男
松田元・前川重和・森嶋利和・吉見精二

なぜ「グリーン・ツーリズム グループ」なのか!?

グループ研究をはじめるとあって、人々の地域間交流を新しい形で創りだすしくみづくりについて、地域づくりと観光、なかでも農山村と都会の人々の体験を通じた交流、つまり、グリーン・ツーリズムについて取り組もうと考えていた。一方で、一人の大人として、子どもたちの健やかな成長を願うとき、豊かな自然に触れ、体験や交流が可能な環境、そうしたことができる場づくりや提供するしくみづくりが必要なのではないかとも考えた。こうした流れのなかで、まず、子どもに焦点をあて総合的な学習の時間や休日を活用した取り組みを優先的に先行して進めることとした。グループの名はそういう形で生まれ、残されてきた。

目 次

第1章 グループ活動の歩んだ道	80
1-1 はじめに	82
1-2 グループ活動の経過	82
1-3 グループ活動の方向性	85
第2章 テーマ探しの道のり	86
2-1 マキノ町を通して	86
2-2 ヒアリングを通して	87
2-3 学校の取り組み状況	89
2-4 まとめ	90
第3章 研究会の立ち上げ	91
3-1 研究会の役割	91
3-2 研究会の方向性	93
第4章 グループ活動の歩む道	94
4-1 グループ活動の将来像	94
4-2 グループ活動を振り返って	95
参考資料	97
1 グループミーティングの記録	97
2 ヒアリングの記録	101
3 研究会への参加呼びかけの記録	105
4 研究会の記録	106

第1章 グループ活動の歩んだ道

1-1 はじめに

グリーン・ツーリズムグループは、2002年2～3月のグループ分けの際の意見交換を経て、4月の近江八幡での合宿において、本格的なスタートを切ることになった。メンバーは、それぞれ自らのフィールドや知識・経験を持ち、地域での活動を実践している者が多く、当然そこには熱い想いが込められていた。メンバーの住まいはみごとに滋賀県内各地に散らばっており、8人のグループ活動への取り組みが、地域・立場などの違う個々のこれまでの経験や想いをうまく形づくることができれば…と思うのであった。そして、さらに卒塾以降のそれぞれの活動に向けての足がかりとなることを期待していた。

メンバーの想いは、一言でいえば「身体で体験（主に自然体験）することを日常として取り戻していくことが大事なのではないか」ということだった。では、グループ活動として何をしていくか。まず、誰に焦点をあてるのか、それはやはり将来を担う「子どもたち」である。社会背景として、地域の人々や環境を活かした取り組みも各方面でますます必要とされ、展開されいていく。そうした流れのなかで、自分たちの経験や想いをかなえていく方法を具体的に探していくこととなった。

1-2 グループ活動の経過

1年間のグループ活動を、例えば、事例研究として終えるのか、新たな枠組みづくりを目指して事業化をも視野に入れた活動をはじめめるのか、そうしたグループ活動の目標到達点の設定とそこまでの道のりをどうするのかの合意形成には時間を要した。

では、その間の歩みを簡単に整理してみると概ね以下のようなようになる。

最終活動テーマ決定までのプロセス

- ☆4月13日 第1回グループ・ミーティング
＜テーマ議論＞基本プランをベースに
・グリーン・ツーリズム・子ども体験学習
- ☆7月31日 第9回グループ・ミーティング
＜方向まとめ＞基本プランを特化
・子ども体験学習のコーディネート
- ☆10月10日 第13回グループ・ミーティング
＜最終目標＞ 研究プロジェクト設立
・「子ども感動体験学習研究会」設立

2002・4月 スタート

コンセンサス（ミーティング）

ミーティング（4/13, 14）

「体験的活動」をベースに「子ども」、「自然体験」「総合学習」をキーワードに活動が始める。議論を進める上でも、現場を知ることから始める

ミーティング（5/19）

「問題解決手法」の実技
グループ体制の自己点検
問題点抽出
次回に各自マイプランを提出

ミーティング（6/25）

「水フォーラムへの参画検討」カ
ヌーツーリング案（3泊4日）
グループ活動の方向としての評価は疑問。引き続き検討

ミーティング（4/30）

学校と地域を結ぶコーディネーターや先生へのサポートの必要性などを議論、都市部の総合学習の取り組みへのヒアリング

ミーティング（6/6）

＜マイプランの発表＞
「カヌーで琵琶湖一周」企画
こども・総合学習のコーディネーター

ミーティング（7/13）

水フォーラム参加案の再検討
グループ活動としては難しい（方向性、規模など）
「感動体験学習」に絞込んではどうか

体験・調査活動（ヒアリング）

ヒアリング（4/30）

地域での一体的な取り組みを県内の先進地と言えるマキノ（小学校、教育委員会、民間施設）、子どもを取り巻く地域の実像

ヒアリング（6/12）

湘南学園（細谷氏）
過去に実施された「抱きしめて琵琶湖」イベントの内容と取り組みの把握（イベントプランの関連）

ヒアリング（7/22）

蒲生野者現倶楽部（井阪氏）
学校の教頭でもある氏の総合学習の取り組み状況とNPOの連携による総合学習の取り組み等

ヒアリング（5/17）

近江八幡・金田小学校（川瀬氏）、学校（先生）の総合学習に向けた取り組み状況や地域との関わりなど

ヒアリング（6/17）

NPO 夢～舞めんと滋賀（鈴木氏）、夢～舞めんと滋賀参加団体及び湖国 21 世紀記念事業協会のその後の活動状況など

ヒアリング（7/31）

マキノ自然観察倶楽部（谷口氏）、氏が代表を務めるの倶楽部と地域の学校との連携に向けた取り組みと今後の展開など

活動テーマ化（企画まとめ）

＜基本テーマ＞

- 吉見提出案が基本テーマ
- ・地域・こども・ひとネットワーク
- ・地域の観光まちづくり
- ・総合学習の場づくり
- ・NPO などのネットワークづくり

「課題解決手法」実技（5/19）

- ねらい：グループが抱えている問題の洗いだし、課題を明らかにし、解決策を探る。
- ブレイン・ストーミングでの具体的コメント
- ・県内 NPO の数珠繋ぎ、ネットワーク化。
- ・体験交流、都市と農村の交流
- ・NPO とネットワーク化し、利用者へジョイントする
- ・事業の形態は NPO、会社の方法も

グループミーティング（7/31）

- ～吉見プランの再提出（修正分）
- グリーン・ツーリズムグループ研究について
- ＜議論展開＞
- それまでの合意点
- ・グリーンツーリズム（農山漁村滞在交流）などの、体験プログラムを開発する。
- ・総合学習で利用する体験プログラムを、NPO とともに開発し学校へコーディネートする。
- ・学校 5 日制による土日の休日 2 日化にともない、子どもと家庭・親を対象に体験プログラムを開発する。

コンセンサス（ミーティング）

ミーティング（7/31）

「感動体験学習システム」をテーマとして完成させる、総合学習や土日のプログラムの教育委員会への提案、NPOとのネットワーク化や共同でのプログラム開発

ミーティング（9/7）

水フォーラムへの参加の是非、マキノで何ができるか再提案を待つ（内田）、グループ活動としては研究会の立ち上げを考えている

ミーティング（10/10）

実施プランの検討と具体化、「研究会」の設立を1月、「フォーラム」の実施を検討、中間発表会で発表・PR

ミーティング（8/17）

「生きている琵琶湖」を歌うなどマキノを舞台に企画案の検討、グループとしては難しい（規模など）ことを再確認、水フォーラムへの参画は今後検討課題とする

ミーティング（9/11）

水フォーラムには参加しない、研究会の設立～1月目標、学校・NPOとの協働を実現化する（コーディネート）の役割を果たす目的

ミーティング（10/18）

中間発表の準備
なぜ「研究会」なのか等やりたいことを明確に示す

ヒアリング（7/26）

びわこネイチャーゲームの会（辻田氏）、教員でもある氏の自然体験プログラムの実践や総合学習へ向けた取り組みについて

ヒアリング（9/11）

県・教育委員会生涯学習課
週五日制のもとでの子どもの体験活動の実施状況の把握、現状の評価と今後の課題など

ヒアリング（10/4）

県・教育委員会生涯学習課
しが子どもの世紀3ヵ年プロジェクトや学校とNPOの連携に向けての今後の展望など

ヒアリング（8/29）

VOICE（苗村氏）
国際交流を中心とする活動を通して、NPOとしての活動状況やその課題、地域との連携について

ヒアリング（9/26）

NPO夢～舞めんと滋賀（鈴木氏）、NPO夢～舞めんと滋賀の今後の活動、総合学習との関わりなど

ヒアリング（11/5）

県・教育委員会学校教育課
学校や先生の総合学習に向けた取り組み、自然体験等のNPOとの連携について

体験・調査活動（ヒアリング）

○テーマの調整

- ・研究テーマを、「（仮称）感動体験学習システムの開発研究」とし、体験学習プログラム開発に絞込む。
- ・NPOとのネットワーク形成により、体験学習プログラムの利用者への提供をコーディネートする。
- ・グリーンツーリズムについては、ツーリズムのレベルで捉えて棚上げし、この時点では取り扱わないこととする。

グループミーティング（10/10）

～ 最新プランの提出

目的：活動方向の整理、具体的実施事項の決定を確認

内容：9月11日の会議での決定事項を確認

○グリーンツーリズム活動の目標

総合学習の場づくりや土日の子どもの居場所づくり
学校・NPOとの協働、NPO数珠つなぎ

○中間発表会での発表

今までの活動、これからの取り組み、研究会の立ち上げ

○決定したこと

- ・教育委員会等への提案活動でアピールする
- ・先生、NPO、行政による研究会の立ち上げ
- ・先生とNPOを結ぶ勉強会をフォーラムの形式で開催

〔結論〕「研究会」1月、立ち上げ。フォーラム3月開催。

活動テーマ化（企画まとめ）

結論・アクション

1-3 グループ活動の方向性

私たちのグループ研究テーマは、「子ども・ひと・地域ネットワーク」からスタートしている。新しいツーリズムによる観光まちづくりによって、大人には生涯学習、子どもには総合学習の場をつくりだし、地域とひと・子どもの間をつなぐプロデュースとコーディネートする、ひと・まち交流ネットワークを創りあげてゆこうというものだった。

その年に実施された滋賀県の21世紀記念事業「夢〜舞めんと滋賀」に参加したNPOを始め地域のフィールド活動をネットワーク化して、広く利用できる仕組みを視野に入れていた。

1回目のグループ会議では、グリーン・ツーリズムと子ども感動体験学習の2本立てのテーマで熱く語られた。いま振り返ってもこの宿泊研修での議論で、ほぼ今日のかたちが出来上がっていたと言える。途中、アウトプットとしてのイベント的な企画の是非やその内容について検討を重ねたが、イベントはスケールの大きさにやむなきに至った。また、水フォーラムに小さなイベントで参加することも考えたが実施には至らなかった。

グループ編成から3ヶ月後、グリーン・ツーリズムを棚上げして子どもたちに未来の大人の夢をえがいて、子ども対象の感動体験学習に特化していった。やはり、始めから子どもの問題に関心が高かったからだといえる。

グループ活動は、地域と深く関わって研究を深めることにした。メンバーの中には4人のフィールド実践者がいたが、その中からマキノ町を選んだ。マキノ町の東小学校の子どもカヌー体験がその後の研究のベースになった。マキノ町は、町中が学びのテーマに満ちていて、多くの人に出会い多くを学ばせてもらった。

マキノ町を始まりとして、学校における総合学習とNPOの活動を何とかうまくコーディネートする仕組みをつくりたいと考え、学校訪問とNPOへのヒアリングを重ねた。

この年から始まった、生きる力を育むことを目的にした「総合的な学習の時間」は、創意工夫を生かした柔軟性のある教育づくりが求められているのだと思った。

学校訪問や新聞の記事によると各学校では「総合的な学習の時間」の授業方法についていろいろと試行を行っているようである。教科書がない授業であるため先生にはアイデアと力の出しどころであり、そのため地域社会などの支援が必要となってきたように感じた。そのためには、この「総合的な学習の時間」へのカリキュラム作成の支援として、NPOを始めとする地域において様々な体験プログラムが用意されるべきであると強く確信をもつに至った。

子どもたちには、自然やほんものに触れ自由に遊ぶ経験が学校とは違った「生きる力」を育てていくのだと思う。そのために安全に遊べる環境とプログラムを作っていくことが、地域と大人に課せられた役割だと思った。そこで、「子ども感動体験学習研究会」の設立を実現することに取り組み、将来に向けてのおもしろい展開を図ることとした。

第2章 テーマ探しの道のり

2-1 マキノ町を通して～「子ども感動体験学習」先進地域から学んだこと

自然や風物に恵まれた観光のまち、交通の要衝として古くから開けた文化・歴史のまちとしても知られているマキノ。一方で、その立地条件から人口減や産業の活性化の問題にも直面するという厳しい現実も抱えている。このように都市部からは離れているが、豊かな自然、歴史、文化に恵まれ、自らの力で地域を創っていくことが可能と考えられるまちにおいて、いったい子どもたちはどのような環境に置かれているのであろうか…。学校や地域が濃密に関わり合いながら、子どもの成長を育てているのではないだろうか…。

○ 学校での取り組み

地域の人達が地元の自然や風物を活かしながら、子どもの成長に深く関わり、地域づくりを進めていこうとしているように思われた。しかしながら、それ以上に教育に携わる関係者の方々の熱意と努力がマキノ独特の雰囲気醸成に貢献している。

マキノ東小では、琵琶湖に面する学校という利点を活かして、カヌーを取り入れた学習に取り組まれている。直接、琵琶湖の水に触れ自分の力でこぎ出すカヌーは、子どもの心を解き放し、心身共に健やかな育ちが期待される。また、総合学習には「びわ湖学習」や「ふれあい学習」として琵琶湖や地元の池沼、野原等の現地を訪れ、また地域の人達との交流の中で自らの目と耳で確かめ課題を発見する仕掛けがきちんと構築されている。

次に、山間部の小規模校であるマキノ北小では、地元の農家や高齢者の方々に協力してもらいながら、地域の生活実感と離れた子ども達に、もう一度自らの生活する場を見つめ直してもらう取り組みを始めている。また、山間の小規模校の立地条件をカバーするためのツールとしてパソコンを使って、他地域の子ども達との交流を行っている。

○ 学校週五日制に伴う土日をどう活かすか

総合学習を中心とした学校の取り組みとともに、他方では週五日制の実施に伴う土日の子ども達の学びや遊びの場の提供に、地域住民や活動団体が取り組んでいる。マキノ町にはこうした住民活動の拠点として、JRマキノ駅前に「マキノ町まちづくりネットワークセンター」が設置され、マキノ町の自然や歴史、文化を紹介した「ぎっとまって」の発行を初めとする情報発信や交流機会の創出など、積極的な取り組みがなされている。また、赤坂山を始めとするマキノの自然と触れあう活動を行っている「マキノ自然観察倶楽部」は、土日を地域で過ごす子ども達への自然ガイドとして、貴重な役割を果たしている。

また、マキノ東小のPTAが中心になり取り組んでいる「マキノの夢の森」づくり構想もスタートし、いずれ子どもも大人も楽しめる自然体験活動の拠点として期待されている。

この他、すでに琵琶湖畔にオープンをした奥琵琶湖マキノパークホテル・セミナーハウスは、カヤックやカッター類を備え、宿泊研修が可能な施設である。子どもの臨海学校や合宿にも活用が可能な施設類が整備されるなど、子ども達の学習環境が整いつつある。

地域

NPO

○マキノ町

(教育委員会)

- ・自然・文化を活かした地域振興
- ・拠点となるまちづくりネットワークセンターの設置
- ・親子で貴重な体験ができるしかけづくり

(小学校)

- ・総合学習は「ふれあい学習」と「びわこ学習」で～地域の自然や環境を現地調査
- ・土日は民間の動きに期待
- ・子どもの生活は都会の子と変わらない
～豊かな自然環境を理解し愛する心を育む
ITを活用し県外との交流促進

(民間 体験施設)

- ・民間による宿泊が可能でカヌーなどの体験施設が琵琶湖に面して立地

(前ページ参照)

○マキノ自然観察倶楽部

- ・文化や自然への理解として自然に触れるプログラムを提供
- ・人材養成(インタープリター養成講座)を実施
- ・学校教育課一学校というルートをつくる必要性
- ・現状のNPOにどれだけ受け入れ可能か疑問

○びわこネイチャーゲームの会

- ・自然体験活動団体のネットワークは必要
- ・体験プログラムの学校への売込には至らず
- ・学校との信頼関係の構築
- ・NPOは理念とあわせて実績となる活動やマネージメント力も重要
- ・学校へはトップダウンで

○大津フリースクール

- ・こどもの居場所づくり
～自主性の尊重、創造力の発揮など
- ・特徴的活動を模索
～土日に向けた体験学習の場など
- ・学校との連携や親の理解
- ・学校は先生、特に学校長次第で変わる
- ・自ら楽しむことが大事
～人との出会いなど

○金田小学校

- ・先生が地域の題材探しに進んで地域に出かけるなどしている
- ・人材バンク、コーディネーターの必要性
- ・学習の方向づけは先生
- ・土日に向けて
～公民館事業の周知・参加、そのための人材確保、地域コーディネーター

○県・学校教育課

- ・学習先としてのNPOの集中化
- ・双方の不慣れからカリキュラムとして不十分な段階
～個々の学校にあわせた計画段階から両者でのプログラムづくりが必要
- ・学校と地域・NPOを結ぶコーディネーターが必要
- ・自主的な教育研究会(総合的学習部会)がある

学校

行政

ヒアリングや見学を通して得られたポイントを整理してみると概ね次のようになる。
(一部省略、各ヒアリングのまとめは参考資料を参照)

〇蒲生野考現倶楽部

- ・総合学習は教科の土台の上に立ち関連付けが求められる
- ・学校はNPOとどう連携すればいいかわからない、NPOを理解できていない面もある
- ・現状ではエキスだけで不十分、全体の流れを考えないとダメ
- ・総合学習の一部をNPOに委ねることは可能、そのためのニーズにあったプログラムづくり
- ・音楽や美術などは受入れやすい
- ・NPOには発想や理念はあるが、体系的なプログラムがない
- ・コーディネーターの力が重要
- ・土日の社会教育の分野ではNPOも関わりやすい
- ・緊急雇用の地域コーディネーター制度では適切な人材を得るのは難しいし継続性が保証されていない

OCASN

- ・子どもと対等に向き合える大人を育てることがミッション
- ・子どもの声に耳を傾ける、そうすれば自分で答えを出すもの
- ・団体鑑賞のプログラムをつくり取扱料による資金確保を検討
- ・教材のコーディネート
- ・子どもは時間をかければ自分で遊ぶから、ゆっくり見守る大人とフィールドがあれば可能

〇子どもの美術教育をサポートする会

- ・外部の専門家を交えた小学校の新しい授業の取り組みを実践
～例) 鳥獣人物戯画図を通し、日本のアニメーションの始まり、動く絵の始まりとして捉え当時の遊びを楽しみ、その後、あぶり出しに挑戦する

〇NPO 夢～舞めんと滋賀

- ・ポスト夢～舞めんととの位置づけ
～多くの人の認知と利用を目指したネットワークづくり
- ・滋賀のNPOの将来を構想している
～リージョナルスタンダード事業の実施
～まちづくり、地域おこしに関わり、コミュニティビジネスの研究、情報発信を事業化
- ・総合学習との関わり
～採算的には厳しく、学校に受け入れられるためのプログラムづくりが必要、先生との連携が欠かせない
- ・旅行会社とNPOの連携事業
～総合的学習の一環としての位置づけ、ツアー商品化
- ・マストツーリズムの質的な変化
～地域性や文化のみせ方、ホンモノ志向の地域の売り方、地域の人々の登場など

〇県・生涯教育課

- ・「しが子どもの世紀3ヵ年プロジェクト」
～地域コーディネーター、学校コーディネーター、県地域教育力体験活動推進協議会・地域教育協議会の相互連携
- ・学校・地域・NPOが同じテーブルにつく、コーディネーターが必要
- ・学校5日制による土日の休み、平日の放課後、子どもの生活全体としてのとらえかたが必要
- ・公民館事業や生涯学習にも子どもの視点がある
～世代交流、学びの場、子どもの居場所という視点

○ 総合的な学習

ねらい：知識を教え込む授業ではなく、自ら学び、自ら考える力を育成するとともに学び方や調べ方を身に付けることにあり、自ら課題を設けて行う学習や将来の生き方を考える学習が積極的に行われる。

内 容：地域や学校、子ども達の実態に応じ、学校が創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間とするものであり、例えば福祉・健康、環境、国際理解、情報など従来の教科をまたがるような課題に関する学習を行える時間として新しく設けられた。この時間では、子ども達が各教科の学習で得た個々の知識を結びつけ、総合的に働かせることができるようにすることを目指している。授業時間は、小学校では3年生以上から週3時間程度、中学校では週2～4時間

国が一律に内容を示しておらず、その内容や名称も各学校が創意工夫を発揮して決めることができるところにある。また、従来の教科のように教科書もなく、自然体験やボランティア活動などの体験的な学習や問題解決的な学習が積極的に行われ、グループ学習や異年齢集団による学習、地域の人々の参加による学習、地域の自然や施設を積極的に生かした学習など、多様な学習が行われる。

県教育委員会の方針：

平成14年度の学校教育の指針として、以下の五点を掲げている。

- ①豊かな心をはぐくむ体験的学習の推進
- ②自ら考え行動できる力の育成を目指す環境教育の推進
- ③人が輝く人権教育の推進
- ④地域に開き、地域に応える学校の創造
- ⑤自己指導力の育成を目指す生徒指導の推進

○ 学校週五日制

ねらい：1992年以来、段階的に拡大してきた週五日制は、2002年度からは「完全学校週五日制」が施行され、土日を利用しながら地域社会や家庭で子ども達が自然体験や生活体験、社会体験、文化・スポーツ活動に従事するなど、様々な取り組みが始まっている。県では完全週五日制の施行に合わせて「しが子どもの世紀3カ年プロジェクト」を推進している。公民館や学校などを中心に地域社会で子ども達の様々な体験活動を推進しようとするものである。

内 容：子ども達の活動の機会と場の拡大を目指して、市町村における地域教育力体験活動推進体制の整備や「地域コミュニティコーディネーター」の配置・研修の実施、県における「地域教育力体験推進協議会」の設置、学校教員・地域コミュニティコーディネーターの研修などが実施されている。
家庭教育の再生を目指して、市町村における子育て学習機会の提供や公民館等における子育て学習の促進が実施されている。

ONPO・学校の関わり方の現況

我々が聴取した「蒲生野考現倶楽部」や「びわこネイチャーゲームの会」など体験活動を実施するNPO等の諸活動は多くあるが、学校の授業時間に関わるところまでは入っていない。どちらかといえば、土日を中心とした学校外活動にそのフィールドを提供しているのが現状である。まだまだNPOサイドも子ども達に合わせた学習プログラム開発は十分ではなく、更に教科との関連性を持たせた総合的学習の時間のカリキュラム作成までは手が着いていない状況にある。学校側も地域や外国人の人達をゲストティチャーとして招いている段階であり、NPOなどの現場で子ども達が様々な体験学習をできるまでには至っていない。

この点、「子どもの美術教育をサポートする会」の活動は、体験の重要性について大きな示唆を与え、学校と地域人材との関わり方の一つのモデルとなる可能性を有している。学校現場に美術館や博物館の第一線の学芸員が入り、子ども達が本物の絵画等に触れ、自ら感動を呼び覚ましながら授業を進めるやり方は新鮮な驚きを与えてくれる。

○ 取り組むべき課題

[総合学習]

これまでのように学習指導要領に定められた内容を現場に適用するだけではなく、どのように地域の自然や文化などの教育資源を学習プログラム化していくのか、また、どのように地域の文化施設や社会教育施設を活用した学習活動を展開するのか、子ども達とともにどのように学習内容を創っていくのか、地域や住民とどのように関わり、地域の人材を学校教育の場へどう活かしていくのかなど、未体験の事柄が多く、教員は戸惑いを隠せないというのが率直な印象である。

もちろん、これまでから地域との信頼関係を築いている学校や体験的学習に熱心に取り組んでこられた先生方は、子どもの興味・関心を育てながら、授業の内容や地域の人材の活かし方に工夫を凝らし、子どもの力を着実に伸ばされている。そうした意味では、学校間あるいは先生間の取り組みに格差が大きく、それに応じて子どもの成長にも関わってくるのではないかと危惧がある。

[土日の対応]

土日の子どもたちを対象とした事業活動は各地で実施されているが、蒲生野考現倶楽部では、さらに本年度から廃校になった学校を活用した「しゃくなげ学校」を開校し、子どもの自然体験活動を拡大実施されようとしている。このように学校週五日制は、多くのNPOにとって、そのフィールドを活かした事業機会の拡大のチャンスを与えるものである。家庭、地域、学校の適切な役割分担の中で、将来を担う子どもの生きる力を各種の体験活動から得るための方策を関係者が一堂に会して探っていくべき時であろう。

第3章 研究会の立ち上げ

3-1 研究会の役割

子どもたちには、自然やほんものに触れ自由に遊ぶ経験が学校とは違った「生きる力」を育てていくのだと思う。そのために安全に遊べる環境とプログラムを作っていくことが、地域と大人に課せられた役割だと思った。子どもたちの「生きる力」を育むには、学校と家庭を支える第3の場の活躍なくして考えられないといわれている。

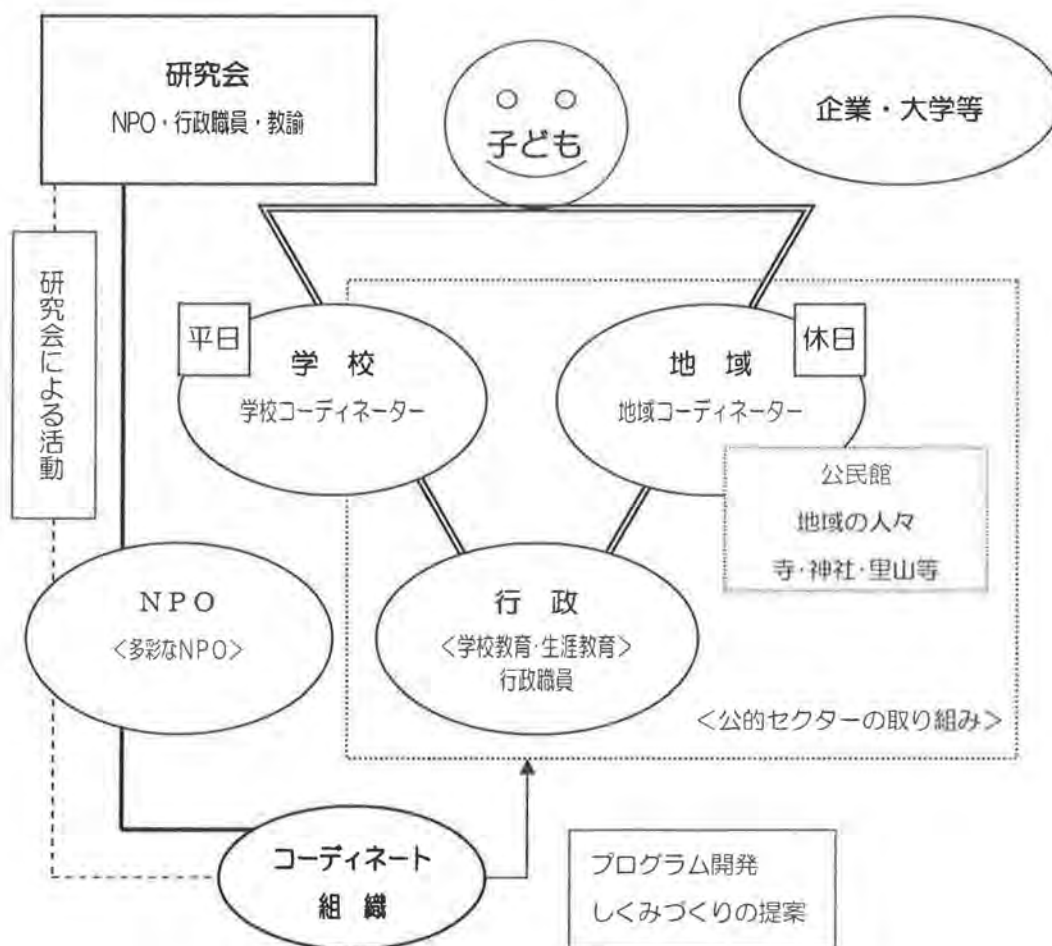
いま、地域の中で子どもたちが自ら育つことを助けるNPOなどの働きが大いに期待されている。多くのNPOの得意分野に自然感動体験のプログラムがある。自然体験は子どもにとって多くの発見や感動を与えてくれる。いまの子どもは「バーチャルな環境」に囲まれていて自然体験の不足が顕著になっているといわれている。いま、子どもたちの「生きる力」「豊かなこころ」を育むためには、身近で「多様な体験」や「ほんものの体験」が可能であることが重要ではないだろうか。現代の子どもたちが「自然に学ぶ」機会を演出できたらと思う。そのことに大人が、少し手を貸すだけで子どもたちは自ら学ぶことだろう。

すでに、学校では、NPOや市民活動団体を積極的に活用されることが考えられているという。地域でも、土曜・日曜日の休日は、子どもや家族を対象にした対応も同じように期待されている。そのためには、NPOや市民活動団体は、各種プログラムを提案するとともに、コーディネート力を発揮して期待に応えて行かなければならない。そこで、学校に対し総合学習を支援する体験学習プログラムと、子ども、家庭・保護者に学校の土曜・日曜日に活用できる体験プログラムの開発と仕組みを考える研究会を設立することをグループ研究の当面のテーマにして活動をしてきた。

研究会は、NPO、教員、県教委職員、行政職員などに参加を得ることができて発足に至った。今後、研究会は「子ども感動体験学習」について学校・地域とNPOとうまく連携をとってプログラムや仕組みづくりについて議論して行く。研究会では、それぞれの立場で参加しているメンバーが専門分野の経験をもってフラットな立場で話し合っ、土日の子どもの活動の場づくりと総合的な学習に、教師の負担が軽減され効率的な授業ができるカリキュラムについて、学校とNPOの立場や考えの違いを超えて理解し合えるようなしくみを提案する方向にもって行って欲しいと願っている。これをコーディネートするわれわれは、NPO・市民活動団体とのネットワークの形成を図り、感動体験学習のバージョンを広げて学校や家庭・保護者の意見を反映しながら、利用可能なプログラムを提案することを具現化して行きたい。

【子ども感動体験学習研究会の位置づけ】

わくわく・感動体験



【目的】 子ども感動体験学習の場づくり

【コンセプト】 子どもたちに“未来の大人”の夢をえがく

【研究の内容】 ・学校での総合的学習のなかで利用可能な体験プログラムを、NPOや市民活動団体とともに開発するコーディネーターの役割について研究する。

・学校5日制による土日休日2日化にともない、子どもと家庭・親を対象に利用可能な体験プログラムの開発と提供システムを研究する。

3-2 研究会の方向性

研究会のメンバー構成は、大きく分けて教育関係、NPO、コーディネート組織である。この三角関係で立場の違う状況を相互理解しながら、子どもに感動体験の機会が提供できるプログラムや仕組みづくりに取り組んで行きたい。

研究会のメンバーはそれぞれの持ち場で課題を持っている。学校教育の関連では総合的な学習の時間にNPOと連携を図ることで効果的・効率的な授業がすすめられるだろう。また、社会教育の関連では「しが子どもの世紀3ヵ年プロジェクト」の施策なかでの地域のコミュニティコーディネーターと学校側のコーディネーターとの連携、そしてNPOとの連携についても課題として話し合うことができる。

NPOにとっては、NPOの活動の理解を深めてもらい、学校や地域のニーズを吸収することでNPOとしての新しい展開を図れることにもなる。すなわち、研究会は、それぞれの立場で有意義な場として活用ができるのではないかな。

そして、研究会の目標として行きたいことは、地域と学校の連携の役目をするコーディネーターをバックアップするために設置されている地域教育力体験活動推進協議会や体験活動支援センターへの提案をまとめることを実現させたいということがある。また、体験活動支援センターの活動とうまく整合してゆけば、そういう仕組みと連動した体制を整備しなくてはならないことも出てくるであろう。

研究会のまとめを受けて、活動グループにも活動範囲が広がって活動に転機が来ることも想定すると研究会の役割は大きく、コーディネートするわれわれの活動グループの研究会への提案も熟慮されたものでなくてはならない。

そして、より多くのNPOへのアプローチにより活用可能でニーズに合った多彩なプログラムづくりに努めなければならない。また、納得性のあるプログラムとしてモデル的に利用されることを実現し評価を得なければいけない。

学校での利用を容易にするためには、学校の最高責任者である校長へのヒアリング調査や、校長会などへ意見交歓会などを設けてアピール活動を積極的に取り組む必要がある。先生に参加してもらう感動体験学習フォーラムや、NPOとの交流会も企画して、先生のNPOへの認識を深めてもらう活動を実践して行きたい。

第4章 グループ活動の歩む道

4-1 グループ活動の将来像

おうみ未来塾を卒業しても、当然、グループ活動としては継続して行くのであるが、メンバーそれぞれにとっては地域でNPOとしての活動に全力を傾ける立場や、フィールドを持たないがコーディネート分野で得意能力を発揮してみようなど、いろんな自分の活かし方がある。

われわれのグループは研究会にテーマづくりから課題解決まで頼るようなスタンスではいけない。自ら動き、新しい情報を研究会に提供する役割を担っている。

また、研究会から出る課題の調査やまとめもしなければならない。事務局だけでなく、NPOへの参加のアプローチ、学校へのニーズ聞き取り調査やプログラムの提案などプロモーションもこなさないといけない。だれが、時間を割いてやるのかは課題である。調査や提案活動にも経費が必要である。活動資金はどうするのか。どんな組織が望ましいのか。継続してグループ活動に参加する人にも考えの違いがあるだろう。少なくとも助成金の取れる任意団体の体裁を整えることも志向してゆくことが考えられる。

ここまで来ると、グループ活動の域を超えて事業型のNPOとしていろんなNPOとプロジェクトでつながって行くことが重要になってくる。よく、NPOを支援するNPOと言われるが、われわれの役割はNPOとNPOをつないで協働で事業をするようなタイプをめざして行くのが良いと思われる。NPOが単体では出来ないことをプロジェクトをつなげてパワーアップすることが大切になってきていると思われる。内需型のNPOも広場に集まってもらう場づくりができれば良いと考える。

いろいろと整理しなければならない課題があるが、走りながら考えることにしてよいのではない。いずれにしても、感動体験学習プログラムが利用可能なものになった時は、コーディネートを担わなければならない。お金のやり取りが発生する事も出てくるだろう。有償の仲介はコミュニティビジネスに発展することも可能になるのではない。しかし、収益が出る事業にはならないだろう。公益事業も継続のためには最低限のお金の流れは作らなければならないので、そのための仕組みづくりについて考える必要がある。

また、県体験活動支援センターや淡海ネットワークセンターの一部の事業を受託し、併せて県体験施設の手配センター機能などの委託を受け、総合的な「ユース感動体験学習センター」として幅広い事業に発展させる夢をいだいてもいいと考える。

グループ活動を振り返って…

グループメンバーのそれぞれの言葉で、これまでの活動や今後の活動などについて、まとめることとしたい。

今後のグループ活動については、現在 NPO が実施している事業をネットワークの体験学習メニューに登録し、地域や学校での行事のプログラムとして利用する仕組みをつくる。NPO等のメニュー提供者と行政、学校、地域等の利用者とをネットワーク化してプログラムをコーディネートするといったことがあげられる。

個人として今後の活動は、NPO 側の体験学習の提供者として、職場でも小学生を対象とした施設見学、体験学習会や中学生を対象にした職場体験を実施しているので研究会でのアドバイスを心得てプログラムに役立てて行きたいと考えている。

(森嶋利和)

これからは大人と子供が共に遊べる生活体制が確立できよう子供感動体験学習の場づくりをしなければならないと思います。近い将来行政に頼らない自己の能力を他者のために利用していただくNPO組織のような非営利活動を推進していき、私には何々ができますといった講師登録をし、出前講師の育成に力を注ぎ、地域に活力がないのは大人達に夢がないからだと自分に言い聞かせ、大人も子供も共通した仕事の体験学習をし、未来塾生のメンバーが県下一円に活動の場を広げるように淡海ネットワークセンターと共に「夢はここから」という気持ちで何事にも挑戦したいと思います。

(澤九麻男)

個人の今後の活動としては、マキノ、湖西を中心に「本物教育」を行う機関運営に携わっていく。湖西地域でモデル事業として指定された「マキノの夢の森づくり」を生かして、農林漁業の再生と新産業の創出を地元を中心に取り組む。

グループの活動としては、「大自然の中で生かされている人間」を実感する滋賀県におけるグリーンツーリズムやエコツーリズムは感動体験を伴い、ますますこれから地域の要になると思う。

「子どもの感動」を演出するのは、「大人の感動」ととらえて、「大人が本当に純粋な感性を発揮する場面や研修」をセッティングするリアル体験が必要ではないか。

(内田日出史)

最後に…

最後に、今後のグループとして活動は、「子ども感動体験学習研究会」との関わりを中心に継続されるものであるが、それぞれ個人の立場としては、卒業後も継続して取り組むことになる者、グループ活動には参加しないけれども自分のフィールド活動を中心に置きながらNPOとしてプロジェクトと関わりを持っていく者などに分かれるなど関わり方は異なることも考えられる。グループ活動に参加する者もNPOとしてやってゆくことがベターであるし、また、NPOのフィールドは未だ持たないがコーディネーターとして得意分野を受け持つのも良いことだと思う。

研究会の議論は、いずれ提案としてまとめ、しかるべき行政機関や、そこを通じて学校や地域に対してNPOの受け入れ活動についてアピールし、相互のつながりを築いて行く必要が生まれる可能性がある。我々の役割としては、研究会への積極的な提案や、NPOの参加やプログラムづくりを具体化して行くことが必要なることだろう。そうしたなかで、今後の活動も、当面は淡海ネットワークセンターの後援を得なければ身分的に信用性がないことになるので引き続き連携を密にして行く必要があり、また、未来塾で築くことができた多くの思いを同じくする人との関係をより強くしていくことが重要である。このプロジェクトを事業型のNPOに発展させて行くことを視野に入れて、引き続き取り組んで行くこととしたい。

1 グループミーティングの記録

〔第1回〕宿泊研修

とき：2002年4月13日～14日 ところ：近江八幡

（まとめ）

- ・プランの提示（吉見）
- ・新しい形のツーリズムとは？、子どもを中心にした体験活動が必要ではないか？
- ⇒・総合学習のコーディネーターを目指す方向で考えていく
- ・総合学習の現場を見学することからはじめよう

〔第2回〕マキノのヒアリングを終えて

とき：2002年4月30日 ところ：マキノ

（まとめ）

- ・プランの再提示（吉見）～「コト起こし（事業化）」案など
- ⇒・今度は都市部の総合学習についてのヒアリングをしよう
- （ヒアリングを受けて）
- ・先生の悩みの受け皿づくりが必要なのでは？
- ・学校と地域を結ぶコーディネーターが必要なのでは？
- ・先生を対象にした研修会の開催が必要なのでは？
- ・土日の子どもの生活にも対応できるプログラムづくりが必要なのでは？

〔第3回〕相互理解を深めよう

とき：2002年5月16日 ところ：淡海ネットワークセンター

（まとめ）

- ⇒・企画案の絞り込みをやりながら、具体的なイメージをまとめていこう
- ・グループ運営の問題整理を「課題解決手法」の機会を利用してやろう
- （情報交換）
- ・地域コーディネーターについて（内田）

〔第4回〕小学校のヒアリングを終えて

とき：2002年5月17日 ところ：近江八幡

（まとめ）

- ⇒・理念しっかり固め、事業化へ向けた取り組みをしていこう
- ・総合学習への具体的なアプローチを考えて～交流や体験ができるものへ～
- ・学校が総合学習にお金を使える仕組みを提案したい
- ・NPOのネットワークづくりも必要になってくる

〔第5回〕「課題解決手法（講義）」を終えて

とき：2002年5月19日 ところ：淡海ネットワークセンター

（主な課題）

「合意形成がまだまだできていない」

- ・活動の進め方に問題がある
（情報交換・共有不足など）
- ・活動の方向性がみえない
（基本理念、企画、マーケティングなど）

（まとめ）

- ⇒・個々に改めてプランを出し、議論を深める

〔第6回〕「マイプラン」を出し合う（その1）

とき：2002年6月6日 ところ：淡海ネットワークセンター

（まとめ）

「マイプランの発表」

- ・内田案の検討
体験を通じて～「カヌーで琵琶湖一周」（水フォーラム）
 - ・川尻案の検討
NPOのネットワーク化+こども総合学習の企画し、コーディネートする
- ⇒・内田案の再検討（規模、実施時期など）
- ・「抱きしめて琵琶湖」の生みの親（湘南学園・細谷氏）にヒアリングする

〔第7回〕「マイプラン」を出し合う（その2）

とき：2002年6月25日 ところ：淡海ネットワークセンター

（まとめ）

- ・内田案の再検討（水フォーラムへの参画、カヌーツーリング（3泊4日））
- ⇒・グループ活動の方向としての評価（グリーンツーリズムと関係性など）
- ・参画する、しないの判断の時期ではないので、引き続き検討

〔第8回〕

とき：2002年7月13日 ところ：安土

（まとめ）

- ・内田案の再検討
- ⇒・グループ活動としては難しい（方向性、規模など）
- ・行政・教育機関・公民館との連携による「感動体験学習」に絞込んではどうか

〔第9回〕

とき：2002年7月31日 ところ：淡海ネットワークセンター

（まとめ）

- ・吉見案の再検討
- ⇒・「感動体験学習システム」をテーマとして完成させる
- ・総合学習や土日のプログラムの教育委員会への提案
- ・NPOとのネットワーク化や共同でのプログラム開発

〔第10回〕県外研修

とき：2002年8月17日 ところ：福井県大野市

（まとめ）

- ・内田案の再検討（加藤登紀子と「生きている琵琶湖」を歌う・・・案など）
- ・「マキノせせらぎ会議」などを通したマキノを舞台にした企画案の検討
- ⇒・グループ活動としては難しい（方向性、規模など）…再確認
- ・水フォーラムへの参画は今後検討課題とする

〔第11回〕

とき：2002年9月7日

ところ：淡海ネットワークセンター

(まとめ)

- ・吉見案の再検討
- ・水フォーラムへの参加の是非
- ・マキノで何ができるか再提案を（内田）
- ⇒・グループ活動としては研究会の立ち上げを考えていこう
- ・マキノでの企画案を待つ
- ・中間発表は、「感動体験学習システム」をテーマ
- 今後、具体的な検討を進める

〔第12回〕

とき：2002年9月11日

ところ：淡海ネットワークセンター

(まとめ)

- ・水フォーラムには参加しない
- ⇒・研究会の設立～1月目標
- 学校・NPOとの協働を実現化する（コーディネート役を果たす）
- ・フォーラムの開催～3月目標
- 「感動体験」をテーマに、3月頃、NPO・先生の交流の場をセット

〔第13回〕

とき：2002年10月10日

ところ：淡海ネットワークセンター

(まとめ)

- ・実施プランの検討と具体化
- 「研究会」の設立・1月
- 「フォーラム」の実施・3月
- ⇒・中間発表で発表・PR

〔第14回〕

とき：2002年10月18日

ところ：淡海ネットワークセンター

(まとめ)

- ・中間発表の準備
- ・なぜ研究会なのか、なぜフォーラムなのか
- ⇒・やりたいことを明確に示す

2 ヒアリングの記録

○ NPO・学校・行政等へのヒアリング

ヒアリング①（4/30）

マキノ東小学校、北小学校。マキノ町社会教育課。

＜テーマ＞「総合的な学習の現状把握とフィールドの研究」

地域での一体的な取り組みを県内の先進地と言えるマキノ（小学校、教育委員会、民間施設）、子どもを取り巻く地域の実像

ヒアリング②（5/16）

＜テーマ＞「フリースクール・冒険クラブの現状」

大津フリースクール（永谷氏）、

子どもに対する周りの大人たちの関わり方や学校との連携についてなど

ヒアリング③（5/17）

＜テーマ＞都会周辺の小学校における総合学習と地域の関わりについて」

近江八幡・金田小学校（川瀬氏）、

学校（先生）の総合学習に向けた取り組み状況や地域との関わりなど

ヒアリング④（6/12）

＜テーマ＞「メンバーのイベント企画提案に関連して過去の事例を聞き取り」

湘南学園（細谷氏）、

過去に実施された「抱きしめて琵琶湖」イベントの内容と取り組みの把握を行った（イベントプランの関連）

ヒアリング⑤（6/17）

＜テーマ＞「前年実施の夢～舞めんと滋賀の参加団体についての調査」

NPO 夢～舞めんと滋賀（鈴木氏）

夢～舞めんと滋賀参加団体及び湖国 21 世紀記念事業協会のその後の活動など

ヒアリング⑥（7/22）

＜テーマ＞「総合的な学習へのNPOの関わり方の方向性について」

蒲生野考現倶楽部（井阪氏）

小学校の教頭でもある氏の総合学習の取り組み状況とNPOの連携による総合学習の取り組み等

ヒアリング⑦（7/26）

＜テーマ＞「総合的な学習とNPOフィールドの関わり方の可能性について」

びわこネイチャーゲームの会（辻田氏）

教員でもある氏の自然体験プログラムの実践や総合学習へ向けた取り組みについて

ヒアリング⑧ (7/31)

＜テーマ＞「マキノ自然観察倶楽部の活動と総合学習の受入について」

マキノ自然観察倶楽部(谷口氏)

代表を務めるの倶楽部と地域、学校との連携に向けた取り組みと今後の展開など

ヒアリング⑨ (8/29)

＜テーマ＞「NPOの国際交流分野での取り組みの内容について」

VOICE(苗村氏)、

国際交流を中心とする活動を通して、NPOとしての活動状況やその課題、地域との連携についてなど

ヒアリング⑩ (9/6)

＜テーマ＞「事業型NPOの活動状況について」

HCCグループ(末富氏)

NPOの活動状況と進める上での課題、NPOの事業化に向けた取り組みなど

ヒアリング⑪ (9/10)

＜テーマ＞「子ども対象のプログラム開発の可能性について」

CASN(谷口氏)

子どもを対象に活動するNPOの活動状況やこれからの展開、子どもとその取り巻く環境など

ヒアリング⑫ (9/11)

＜テーマ＞「総合学習の取組みについてのヒアリング」

県・教育委員会生涯学習課

週五日制の下での子どもの体験活動の実施状況の把握、現状の評価と課題など

ヒアリング⑬ (9/26)

＜テーマ＞「新しいNPOの設立趣旨、活動方針について」

NPO夢～舞めんと滋賀(鈴木氏)

NPO夢～舞めんと滋賀の今後の活動、総合学習との関わりなど

ヒアリング⑭ (10/4)

＜テーマ＞「子ども感動体験学習とNPOの関わり方について」

県・教育委員会生涯学習課

しが子どもの世紀3ヵ年プロジェクトや学校とNPOの連携に向けての今後の展望など

○「子ども感動体験学習研究会」参加予定者へのプレゼンテーション

プレゼン①（10/2）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」設立の趣旨説明
県・教育委員会生涯学習課
研究会の趣旨説明・チャート図説明
滋賀子ども3カ年計画の取組み内容ヒアリング

プレゼン②（11/5）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」設立の趣旨説明
県・教育委員会学校教育課
研究会の趣旨説明・チャート図の説明
総合学習の現況についてヒアリング

プレゼン③（11/14）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」設立の趣旨説明
蒲生野考現倶楽部（井阪さん）
研究会への参加呼掛け
研究会の趣旨説明・チャート図説明
研究会の課題について

プレゼン④（11/14）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」趣旨説明。フィールド見学
膳所の山辺を愛する会（山崎さん）
趣旨概略説明
フィールド見学

プレゼン⑤（11/28）

＜目的＞「NPOまきの自然観察倶楽部の参加について」
マキノ自然観察塾（谷口さん）
研究会発足準備の経過説明
NPOとして参加呼掛け

プレゼン⑥（１２／１２）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」の趣旨説明。

長浜市国際交流協会（辻川さん）

研究会の趣旨説明、NPO として参加を呼びかけ

プレゼン⑦（１２／１２）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」の趣旨説明。

子どもの美術教育をサポートする会（津屋さん）

研究会の趣旨説明、参加を呼びかけ

プレゼン⑧（１２／１２）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」の趣旨説明。

セブンドロップス（澤さん）

研究会の趣旨説明、参加を呼びかけ

プレゼン⑨（１２／１２）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」の趣旨説明。

CASN（遠藤さん）

研究会の趣旨説明、参加を呼びかけ

プレゼン⑩（１２／１２）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」の趣旨説明。

大地の農学校「夢塾おうみ」（吉田さん）

研究会の趣旨説明、参加を呼びかけ

プレゼン⑪（１２／２０）

＜目的＞「子ども感動体験学習研究会」の趣旨説明。

びわこネーチャーゲームの会（辻田さん）

研究会の趣旨説明、NPO としての参加呼掛け

3 研究会への参加呼びかけの記録

子ども感動体験学習をテーマにして、学校で始まったばかりの総合的な学習の様子と、NPOの活動内容を見学やヒアリングを展開し、また県教育委員会へグループ活動の方向を示しながら情報収集をしてきた。

そして、そうした状況から、学校・行政、NPO等の立場を超え、子どもが豊かに育つことのできる生活環境を確保するには、「ホンモノ」に触れ、感動が得られることが重要であるという認識から、「子ども感動体験学習研究会」の場を設け、今後の方向性とともに議論を深めていきたいとの願いから、研究会の参加者の呼びかけを開始した。

われわれがグループ活動で考えてきたことを、チャート図にして、研究会の目的と今後の活動イメージとして説明を行った結果、13人の方が参加されることになった。

呼びかけをするなかからは、主に次のような意見や提案などが寄せられた。

○学校について

- ・学校現場でも総合学習のストーリーが出来ているとはいえず、例えば環境など単元をどうするか問われている
- ・総合学習は学校だけでは対応できないという認識がある
- ・いま総合学習には飢えている時代、タイミングは良い
- ・先生の負担を少なくするという側面がある
- ・地域と一体となって進める意識を高めるための公的な研修が必要
- ・NPO とつながって行くことの資料、事例、メリットを知りたい
- ・学校の先生はプログラムができれば飛びついてこられるのでは
- ・カリキュラムの提案は、望んでいるところではないか

○NPOや地域について

- ・「総合学習」を受入れられるNPOは少ないのではないか
- ・NPOはボランティア意識強い、ミッションだけが先行し、プログラムは少ない
- ・NPOとの関係は継続拡大して行きたい
- ・地域で動いている人がいないと活動が進まない

○各機関等との連携について

- ・地域コーディネーター、学校担当コーディネーター、協議会（県地域教育力体験活動推進協議会の地域教育協議会部会）のつながり
- ・淡海ネットワークセンターとのつながり

○コーディネート、プログラムについて

- ・コーディネートする人の社会的立場については、専門職化、認証制度も必要
- ・プログラムづくり～NPOのノウハウ活用は、文部科学省も位置付けている
- ・プログラムづくりを行い、提供する需要は本当にあるのか
- ・有料プログラム化して、費用負担を含めてシステムづくりを提案したい

4 研究会の記録

〔第1回〕「子ども感動体験学習研究会」

- と き：2002年1月24日 ところ：ピアザ淡海 県民交流センター201
- 参加者：NPO活動実践者10名、県4名（生涯学習課3名・学校教育課1名）、グリーン・ツーリズムグループ8名、淡海ネットワークセンター1名
- 要 旨：1. 「子ども感動体験学習研究会」の経緯について
 おうみ未来塾／グリーン・ツーリズムグループ 代表から～吉見
2. 自己紹介
 研究会メンバー、グリーン・ツーリズムGメンバー
3. 研究会メンバーを代表して
 蒲生野考現倶楽部から 一言
4. 活動事例と今後の取組みについて
 美術教育を進める会から 活動の様子を
5. 意見交換
6. その他（次回開催予定(2/28)）

〔第2回〕「子ども感動体験学習研究会」

- と き：2002年2月28日 ところ：淡海ネットワークセンター
- 参加者：NPO活動実践者5名、県2名（生涯学習課2名）、グリーン・ツーリズムグループ3名
- 要 旨：1. 報告（マキノ自然観察倶楽部）
 活動経過、
 課題（地域住民の自然環境への認知、里山(民有地)の開発の恐れなど）
2. 報告（県生涯学習課）
 NPOとの連携による地域学習活動、「滋賀県体験活動支援センター」について、
 「NPOとの連携による地域学習活動活性化支援事業」について
4. 意見交換
5. その他（次回開催予定(3/28)）

【編集後記】

思うに、グリーン・ツーリズムグループは、「チャーハン」でも「まぜごはん」でもなく、実は「少なめの水で炊いた白ごはん」だったのかなあと思う。「つぶぞろい」ではなくて、「おにぎり」にはしにくかったのかと。大きめのりでくるっと包んでもらっても、こぼれるような。でも、「白ごはん」には一粒ひとつぶにしっかりと味がした。どういう味かはみんな感じ取りましたよね。10年後、「おにぎり」にはならないかもしれないけれど、「てんしょくの店」か、「駄菓子」になって「ヒット」しているかもしれませんね。「白ごはん」もいいけれど、たまには、「焼きそば」もみんなで食べましょう。

最後になりましたが、くるっと包んでもらってありがとうございました、天川さん。また、報告書の編集にあたっては、ぼくに活躍の機会をせっかく与えてもらったのに、結果的に、大変ご迷惑をおかけすることになって本当にごめんなさい、川尻さん、吉見さん。

(児島)

てんしょく・卒業報告書目次

山 藤 田

口 淵
田

吾 久

往 充 美

子 宏 子



田 名 桑

中 田
昌

義 陽

郎 一 見

目次.....	108
前書き.....	109
第一章 コミュニティビジネスとは.....	110
第二章 地産地消について.....	112
第三章 グループ「てんしょく」合意形成・事業化の歩み.....	113
第四章 こさじまやについて.....	119
第五章 「ままや」は身体と心にやさしいお店.....	121
第六章 事業計画の詳細.....	122
てんしょくの目指すもの	
1. 経営目的（ミッション・ステートメント）	
2. 経営理念	
3. ままや全体構想	
4. 経営戦略	
5. 機能別戦略	
(1) 品質マネジメント	
(2) メニュー開発	
(3) 仕入管理	
(4) 店舗開発	
(5) 店舗運営	
(6) 教育訓練	
(7) 情報システム	
(8) 法人組織のありかた	
7. 章の結び	
第七章 店舗イメージ図.....	133
第八章 今後の活動スケジュール予定.....	135
編集後記.....	137

前書き

山口吾往子

「てんしょく」が未来塾3期生研究グループのひとつとして発足してから早1年近くが経過する。昨年4月合宿でのグループ結成当日、うららかな春の日差しの元、湖畔の柳と桜をながめながら近江八幡の古い町並みをメンバー6人で散策した。その全く同じメンバーが、この1年で互いに信頼を醸成しあい、共通のコンセプトを形成しながら現在新事業設立に向けて走り始めている。思えば人との出会いの妙を感じずにはいられない。

てんしょくの構成メンバーは6人6様である。が、重奏低音として二種類の全く異なる、ときに互いに不協和音を奏でる思想と背景が存在する。ひとつは、リーダー糸昌見のもつ、自然中心的で、ときに東洋哲学的な「身土不二」思想、農業観である。もう一つは、実業界でのキャリアに裏打ちされた、田中、名田両名のビジネス・オリエンティッドなコミュニティ・ビジネス観である。

この二つの重奏低音は、理念先行型NPOにおいて採算を重視して持続可能な事業体を形成するに当たり、全く反対のベクトルをもったものとして、メンバー間の思想の乖離、ひいては運動体の弱体化に繋がりがかねないものと通常思われる。が、てんしょくでは、メンバー間の信頼醸成、食・農業に対する共通コンセプトの形成に、4月から8月という、通常1年間のグループワークでは考えにくいような長期間を費やした。これはリーダー糸の判断によるものである。

この4ヶ月に、われわれは、「食べる」ということが人間にとって根源的な営みであること、そして、農業は「食」を支える重要な産業であり、人みな全て土より生まれ土に還って行くべき存在であることを、身体の細胞のひとつひとつに渡って体感するという、得難い経験を行うことが出来た。それも、メンバー全員が、机上の空論に終わらずに、である。つまり、糸の実体験に基づく哲学を、残りのメンバー5人が追体験し、自らのものにする事が出来たわけである。

一方、田中・名田両名も、これまでのキャリアで培われたビジネス理論に基づく事業立ち上げのノウハウを存分に提供し、それを個々のメンバーの深層意識として定着させることに成功した。その現段階での成果が、未だ仮説としてではあるが、以下に提示するてんしょく＝コミュニティビジネスモデルの青写真である。

この重奏低音は、ある意味男性原理・女性原理の対立とも言えるかもしれない。しかし、男女共同参画社会の謂は、異なる原理の対立から止揚へと向かい、新しい何かを社会に付け加えることであろう。いうまでもなく、以下提示するのは我々の活動の途中経過に過ぎないが、今後滋賀県において、我々の活動が、異なる二つの重奏低音を止揚することに成功し、不協和音も含めて新しく美しいシンフォニーとして皆様の耳に届くことを願って、前書きに代えさせて頂きたい。

第一章 コミュニティビジネスとは

田中 義郎

1. 視点

福祉、医療、環境、教育、文化などの分野は地域コミュニティにとって不可欠なものである。本格的な高度成熟化時代を迎え、ますますこれらの分野の充実にその期待(需要)が高まっている。

しかし、元来、これらの分野は市場メカニズムが働きにくく、また、行政サービスのレベルでもその取り組みは限定されていた。

地域コミュニティを良くすることは、社会の要請である。

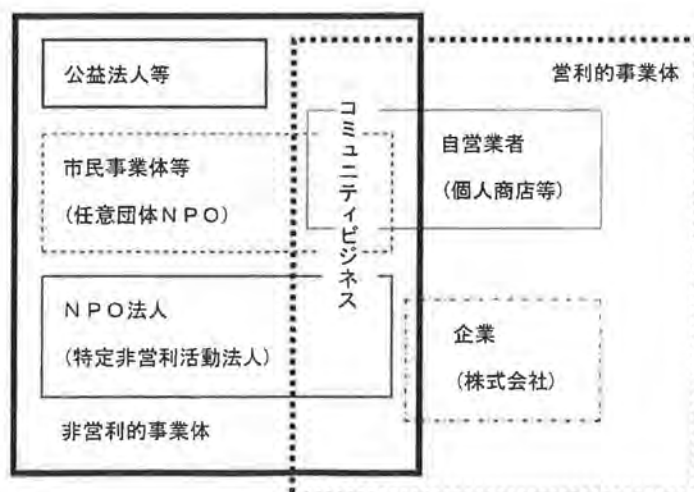
その要請にどのように応えるのか。それは従来の発想を変え、ビジネスという手段でマネジメント手法の活用を図りながら、地域コミュニティを良くする取り組みが有効である。

ビジネスといってもいろいろある。地域コミュニティを事業基盤とする限り「公共性の高い市民住民協力型ビジネス」の展開が理想である。

2. 規模

地域コミュニティのサイズに合った一人ひとりの顔が見えるスモールビジネスが最適である。利益は地域コミュニティにどれだけ貢献したかという貢献度の対価として考え、その対価でビジネスの維持・充実(発展)を図っていくべきである。

3. 事業主体



出典:CILK1998年7月号

4. 定義

地域コミュニティが求める、もの(商品)やサービスを提供し、提供する側も受ける側も双方の喜びを分かち合いながら、コミュニティという社会資本を育て上げ、地域コミュニティを良くしていくビジネスであるところでは定義する。

5. てんしょく

てんしょくをコミュニティビジネスとして立ち上げたい。微力ではあるが、地域コミュニティに貢献したいという志を忘れず、コミュニティビジネスの規範を示したい。



第二章 地産地消について

名田 陽一

ここでは、「地産地消」についてわれわれの思うところを述べておきたい。地産地消はてんしよくの経営理念（第5章にて後述）の支柱であるが、誤解される事も多い概念であるため、その定義を明らかにしておくべきと考えるためである。

結論から言えば、それは世上言われる事のあるような、その土地に閉じた排他的・閉鎖的な考え方ではない。また、何らかの既得権益を守ろうとする保護貿易主義や底の浅いナショナリズムとは、全く無縁である。

「人間は観光する動物である」という定義がある。その特徴として、サイトをシーイングしたがる、風光明媚な所へ出カケタガル、唯一の動物というものである。

ところで、この国で携帯電話を持っている人は60代までの全世代平均で既に61%。パソコンを所有する人は58%（博報堂調べ。同社刊『生活定点2002』より）。情報交換はこの様にヴァーチャルで事足り、お金の決済やショッピングも同様。宅配ビジネスも充実の一途にあり、職業生活においても、在宅勤務の効率性が問われている。

こうした状況から考えれば、長期的には「必要な外出」はどうしても人に会う必要がある時のみ、となつてゆくのではないだろうか。従つて、さきの定義＝必要ナイノニオ出カケシタガル動物としての特徴から、近い将来、観光は生活の大変重要なファクターになる。いや、既に我々は観光なしでは生きられない。

それでは、その観光の根本的な魅力は何か？といえ、それは人間の基本的な欲望にフィットするものであろう。その中で最も「怪シくなくて推奨しやすい」ものが、食欲である。人生＝観光＝食欲となれば、出かけた先で採れたもの（地産）の美味しさが鍵である。

遠距離食品流通の環境コストと経済コスト、フェアトレードの問題、人から人を介するたびにそこに付加される夾雑物（例えば、購買意欲をそそる目的で添加される化学物質。例えば、個々の利害の事情で曖昧にされた病原菌の問題）。これら看過できない問題に、「やっぱり畑で嚙りつくトマトはうまい」という素直な喜びをあわせて、出かけたその土地での美味しさは、ますます人間にとって重要になってゆく。

食品産業は、世界の食品を留まる事なく輸入して来た。それは、この国の食生活を楽しむはしたが、本当に豊かにしたのだろうか？という悔悟の気持ちが、今厳然としてそこにある。いや、むしろ引き換えに作ってしまった問題がこの国を覆い尽くしている。

これからは、例えば、水口に出かけて水口の人と一緒に、有機の畑のそばで調理したズッキーニの花のピッツァをたべたい。捨てられる運命にあったその花の美しいこと、美味しいこと。「それがとてもおいしい」という情報がヴァーチャルで流れ、人が集まれば、イタリア人のピッティオーロを水口に招いて交流しよう。もしも日本の土にズッキーニがあわなければ、そのイタリア人の知恵を借りて、負けずにおいしいものを、日本の畑で見つけてもらおう。そして家に帰れば、我が家のキッチンでも少し野菜を作ってみよう。

これがてんしよくの考える、そして体得してきた、地産地消である。

第三章 グループ「てんしょく」

合意形成・事業化への歩み

山口吾往子

てんしょくは、オフライン・ミーティングのみならず、オンラインでの情報交換がグループ決定当初からコミュニケーションの柱とされた。つまり、ミーティング回数もさることながら、ネット上のメーリングリスト（以下ML）にて、メンバー間のコミュニケーションが深化されていったのが大きな特色である。これは、ひとつには、メンバーそれぞれが別々の仕事を持っており、オフライン・ミーティングがあまり頻繁に行えないというデメリットを補填する意味があった。が、徐々に、ML上での議論がさかんになり、ML上の議論を受けてオフライン・ミーティングの議題を決定し、結果的に効率的なミーティングの議事進行を促進する働きを持つようになっていった。

てんしょくの合意形成における歩みを振り返ると、次の4つの時期に分けることができる。

1. グループ形成期
2. メンバー間の対立期
3. 対立止揚期・中間報告へ
4. 具体的事業化開始期→現在へ

以下、それぞれの期ごとにみていきたい。

（「ミーティング」「体験」「検食」と明示なき記述は基本的にML上で行われた議論によるものとしてみていただきたい。）

1. グループ形成期

3月30日 未来塾3期グループ分け「お茶漬けプロジェクト」結成

提唱者：田中

4月13日 グループ名「てんしょく」決定→方向性決定

- ① チームの目的を、空き屋ービジネスー食縁の一体化をはかり、新しいタイプのコミュニティづくりの「場」を提供することと確定
- ② 理念：ほんものの食の提供
→「ほんもの」は、5月～6月のフィールドワークを経て定義づけする。
- ③ チーム内コミュニケーションをオフラインとオンラインに分け、MLでのコミュニケーションでコミュニケーション不足を補填

するものとする。

④ グループ代表者、桑 昌見に決定

経理：名田 陽一

情報管理：山口 吾往子（IT リテラシーの補助も分掌）

4月19日 桑宅で山口、筍料理をご馳走になり感動

身土不二、医食同源について体験、その体験をML上で共有

4月30日 桑「たんぽぽの綿毛の秘密」に気づく

→タンポポは花を散らした後に一旦花を閉じ、花びらを落とすが、

その後に出てくる綿毛がもう既に下に用意されている

（命の循環についての気づき）

5月4日 てんしょくミーティング 草津コミュニティーセンター

MLの議論を受け、本物の食とは何かを考えるに当たり、有機・無農薬

野菜の真のおいしさ、その野菜が育つ過程を畑に実際に行って体験する

必要性があるとメンバー合意

5月6日 桑から名田、田中に「ちょっと待った」コール

この発言が、ターニングポイントになったので、以下抜粋させていただく。

「私の理念に、みんなが具現化するの？それって、それでいいの？」

私が、農と食へのこだわりをもっている。みんなも持っている。私が、けっこう具体化していけている。だけのことなのじゃないの？

私の理念を吸収する、というより、私は、あゆちゃんの思いを出してほしいよ。それと、私が目指したいこと、提供したいこと、おいしいと思っていることとぶつからんと意味ないのと違う？それで、あゆがほんまにそうや、と頭も心も体も納得してくれることがあったら、それはその方向が二人の円が（縁が）重なる部分だと思うんやけど。

ようさんの言葉には、勇気付けられるけど、でも、今の私は成功を目標にしたいわけじゃないの。もちろん、ビジネスとしたときには成功させんとあかんけど、今の段階では、ちょっと待って一という感じ。たとえば、うちに来て、とれたて野菜食べたら、そら、おいしいに決まってる。ほんで、これはいける。これなら売れる。よし、これを売り出すぞというのなら、ちやうような気がする。

そんなブランドはいらんどー。

ビジネスマンようさんを離れたようさんは、何食べたいの？今まで、一番感動した食べ物は何なの？食べるときに、「あーありがとう」と思ったことある？葉っぱの繊維の美しさに見とれたことある？

お願い、ゆっくりいって。せつかくここで会えたみんなやから、みんなが、何を食べてきて、何に感動して何を食べたいのか教えて。

畑の野菜はみんなに食べてもらう日を待ってるから…ゆっくり大きくなってるから。」

- この発言をきっかけに、理念・信頼関係醸成の議論MLでさかんになる。
8月まで信頼関係醸成にゆっくり時間をかけることでメンバー同合意
- 5月11日 田中、3期西山さん、衆宅訪問 野菜料理体験
- 5月28日 「それいゆ」バス解体・改造手伝い（直売所づくり）、畑体験、
野菜料理体験
- バス解体体験、畑で野菜が育っているところを目の当たりにすることにより、問題解決に際して身体を動かすことの重要性を体感
- 6月1日 てんしょくミーティング
5月28日畑体験をふまえ、野菜・米のおいしさこそ、「本物」の食、との合意がメンバーの中に形成
- 6月9日 4期生入塾式 「ばらばらで一緒」の宣言
- 6月27日 衆、甲賀郡小佐治に転居 おくどさんとの運命的対面
のちに「こさじまや」と命名
- 7月7日 伊吹町「若いぶき」検食 おかみ、林貞子さんのパワーに圧倒
→「元気な中高年者に雇用を提供」することの可能性を感じる。
逆にパワーをもらえるだろうという予感
- 7月21日 畑仕事、おくどさん開き
畑仕事のあとのおくどさんで炊いた有機無農薬米のおいしさを初体験
- 8月4、5日 合宿@能登半島「ふらっと」
ふらっと若夫婦、環太平洋料理と地産地消の流れに与したい思いを体感
さんなみ夫婦の30年の歩みに感動
- 8月11日 てんしょくミーティング
ミッション・ステートメント、事業ビジョン、ターゲットの選定、
今後の目標、事業計画粗案作成のための作業グループ設定
商品開発部 衆 田淵 山口（メニュー開発）
経営企画部 山口（ビジネスプラン粗案作成）
不動産部 田中（空き屋情報・関係官公庁への交渉・問い合わせ）
店舗開発設計部 藤田（インテリアについての調査）
法人設立準備 名田（事業に最適な法人格の検討）



2. メンバー間の対立

9月6日 商品開発部ミーティング

9月7日 てんしょくミーティング

→ビジネスマン田中、名田と、

商品開発部に属する3名との間の意見相違が明らかになる。

(以下議事録抜粋)

I・商品開発会議(9月6日)を経て、同担当(桑・田淵・山口)より動議提出

「店のあり方と事業形態、各自自身の主体的な関わり方が、整合しない。

こんな状態では商品開発は出来ない。」

①店のあり方が不明な現段階では、メニュー作成は出来ない

②料理人のメンバーがいない現在、料理をコアコンピタンスに企画を進める事は出来ない

プロの料理人の事業ドメインに参入することに違和感を感じる

③名田・田中の姿勢はマネジメント志向であるが、我々はそうでない。自ら現業に関わり
たい。もっぱら料理人・従業員を雇用するのみの方向の事業企画は、進められない

④名田のNPO活動にビジネス理論を持ちこもうとする姿勢に疑問

田中のまず店ありき、というハイリスクを省みない姿勢に疑問

よって、事業形態に修正動議を提出する。

「地に足のついた活動を地道に積み上げていくことが成功のカギ」

①料理の提供は先行させない

②体験型グリーンツーリズム事業を先行させ、ノーリスクで小さく始める

①この動議提出の背景には、事業企画のプロである田中・名田に対する誤解と、

両名の説明不足があった。両名と商品開発部はお互いに反省を要する。

名田はおしつけがましいし、田中の断定的発言には大きく影響され自身の意見を

見失う。こうした人間関係に対する不満についても率直に示され、相互に理解した。

②現在すすめているのは、今後事業計画を優れたものに練り上げるための、仮説事業モデルの策定・批判的検討のための叩き台の準備である。

これをまず明確にし、様々な角度から検証することが事業企画の核心である。

この点の共通理解が欠けていた。今回それを共通認識できたので、

商品開発担当は再度メニュー作成に入る。

③コミュニティビジネス(新しい文化の起爆剤であり社会的弱者への貢献。

事業採算の目的は活動を持続可能なものとすることに限定したい)は

これからの社会のニーズであり、我々の共通認識不足による誤りでこれに対する

関与を断念することは、誰も本意ではない。

まずは中間発表（決めた日程目標にはこだわりたい。目標なくしては問題の発生も、その解決による進歩もありえないから）での仮説事業モデルの提示を実現しよう。仮説の検証はそれから開始され、事業のリアルな姿や各人の関わり方はそのあとの問題である。

→以後、対立は徐々に止揚されていく方向に向かう。

9月中 衆・山口、田中が講師を務める「女性創業塾」に参加
→「町屋ままや」「こさじままや」サクセスプラン構想完成

3. 対立止揚・中間報告へ

10月5日 てんしょくミーティング
 衆・山口両名の「ままやサクセスプラン」承認
10月11日 衆 ままやコースメニュー試作・試食・写真撮影
10月13日 てんしょくミーティング
 レシピマスター 改めて衆に決定
10月27日 中間発表→「ままや」構想発表

4. 具体的事業化に向けて

11月17日 草津商店街 店舗探し
 →西井さん「湖南寝装」（元布団店）との出会い
12月4日 空き店舗下見
12月15日 てんしょくミーティング 空き店舗下見
12月24日 店舗、HCC末富さんに店舗診断頂く
1月15日 神楽岡工作公司 井上さんをご紹介頂き、セルフビルド、店舗改装について面談
2月9日 ままやにて、未来塾「日高先生を囲む会」
2月23日 てんしょくミーティング

執筆3月1日現在に至る

以上駆け足ではあったがてんしょく合意形成の流れを見てきた。ターニングポイントは2回あったと思われる。

1. 5月6日、衆の、「ちょっと待った」コール
2. 9月7日てんしょくミーティングでの対立

である。

5月6日以前、衆を「おかみ」とし、おかみの野菜料理をメインに、お茶漬け屋をビジ

ネスマン組がプロデュースするという図式が成立しかけていた。とくに、常日頃から生き馬の目を抜くビジネスワールドで百戦錬磨の闘いをしている名田には、月～金の仕事のペースでこのてんしょく事業を立ち上げていこうという思惑があった。しかし、当の糸自身のストップにより、メンバー一人一人全員が、自らの「食」について、ひいては「食ること、生きること」についての、魂の深部にわたる洞察なしにはこの事業はなりたたないことを、メンバー全員が自覚するにいたった。これは、現在混沌たる状況を呈している食の世界において新しいものを生みだし、それを市場の淘汰にあえてさらすという困難な挑戦において、必要不可欠なコンセプトワークであったと思われる。

また、2番目の対立は、まさに偶然か必然か、ビジネスマン＝男性2人と、商品開発部＝女性3人の対立であった。ビジネスマン側には、事業を動かす上でビジネスワールドで所与とされている事柄についての説明が充分に必要なことについての認識不足があり、逆に、商品開発部には、料理人がいないのに、女性であるという理由で商品＝メニュー開発に自動的に振り分けられた不満と不安、また、マネジメント志向であるビジネスマン側への反発（自分たちが事業の中心となって動いていきたい）があった。これについては、お互いの人間関係への率直な不満や問題意識の表明、また、ビジネスマン側の、事業立ち上げにおける仮説→検証というプロセス及びその重要性についての十分な説明・商品開発部の納得によって、対立が止揚されていったという経緯がある。このプロセスは、偶然にも、K.ブランチャード＋D.カリュース＋E. P. カリュース著『一分間マネージャーのチームワーク』（浅見広子訳、ダイヤモンド社）の中で述べられた、チームワーク構築のプロセス（初期的活性→不満の表面化・対立→目標の共有）に、結果的にそのまま当てはまる。そこから何らかの意味をくみ取ることは容易ではないが、少なくとも、以後のプロセスにおいて、それぞれのメンバーの深層意識に、相互の違いへの尊重とともに、互いに学びあう姿勢が生まれたことは事実である。

最後に、このてんしょくにおける合意形成、事業化に至るプロセスは、ただ単にひとつの事業立ち上げのみならず、個々のメンバーについて、それぞれの在りよう、意識に少しずつ変革をもたらしていった。例をあげるなら、大学生である藤田は、「何かを探して」未来塾に入り、てんしょくの活動の中で、得意の「ものづくり」力を遺憾なく発揮し始めている。ケアワーカーである20代の田渕は、料理、コミュニティ作りに関する、あきらめかけていた夢を再度取り戻そうとしている。そして、筆者、30代の山口も、将来立ち上げたい在住外国人事業へのビジョン、それと、このてんしょくの事業を何とかつなげたいという夢が、はっきりと見える様になってきた。これらの、個人における夢、希望と、それを実現する意志の具現化が、てんしょくの活動にドライブをかける重要な要素に今やなっていることを個々に、末筆ながら付け加えさせていただいて、筆をおくことにする。

第四章 「こさじままや」について

桑 昌見

ここでは、コミュニティビジネス「町屋 ままや」に連携をもつ「こさじ ままや」について述べたいと思います。

それについては、私自身のことを少しお話しさせていただきます。私は、昨年春、社会人学生として通学していた立命館大学を卒業し、甲賀郡甲賀町小佐治というところに家を借りて移り住みました。ラッキーなことに、この家は古くて、おくどさん（かまど）が残っていました。お陰で、人が来るたびに、おくどさんでごはんを炊くようになりました。それで、この家に、ご飯（まま）を食べる家という意味で勝手に屋号をつけて、「ままや」と呼んでいます。

また、友人が、近くで有機・無農薬で畑3反、田んぼ3反で農業をしています。私は、訪問看護婦をしながら、この畑を手伝っていました。ここで、友人が野菜の直売所を作りたい、また、仲間が集える場にもなるようにと、廃車バスを購入し、改装し始めました。

そのバスの改装や、畑仕事に友人達がよく来てくれるようになりました。もちろん、てんしょくメンバーも何度も来てくれました。それでいつしか、畑で作業し、そして野菜を収穫して、そのまま私の家「ままや」へ来て、おくどさんでごはんを炊いてみんなで食べるというパターンができてきました。いろんな人が来てくれるようになり、夏には大学時代のゼミの仲間が来て合宿をしましたし、秋には、ユネスコの交換留学生のタイ人とハンガリー人の教授が「ままや」で日本体験をしました。また、友人が集まりミニコンサートを開いたり、石臼をわざわざ持ってきてもらい、おくどさんで地元の米を蒸かして、餅つきを行なったりもしました。

こうした畑・田舎体験は、特に都会の人たちに本当に喜んでもらえます。私自身、畑にいと、気づくことがたくさんありました。畑にいるときは、食べ物はすべからく、スローフードであるというのがよくわかります。種を撒くと、芽がでて、花が咲き、実となり、枯れてゆきます。私達の食べている野菜が、結果なのではなく、その命の循環の一つの過程を頂いているのだということを実感できます。畑に出て、私は「食べる」ということが、そのような大きな命の循環に参加させてもらっているのだということが、はじめてわかりました。

また、夏には、田んぼの草取りを昨年始めて体験しました。もう、足も腰も腕も頭も感覚がなくなるほど、これほどつらい仕事はないのではないかと感じました。私は、以前から無農薬のお米を当たり前のように食べてきましたが、これが、そんな過酷な労働の上でできたお米だと実感できて、心から感謝の気持ちがわいてきました。昔、ごはんを粗末にすると、目がつぶれると叱られた意味がやっとわかりましたし、また、米は安いと感じました。

このように、自分が実感したことを多くの方と共有したいという思いと、農場へきてもらい体験してもらうことで、少しでも農の現場を知ってほしい、そして、本物のおいしさを知ってもらい食べ物のことを考えて欲しい、という思いが強くなってきました。そして畑で作業し、「ままや」で味わうという体験を一つの形として提供できるのでは、と思うようになったのです。こだわりの「ごはん屋さん」を考える過程で、食べるという受動だけではなく、主体として体験してもらう事で、もっと深い関係性が築けるのではと考え、このような連携という形の構想が出来上がってきました。だから「町屋 ままや」で食に関心を持った人が、「こさじ ままや」にきて農業の体験する。また、一方「こさじ ままや」で漬物をつけたり、味噌を作ったり、地元の方に郷土料理を教えてもらったりしながら、その知恵、メニューを「町屋 ままや」に生かしてゆけたらと考えています。こういうフィードバックがうまくいくような形を試行してゆきたいと思っています。

「町屋 ままや」や「こさじ ままや」で、人が集い、そしてつながり「食縁」がひろがってゆくことを願ってやみません。みなさん、どうぞ、「ままや」にお越し下さい。



第五章「ままや」は身体と心にやさしいお店

田淵 久美子

私たちは、滋賀で採れた美味しいお米と野菜を使って、さらに美味しく身体にも優しい料理を提供したいと思っています。また、せっかく外で食事をするのだから、食の新しい発見と私たちや他のお客さまとの出会いを楽しみにしていただけるよう、季節に応じたイベントや郷土料理を用意してお待ちしています。

「ままや」に来たら、とにかく御飯をお腹いっぱい食べてもらおう！それが私たちの思いです。季節によって様々な御飯メニューを用意致します。

季節を通して白御飯・玄米御飯・雑穀御飯・大豆御飯・小豆御飯を。季節に応じて春には桜・筍・ふき・山菜・新茶の御飯、夏にはシソ・しょうが・みょうがの御飯を。秋には菊・きのこ・栗の御飯を。冬にはサツマイモ・大根の御飯を。他にもお粥にお茶漬け、雑炊などのメニューを考えています。



第六章 事業計画の詳細

名田 陽一

1. てんしょくの目指すもの

- ・ 持 続 可 能 な 利 益 と 採 算 性
- ・ 高 い 理 念 を も つ
- ・ 地 域 社 会 に 愛 さ れ 貢 献 す る

マーケット・イン型コミュニティ・ビジネスへ

おうみ未来塾 3 期生の研究グループてんしょくは、コミュニティビジネスの創業から実際の経営に至るプロセスについて、実証的に研究しているグループである。その研究方針は、事業の持続を可能とする事業採算を何よりも重視する。しかし、その上で高い理念を持ち、地域社会に愛されそこに貢献する存在でなければならないと考えている。つまり、理念のみが先行し、ともすれば事業経営の現実から乖離しがちな起業の先行事例や、理念を失った、あるいは始めから見当たらない既存企業のプロダクトアウト型意識の桎梏とは一線を画した事業体を追求している。そしてその活動のユニークポイントは、研究グループとして上述の方針に沿ったコミュニティビジネスのモデルを策定し、おうみをフィールドとしてその事業採算性を検証できた後には、研究グループから事業運営組織に転化して実際の事業経営にあたろうという点にある。

目指すものの形成＝チームワークの構築

ところで、そのグループ名は2002年12月、「天下物含有あえて笑食気味」という長くてアクの強いシニカルなものから、略称であった「てんしょく」に変更された。同年4月の活動開始から8ヶ月目のことである。その斜に構えた決して愉快ではない旧名は、今にして思えば、目前にあった食をめぐる状況、既存企業や市民活動の有り様に対し、批判的でセンセーショナルな存在でありたい、という姿勢を表わしていたようだ。

それでは、むしろ広く愛されたい意図を持つ「てんしょく」という語感柔らかな名前に変えたことで、当初の問題意識は失われたのだろうか？いや、そうではない。問題意識は、古い表現を使えば、提示から対立を超え昇華された。

別稿（第3章 グループ「てんしょく」合意形成・事業化の歩み）で述べられたとおり、活動初期の半年余りを費やし、グループ全体の意識として未消化であったものを、各人主

体的に共有し確立することが出来た。このことで、直截的に耳目を集めようとしたあざといネーミングに、逆にメンバー自身が違和感を持ち、こうした姿勢をとらずともグループの目指すものが遂行できる自信が生まれたのである。

別稿と重複することになるためこれ以上の詳述は行なわないが、てんしょくは、それまで個々が抱いてきた問題意識を、時間をかけて相互に提示し、相違点を明確にし、共通点を共有してきた。そのプロセスは、組織論の名著といわれる K. プランチャード + D. カリュー + E. P. カリュー 著『一分間マネージャーのチームワーク』（浅見広子訳、ダイヤモンド社）の中で述べられた、チームワーク構築のプロセス（初期的活性→不満の表面化・対立→目標の共有）に、結果的にそのまま当てはまる。しかし、何も教科書どおりにすすめようと思図したのではない。全員がお互いを理解しようと懸命であったことが、自明の定理でもあった所に着地した、ということである。

この経験から、グループ研究のまとめである本稿において、おうみ未来塾に遺す言葉として挙げておきたいことは、次のとおりである。「もしもあなたが、おぎなりの成果で適当にお茶を濁して未来塾の2年間をやり過ごすつもりでないのならば、研究グループの結成時には対立を恐れず議論を行なおう。チームワークの形成・目指すものの共有のための時間と労力は惜しむべきではない。遠回りに見え、グループ崩壊の不安に襲われても、これがグループ活動成功への鍵である。」

2. 経営目的（ミッションステートメント）

私達は、「ほんものの食」を提供して共感の輪を広げ、

結ばれなかった人々に「食縁」を結びます。

そしてこの事業を通じて、

元気な中高齢者に雇用機会を提供します。

経営目的。ミッション・ステートメント。 _____ これは、その組織体が、自らの事業コンセプトを社会的使命として強く認識し、声に出して公示することによって、その存在意義をアピールするだけではなく、目的に向かって邁進するよう自ら律してゆくことを狙いとする。ゴーイング・コンサーンを所与とし、予定調和を好む傾向の強かった従来はこの国の組織では、明確にされることの少なかったものである。

てんしょくは、「コミュニティビジネス」において「採算」と「理念」の同時実現を目指す、という簡単ではない試行錯誤を行なってゆく。したがって、そのトライ＆エラーを繰

り返す中で、自らの拠って立つところを見失わないように、そのミッションを明確にしておきたいのである。新事業の開発にあたる時、必要なものは額縁に入れて飾るような美しいお題目では、決してない。苦しい時に繰り返し口にする、強い思いのこめられた言葉なのである。

3. 経営理念

地	産	地	消
身	土	不	二
温	故	知	新

地産地消 「その土地のものはその土地で消費されるべき」

- ・滋賀県でとれたものは、滋賀県で消費される。
- ・滋賀県でとれたもの、つくられたものしか、素材として採用せず。

身土不二 「身体と土は二つではない」

- ・その土地でとれた旬のものを食べることが
人間にとって最も自然な形の食
- ・旬のものは旬のうちに消費されるべきという発想
→安定供給を目指さず、売り切れ御免、限定供給
- ・顔の見える食を目指す→食に関する情報の透明性を確保
(極力流通を通さない)

温故知新 「元気な中高齢者の知恵を借りよう！」

- ・地元の料理上手なおばあちゃんにパートで参加してもらう
- ・地元のおじいちゃんに軽トラで、
余ってしまった野菜をお店まで運んでもらう
→地元の中高年の方々に
働きがい、生き甲斐を提供することができるのではないか？

組織の「目指すもの」、次に「社会的使命」。おおまかで抽象的で、道標（みちしるべ）のように高く掲げられたこれらの「思いの表現」を具体化し、現実化してゆく作業は、いよいよ経営者の責任と権限に触れる「経営理念」の登場に至る。事業経営の姿はこうあり

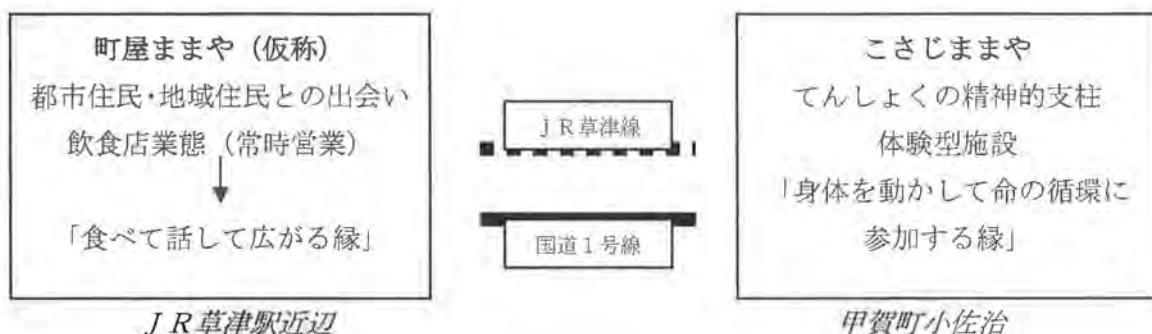
たい、いやこうするんだ、と考える、理想的なレベルのアイデアである。

すなわち、てんしょくは、食のローカリズムと広い意味での健康に切り離せない結びつきを見ており、そこからうみだす食そのものを発信することで、今や中高齢者が中心となった「地域住民」と、地域から切り離された都市住民をも包含するコミュニティの形成を、その事業の姿と考えているのである。人間の最も基本的な行動のひとつである「食」。脆弱な理想から始まる書生論的な活動ではなく、このプリミティブな欲求を基礎においたきずな作りこそ、強い生命力を持ち、何がしかのセンセーションと社会的な意味を持つはずであるから。

しかし、経営とは現実と渉りあうことであり、明るく希望に溢れた話ばかりではありえない。例えば「地産地消」は社会性の強い概念である。WTO農業交渉のありさまにみられるとおり、現実には食のグローバル化がますます進行し、また、世界的には人口爆発による慢性的な食糧不足が叫ばれる中、この考え方は各方面からの批判と対峙することが多い。一方、同様の発想から人間の個々体に焦点を当てた「身土不二」。これこそ、今日の、食の安心・安全問題に関する生活者の異議申立てに直接結びつく概念であるが、こちらも生活者の怒りが冷静を失って極端に振れる場合、そのラディカリズムの立脚点に擬される可能性がある。

ここでは、こうしたマイナスの観点のみを列挙したが、経営理念に掲げるということは、こうした論議・逆風にもあえて対峙し、問題解決へ向かう意志と矜持をもつ、ということである。あらためて肝に銘じたい。

3. ままや全体構想



ほんものの食を提供して食縁を結ぶ

地産地消・身土不二・温故知新

本来現実の新規事業計画を述べるのであれば、ここでは、次段以降で述べる経営戦略及び各機能別戦略を策定するための、「自らを知りその環境を知る作業」が行なわれねばなら

ない。例えば、SWOT分析という手法を用い、てんしょくの持つ経営資源（人・モノ・金・知的財産）の強み（Strength）と弱み（Weakness）、てんしょくをめぐる状況（社会情勢・法的規制・競合者の存在等）の追い風・チャンス（Opportunity）と逆風・脅威（Threat）について洗い出してゆく。「強みのこの項目をもって、いかにして逆風のあの項目に対処するか」「追い風の中で、いかにして弱みのこの項目を矯正するか」。こうした分析結果からは、あるべき戦略の姿が明らかになってゆく。

しかし、てんしょくはまだコミュニティビジネスの研究グループに過ぎず、事業組織になりえていない。つまり、経営資源もそれを取りまく環境も存在しない。したがって、以降に述べる戦略論はあくまでも仮説に過ぎないし、この第4節で経営資源であるかのように述べている「ままや全体構想」についても、事業所登録のなされていない（そして、それが限りなく不可能に近い）「こさじままや」が存在するだけで、事業ドメインの核となるべき「町屋ままや」の候補地すら、執筆時現在1ヶ所が有望視されているに過ぎない。

卒塾以降、我々はこの候補地選定・評価作業をさらにすすめてゆく計画である。この作業が一定の結論に到達した段階で、経営資源についておよそのダンプ・リストも作ってゆけるであろうし、それをもって策定する経営戦略の仮説についても検証し、現実のものとしてゆく作業を行なうことになる。したがって、ここではこうした前提のもと、以降の論考はあくまでも「卒塾時における一旦の整理以上の意味を持つことが出来ない」ということを明確にして、さらに稿をすすめることとする。

5. 経営戦略

「てんしょく」の事業ドメイン（事業活動範囲）

「町屋ままや」における、
徹底して安心・安全でおいしい米・野菜を利用した食の提供から、
「こさじ・ままや」での農作業体験型滞在まで含む、
「食べること」を機軸に据えたもの

コア・コンピタンス→「米、ごはん」

ターゲット→経営理念から、多様性に関する受容が重視され、事業全体として属性による顧客ターゲットは設定されない。敢えて言えば、ほんものの食で縁を結ぼうとするすべての人。但し、個別の製品・サービスについては、当然企画毎に設定される。

ポジショニング→「競合」との位置関係をどう設定するか。これについては、ミッション自体がオンリーワンなものである（市場から見れば、ニッチである）た

め、競合が見えにくい傾向にある。つまり、生活者が支出する時にてんしょくと同時に選択肢に挙げる事業体が一体何であるのかについて、我々はコンセプト受容度調査などを通じて、今後明確にしてゆかなければならない。現状想定できることは、地域住民にとってはやはり外食産業としてマーチャンダイジングが同様である店舗であろうし、プル型プロモーション戦略をとって遠距離より来訪してくれる都市住民にとっては、日帰りレジャーのデスティネーションがこれに該当する。

多販路な事業展開 通勤客に対しておにぎりを販売する等、キャンペーン性の高い事業
～最終的には「こさじ・ままや」での農作業体験型滞在事業まで

多段階な事業展開 当面「町屋ままや」店舗での飲食提供
テイクアウト型お総菜の提供を将来的に考慮。
米・野菜そのものの販売、お米関連商材の販売も視野に

戦略とは、変化する環境に対応し目的を達成する方策である、と定義される（一方、環境を一定と仮定し、その範囲内で局地的な目的達成を目指すものを戦術という）。ということであれば、経営戦略はSWOT分析等で環境変化をとらえた上で最終的には策定されるべきであるが、ここでは既述の理由から仮説の提示に留めておきたい。ただし、絞り込んだ「お米・ごはん」というコア・コンピタンスは、それ自体が現在収縮市場であるため、この事業での採算を支えるための「1品で多販路・多段階販売」という戦略は妥当性の高いもの、と、同様事例を見合わせて自負するところである。ともあれ、検証を待ちたい。

さて、以下は、こうした経営戦略（全体戦略）を基礎としてさらに展開すべき、事業の個別機能に関しての戦略案である。

6. 機能別戦略

(1) 品質マネジメント

＜てんしょくの品質マネジメントについてのポリシー＞

①てんしょくは、安心を提供し、たゆむことなく安全を追求いたしますが、出来たことと出来なかったことは、お客さまに常に明らかにする、最も新しい品質マネジメントを品質方針といたします。★

②食材のひとつひとつについて、トレーサビリティと、それが品質において理想的な状態で調達できなかった場合、何故どうしてもそれが実現不可能だったのかについて、明確に情報開示いたします。マイナスの情報をお客さまに開示することに消極的には決してならないこと、それこそが、本当の安心をご提供する姿勢であると考えています。

★「安心」と「安全」についての認識

安 心 ≠ 安 全

「安全」……計測された客観的事実

食品に対する化学的分析に対する評価そのもの

「安心」……信頼関係

消費者側から……身体に悪い物が入っていないだろうと心から信頼して購入できるか。

食の提供者から……出来る限りの安全性を追求し、顧客満足追求を行ない、その上で説明責任を誠意をもって果たすことが安心を実現する鍵。

我々の研究活動は、ミッションステートメントの客体的核心である「ほんものの食」とは何か？を求めて、先行事例の実査から始まった。そして到達したところは、「ほんものの食とは、地産地消・温故知新から生み出される身土不二のもの」。すなわち、この地上の、命のサイクルの中で人間存在を維持するための食なのである。したがって、提供する食の品質、さらに言えば食を提供する我々の事業そのものの品質こそ、てんしょくの事業戦略の最重要ポイントでなくてはならず、これは今、世上最も希求されていることに他ならない。

(2) メニュー開発

- ・昼のメニュー…1000円。膳（ワンプレート）提供
- ・夜 …2500円のセット・コースメニュー
おまかせ・日替わりで1種類
豆腐・野菜・豆・ごはん
…1500円で昼の1000円メニューに1品プラス（オプション）
- ・お酒は夜のみ→コアコンピタンス：お米のお酒＝純米酒中心（地産地消の理念）
手作り果実酒
それ以外のお酒は、ご飯のパートナーに
ふさわしいものを厳しく選別
- ・ご飯メニューは、平日の顧客が毎日来ても飽きないように、多種用意する。
（ただし、その日提供できるものは限定し、その日に店内掲出）
※理念のために客を選別する店には絶対にならない！

外食産業の体裁をとるてんしょくの事業は、提供する料理・加工食（製品）と接遇（サービス）が事業採算の支柱である。よって、価格の設定については、定石から言えばスキミングプライス戦略（生活者は革新的な製品・サービスに高い代価を支払う傾向にあることを織り込んだ、高価格戦略）を採るべきであるが、敢えて損益分岐点を大きく超えない収支を意識した、むしろ相対的な低価格を志向している。この点はてんしょくの高い理念と採算の共存をめざすところの反映である。

(3) 仕入管理

- ・材料費率は5割（あるいはそれに相当する良い素材）と考えて運営。
- ・農家で自家消費用に作られている野菜の余剰分を自ら集荷してまわることで、
良いものを安く調達。

四季と様々な地勢、豊かな水に恵まれたこの地の食は、素材を活かすことがメニュー開発の鍵となるため、仕入管理は大変に重要な業務である。また、事業体をめぐるステークホルダーズ論を待たずとも、提供する食材を調達する作業そのものが、もうひとつの「ほんものの食を通した縁の結び」そのものである。

重要なことであるが、「自家消費用に作られている野菜の余剰分」を調達の柱としていることは、現時点ではあくまでも仮説にすぎず、これも今後の各方面との「出会い」の中で検証されねばならない。

（４）店舗開発

詳細は別稿（第７章 店舗イメージ図）に譲るが、店舗開発戦略には、装置型産業にとって命運を握りかねない地政学的重要性の観点がまず第一におかれるべきであろう。すなわち、店舗立地の商圈分析は十分に行なわれねばならない。

そして、事業コンセプトを表現しうる店舗自体のありかた。てんしょくは、ここで「古民家再生」を創業準備プロセスに加えた。これはもちろん、事業コンセプトの「かたち」を持った展開であるだけではなく、投資対効果面からの動機もあるのだが、今日の外部環境は古民家再生の活動に順風であり、ここでも既に、これに取組んでおられるいくつかの重要な組織体や個人との出会いを得ている。ご協力を仰ぎながら、店舗開発を遂行してゆきたい。

（５）店舗運営

めでたく開店の後には、経営理念から、「元気な中高齢者」に店舗運営の現業を担っていただくことにしたい。実務上は、そこに、てんしょくのメンバーが交代で店長として出勤することになろう。創業時点から思いを共有に努め、事業企画を展開してきたメンバーには、日々の運営においても重要な事業コンセプトを揺るがすことなく運営する素地が、その時点で出来上がっているはずである。

但し、店長としての運営実務は訓練されねばならない。これには、幸いなことに店舗経営に造詣の深い経営コンサルタントやホスピタリティ産業に長く就労したメンバーがいるため、一定段階からの相互教育とＯＪＴで問題は解決できると考える。

重要なことであるが、店舗運営方針は「食縁」の一言に尽きる。お客様のご満足を得て持続可能な利益を頂戴する、という採算志向＝マーケティング志向の運営に加え、リスクマネジメントを十分踏まえた上で（いわゆるＰＬ管理能力も取得しなければならない）、コミュニティの形成に繋ぎうるような社会志向の運営がポイントとなる。

（６）教育訓練

第５項でも触れたとおり、教育訓練は店長クラス（てんしょくメンバー）のそれ（事業運営が重点）と、採用される現業担当者（調理・接客実務が重点）の二つのカテゴリーで計画され、遂行されねばならない。目指す所は、ほんものの食を提供して食縁を結ぶこと。縁を結ぶのは、人そのものでしか有りえない。この教育方針のもと、計画→実行→結果の評価→改善を設定した期間の中で遂行する。

(7) 情報システム

マーケティングの4つのP（プロダクト：製品、プライス：価格、プレイス：場所、プロモーション：販売促進）の中で、ここまで考察の対象と出来ていないのが販売促進である。それには、「食縁を結ぶ」というミッションから、顧客を誘引して支出を引き出すような販促が妥当でないこと。また、積極的にプル型のコミュニケーションを志向した方が、てんしょくの事業をオンリーワンなポジショニングからブランド構築にまで高められる可能性が大きいこと。そして、現実的には、マス販促策等に資金を配分する余裕がないであろうことが、理由として挙げられる。

こうした内部環境のもと、「プル型のコミュニケーション」を販促方針とするならば、もっとも有効なメディアはインターネットを利用したワン・トゥ・ワンのコミュニケーションであろう。遂行すべきマーケティング要素としての優先順位は決して高くないが、開業スケジュールが明確になった時点で、ウェブ上にコミュニティサイトを開設し、以降リアルでの「食縁」を補完する機能を持たせるべきであろう。

加えて、情報システムは運営管理にとっても重要なツールである。財務会計、管理会計、販売情報、CRM（カスタマーリレーションマネジメント）理論を援用した顧客情報、労務管理情報等はPC上で管理されるべきであろうし、エクストラネットを活用して、非従事状況にあるメンバーとのリアルタイムでの情報共有（ナレッジマネジメント）も実現したい。さらに、重要な仕入管理には、「もうひとつの食縁」をヴァーチャルで補完する意味合いにおいて、SCM（サプライチェーンマネジメント）の手法も検討される余地はあろう。

(8) 法人組織のありかた

事業計画が完成し、その妥当性が検証できれば、これを運営する組織体を明確にする段階を迎える。我々は、そのミッションから、また、やはり装置型の外食産業という体裁をとる以上、NPO法人・株式会社・有限会社など、いくつか適合性の高いものの中から選択して法人の形態をとり、広く、かつ様々なかたちで個々人の参加を得て、事業化したいと考える。

資本提供による経営レベルでの参加、債券購入による投資レベルでの参加、労務提供による参加、仕入先やアウトソーシング先としての参加、そして、顧客としての参加。

ともあれ、現在の外部環境は創業・法人設立に向け順風である。公的機関の創業支援も十分に活用させていただきながら、本来の意味での株主資本主義（投資したその範囲での有限責任の下で、思いに共感できる事業を支援し、様々なかたちでの価値を受け取ること。また、こうした多くの小額投資家に支えられることで、なし得なかった事業が実現し、雇用や取引を発生させるのみならず、社会的存在として地域に貢献すること）に支えられた法人化を目指したい。

7. 章の結び

ここまで、共有された「てんしょくの思い」から始め、具体的な事業の機能別戦略についてまでを述べてきた。これらは、既に明らかにしたとおり、卒塾という一定の段階での研究成果＝事業計画の整理であり、事業計画自体が立案途上であるため、第5節以降は未検証の仮説に過ぎない。

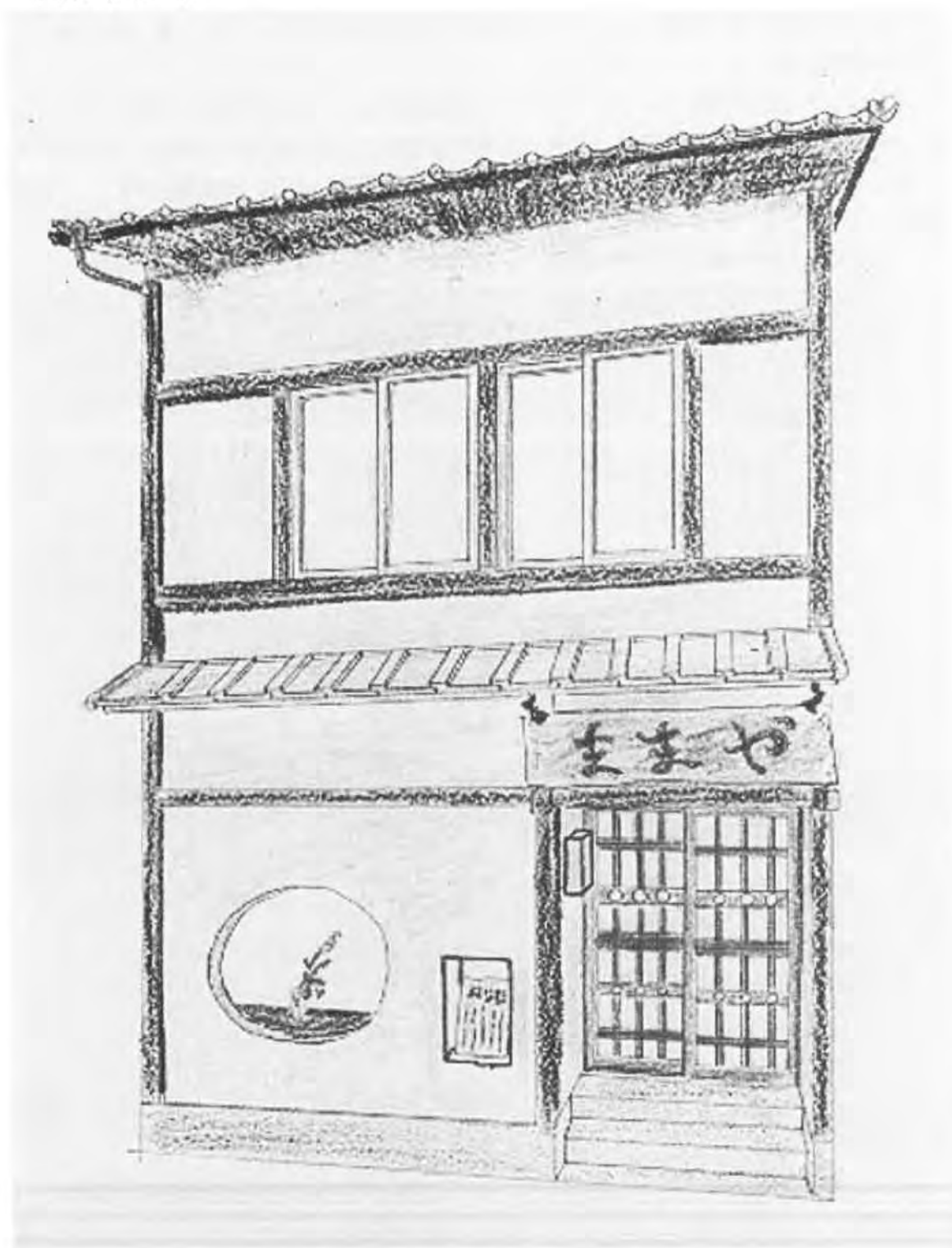
言わば、未完成で荒削りなビジネスプランの素描であり、思いを現実の事業にする、というシリアスなテーマの下では、今後の立案作業の中で大きな変更を余儀なくされる場合もありうるであろう。しかし、敢えて今これをご紹介しますことで、未来塾において、以降同様のプロセスをたどるグループに、何らかの、あるいは反面教師のような位置付けででも、参考になればと願うところである。

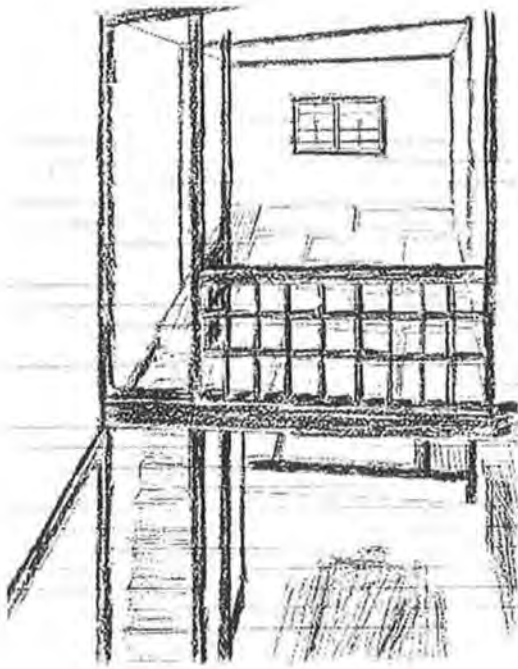


第七章 店舗イメージ図

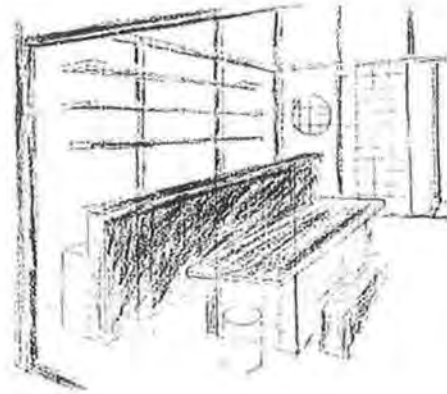
藤田 充宏

店舗ファサード

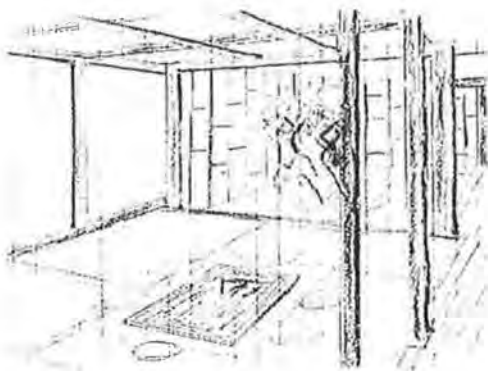




← 1. 入り口の方から二階を見渡す…開放感のある吹き抜け。柿渋仕上げの柱に壁は漆喰を施し落ち着いた感じに仕上げる。



2. 座敷から入り口方向を見る…入り口を入ってすぐの広い土間は床を上げ、↑靴を脱いであがっていただく。柱と同じ仕上げのカウンター・長机を配し、カウンターは料理人が常に目を配らせられるよう、全ての調理器具が前向きに設置してある。また、長机は我々の「食縁を結びたい」という願いを込めてひとつの大きな机に8席の座席を設けた。



← 3. 2の位置から180度回転し坪庭を臨む…ゆっくりとくつろぎの時間を過ごせるように座敷の真ん中には囲炉裏を切ってある。庭の右手奥の厠へは渡り廊下を渡してあり、庭を愛でながら用が足せる。

全体として和をとりいれ、京都の町屋風に仕上げてある。くどは米を炊く目的だけではなく、店のシンボリックな存在として顧客から良く見える位置におく予定である。

第八章 てんしょく・ままや事業計画スケジュール

山口 吾往子

2002. 4. 14 近江未来塾3期・食文化研究グループ「てんしょく」発足

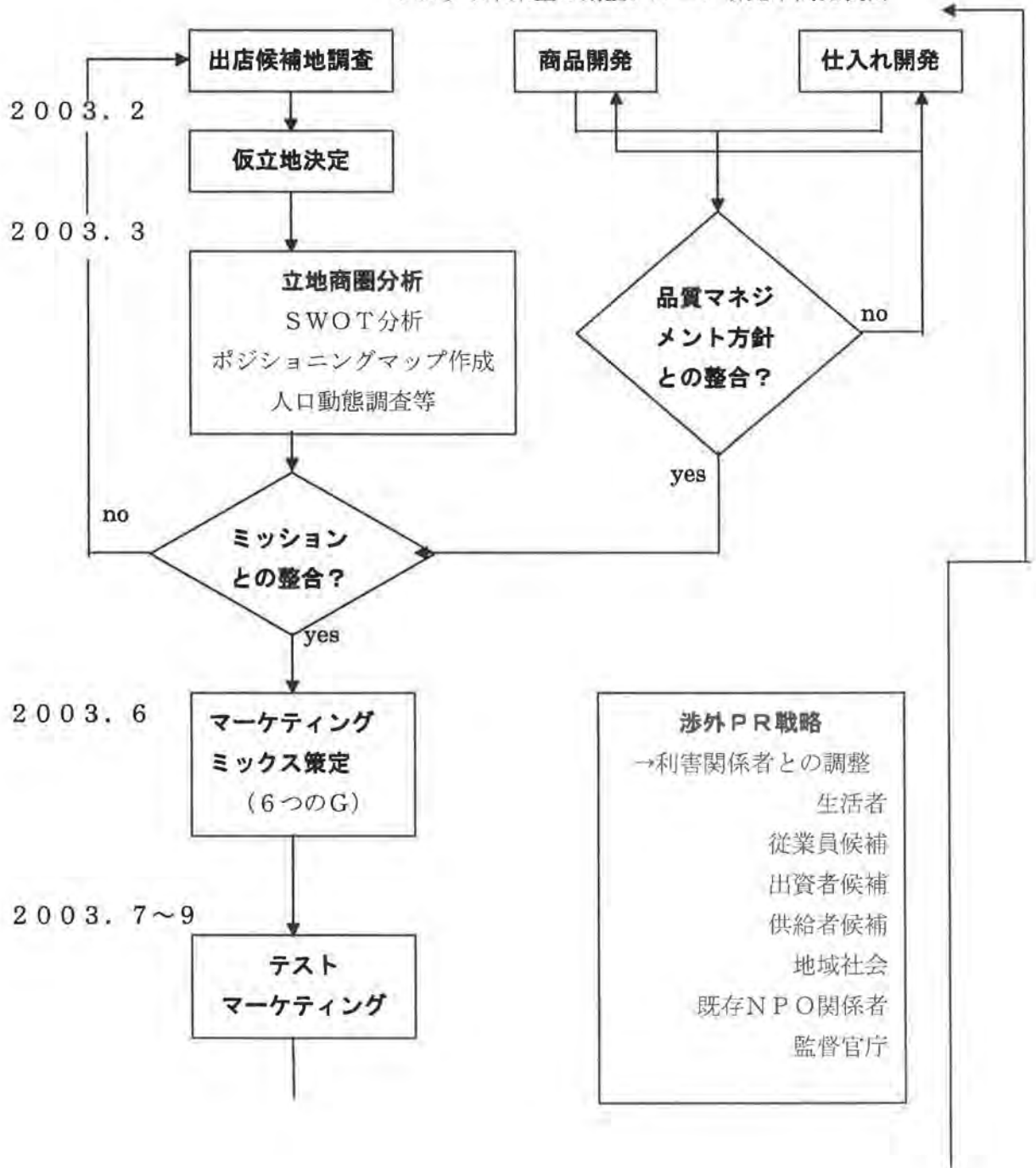
各地の先行事例訪問を通じて

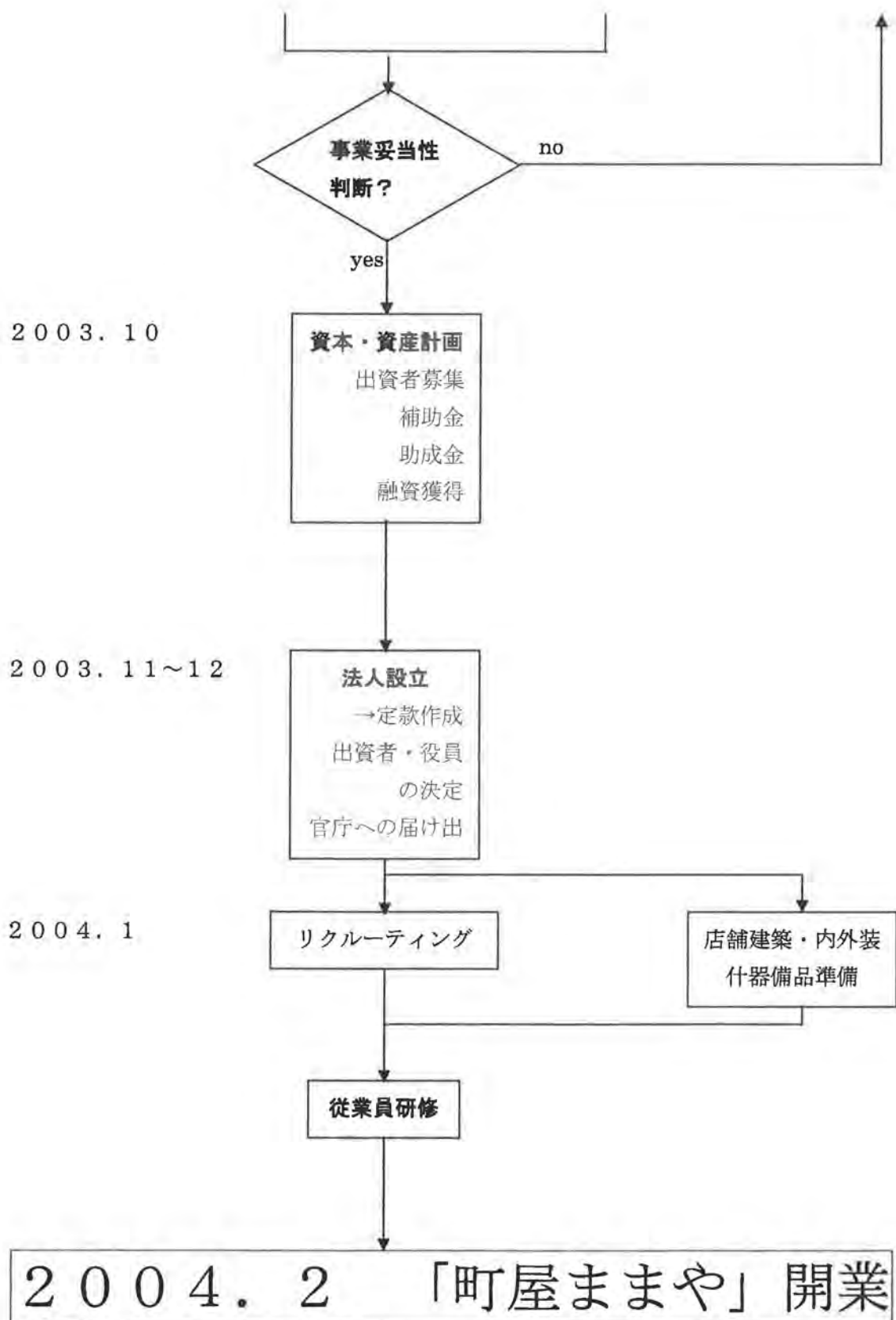
ミッションの合意形成

メンバー間信頼関係醸成

2002. 10. 27 てんしょくビジネスプラン発表

@おうみ未来塾3期生グループ研究中間発表会





卒業報告書編集後記

山口吾往子

やっと報告書が出来上がりました。ほっと胸をなでおろしています。

最初、30ページくらい、私たちの活動は内容が濃いから、大丈夫、大丈夫…なんて高をくくっていました。天罰は下りました。メーリングリストのメールの山、まとめなければならぬ理念の数々、イベント・ミーティングの多さ、密度の濃さ…逆に、何をどう取舍選択するかが大変でした。文章を要約するためには真の理解が必要と申します。私たちが、自分たちの事業を、自分たちの歩みを、真に理解しているかが、この報告書で問われているのかもしれませんが。そう言う意味では、この報告書を作成することは、私たちが自らの歩みをふりかえり、今後の歩みにおける羅針盤をたしかに持つ上で、非常に重要な役割を果たすと言えるでしょう。あらためて、そうした機会を与えて下さったおうみネットワークセンター、未来塾に感謝します。

ですが、未だ全ては仮説であり、絵で言うなら真っ白いキャンパスに描かれた荒削りな下書きが出来上がったに過ぎません。食に関する高い理念を持ちつつ地域社会に貢献し、しかも持続可能な事業のための採算ベースをキープするという一見大変困難に見える理想の実現の為に、私たちは、あらゆる努力を傾注する覚悟でおります。この初心を貫き、理念を狭き堂宇に閉ざす事なく、この淡海の地に美しい一幅の絵として完成させてこそ、淡海ネットワークセンターの一事業である未来塾という市民教育事業に対して、真の恩返しをすることができるものであると、強く私たちは信じます。

編集作業を担当することになり、あらためてメーリングリストにあげられているメンバーのメール、議事録含め950通あまりに目を通しました。確かに楽な作業ではありませんでしたが、その中に確かに、メンバー一人一人の思想、生活、人となりが生き生きと息づいているのを感じました。こういう素晴らしいメンバーとたまさかに出会い、一緒に一つのプロジェクトをゼロから立ち上げていける幸せを思います。また、これからこの淡海の地で活動していくにあたって、私たちを待ち受けているだろう素晴らしい出会いの数々を思うと、さらに胸がときめく思いがします。障害を乗り越え問題を解決するには冷静な現状認識と断固たる行動力が必要であることは論を待ちませんが、それにもまして、人間をあらゆる挫折や失敗、桎梏から救うのは、未来への、未知なるものへの憧れでありましょう。その憧れを持てる現在の幸せをかみしめつつ、一步一步前進していきたく思います。

私たちの挑戦はまだ始まったばかりです。なせることを信じて、着実に、誠実に。これからの私たちの歩みを、どうかご理解いただき、お力添えいただけますよう…。

最後になりましたが、素敵なおくどさんの絵を描いて頂いた3期の浅居さんに、心から感謝いたします。浅居さん、ほんとうにどうもありがとうございました！！

ひ		
と	一	
り	人	の
		想
		い

いいね！ 卒塾時の顔	氏名	だれ	
	グループ名	研究グループ	
	在住地	どこ	
	3 分類	本質 3 分類 (アース・ムーン・サン)	添付資料参考
	動物占い	1 2 キャラクター	

①入塾時写真と応募原稿より ②卒塾にあたって (イラストは3期生 浅居 浩)



○ 氏 名	浅居 浩
○ グループ	駄菓子探偵団
○ 在住地	彦根市
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	虎

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

今後取り組みたい活動としては、それぞれの地域に埋もれている文化（伝統文化は無論のこと風俗習慣や生活そのものを含めたもの）の掘り起こしと、それをツールとし「世代間交流」や「地域コミュニティ」再構築を図りたいのである。

余りに唐突で無謀なことだが、今、従来の枠組みでのシステムが崩れ、新たなシステムへの転換期となってきている。また、このことが受け入れる体力も整わぬまま急激に訪れてしまい、いたるところで様々な「崩壊」を招いてはいないだろうか？



社会全体では、少子・高齢化によって人口構成が変化し就労人口と税収が激減、社会保障制度までが危ぶまれ、社会不安と将来の失望観を生み出している。社会全体がストレスを感じているようだ。また、社会全体が受けるストレスが人間関係にまで影響を及ぼし、従来（日本人的隣人愛）のような愛情が希薄となり、人間の心までも蝕み今までにないストレス観により、自分のみならず他人までも傷つけているようだ。

このことが顕著に表れているのが「家庭」「地域」「学校」の三者の崩壊ではないだろうか。従来のシステムから考えると、これらは微妙な関係（あいまいな日本人的思考）と距離間（心地よい人間関係を図る）を保ちながら、互いの「隣人愛」をもって関わってきたが、そこには、共有する「文化」があったのではないだろうか？

その昔「家庭」は、子供たちのパーソナリティ形成の場であった。そして、「地域」が育み「学校」が実践する場ではなかったろうか。そう思うと、従来型のシステムを再生するのが効果的であるのだが、このまま少子・高齢化が進むとこの3者は、ますます窮地に追い込まれてしまう。そこで、新たなシステムとして、NPO 法人やボランティア活動者が重要になってくる。しかもこれらは「共有文化」によって結ばれていることが大前提となる。

また、仮にこれらの NPO 法人やボランティア活動者によって、「世代間交流」や「地域コミュニティ再生」の隙間を生めることは出来ても、いかに継続できるかが新たな問題となるため、NPO をバックアップする環境整備（NPO の後方支援のための NPO と同じ思考をもつ NPO ネットワーク）が必要となる。

そこで、壮大で無謀な活動計画の第一歩は、「プロセス援助活動」と「後方支援活動」のための NPO の設立を目視したい。

例えば、前者はある地域で「世代間交流」や「地域コミュニティ再生」を図るため、その地域の埋もれた文化を掘り起こし、顕彰することによって「地域の共有文化」とし次世代へ継承できるまでの過程を支援する活動であり、後者は、例えば、公共団体や企業が行っている支援以外で、志あるものが収入の 1 % なりを出資して、NPO 活動のために必要な資金援助 NPO を設立するものであり、今後の取り組みとしたい。

◇ 卒塾にあたって

「温故知新」…まさに「故(フル)きを温(ヌグ)ね、新しきを知る」と読み下される言葉の中により新しい物事が発見できる。人は、大きな難問に行くてを遮られた時、過去の歴史的物事を検証することによって、解決の糸口を求めてきた。

今、社会の変動は激しく、いたるところで多面的に「システムの崩壊」が起き、経済や社会、身近なところでは地域や学校までもが、その影響を受けている。加えて、最小組織単位の「家庭」までが危機的状況にある。

こんな時、「温故知新」という言葉からすれば、「何をもって」危機的状況を打開できるのだろうか。

微力ながら我々は、壊れた家庭および地域コミュニティと世代間交流の再生を目視し、その地域における、再生のための「共有できる文化 (art のみではない)」の構築を研究のテーマとした。その再生のツールとして「駄菓子と紙芝居」を用いることとし、その地域に埋もれる「文化」を再生、共有できるものとして顕彰することによって、次世代への継承を図ろうとした。

その昔「家庭」は、子供たちのパーソナリティー形成の場であった。そして、「地域」が育み「学校」が実践する場ではなかったろうか。この三者は、微妙な関係を保ちながら関わってきた。その背景には、「共有文化」が存在したに違いなく、それが「何をもって」の「何」かもしれない。

入塾して、長いようで短かった 2 年間が過ぎようとしているが、これで終わりではなく今後の「実践活動」のプロローグでしかないのである。





○ 氏 名	内田 日出史
○ グループ	グリーン・ツーリズム
○ 在住地	マキノ町
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	猿

◇ 入塾時応募原稿より「今いまカヌーから始めたら面白い。これはいける!」

恐縮ですが、私の信念は「教育こそ人間本来の生き方を見出せる。教師から変わる」

学校現場を退き、全国行脚をし、故郷再発見。自分を育んでくれた故郷、友、そして親に何ができるのか。いつもマザーレイクが「あんたは生かしてもうてるで」と語りかける。そして、答えが出たのは、かつての恩師が、我が子の通う小学校の校長をされており、学校に訪れるたびに故郷マキノや海津の歴史、自然、人これからの展望などを熱く語られる姿に触れ、「子どもらに水を感じる実体験をさせてやりたいんや」に「やりましょ。」

実は、本格的にカヌーにとりつかれたのは小学校の自然教室で我が娘と共に1泊2日で海津の浜から高島町の白髭神社の鳥居下まで行った時の感動から。帰って来たのが、あの池田小学校の悲報を聞いた6月8日。同じ年齢の子どもが方や自信と喜びと感動で一杯。

先生も親も、早朝から見送り、サポートし続けてくれた方々、みんな涙で乾杯。楽しい!「この違いは、何や」もし、池田小学校でも近所の人が「変な感じの人が小学校に行ったで」「なんか今学校の様子がおかしいで」と気付いていたら子どもらは救われたかも。学校の行事が地域の行事になって、子どもは琵琶湖、水辺に帰るし大人は祭りみたいに自然体に戻る。「カヌーなら子ども中心でこの町に感動と共に元気の源が生まれてくる。」

自然教室の翌日、感動さめやらぬまま未来塾に入塾。「ああ、今日新聞に載ってましたね」の天川さんの一言で、またまた感動が蘇る。さて、マキノでのカヌーは、学校や先生の研修または町の教室や「子ども体験教室」等で行なわれ地域の方が必ずサポートに入ります。「海津の桜お花見カヌー」などは最高です。いつも「感動が癖」になり自然体に戻るカヌーはやっている姿が無理なく楽しそうで、見ている人も引きつけられるようです。3期生の皆さんも来られて楽しまれたと思います。先日、堅田の琵琶湖カヌーセンター社長で琵琶湖上をカヌーで通勤されていた神吉さんと55歳以上の方の「シニアツアー」に地元サポーターとして一緒しました。この方は雑誌ビーバルにもよく登場されるのですが、案の定、終始力みのないスタイルで周りの人も安心します。そして、「人が喜んで感動してる顔がいいですな」とおっしゃるのは流石です。

今、マキノでは、ご多分に漏れず合併の渦の中でしっかりとした町づくりの方向や展望が盛んに話されています。ありがたいことにその中で、皆さんを代表して意見を言わせていただく委員として水に親しむ生活や教育に有効なカヌーによる活動を提案し多くの賛同を得ています。また、海津では、琵琶湖からカヌーでさかのぼれる沼（内湖）を中心に、甲子園球場が3つぐらいの場所を「憩い場」「子どもの冒険遊び場」として、ピオトープを「マキノの夢の森づくり」という名称で作っています。ここでは常に県や町の行政と学校と地域住民が農林漁業を意識しながら相談し、楽しく夢を語りつつ実践活動を毎月第3日曜日に行なっています。カヌーは目玉の一つです。「大人が変わり、本来の自然体でお互いが喜ぶことをする姿が子どもの未来を明るくする」

「琵琶湖もきっと喜んでくれる」と確信し活動しています。

◇ 卒塾にあたって 「卒塾を前に思うこと」(個人・グループ)

① マキノ、湖西を中心に「本物教育」を行なう機関運営に携わらせていただく。
そのために若者や、個々の家庭にもあらゆる面で関われる「力量」を身に付ける

(例) 経営コンサルタント、弁護士へのチャレンジ

② 1年目の地域コミュニティーコーディネーター(15名程度)から立ち上がった「地域コーディネイト人材養成」の動きを県域で確実なものにする。

頻繁に淡海ネットワークセンターや県教育委員会には顔をだします。

③ 子育て支援サポートを中心に「人間力再生」のプログラムを実践していく

④ 国際的に通用し役立つ人材の育成を①の機関を中心に行なう

⑤ 湖西地域でモデル事業として指定された「マキノの夢の森づくり」を生かして、
農林漁業の再生と新産業の創出を地元を中心に取組む



これらを実施するにあたり、やはり家族への感謝を基本にしていきます。

「グループの方向性(活動)」

「大自然の中で生かされている人間」を実感する滋賀県におけるグリーンツーリズムやエコツーリズムは感動体験を伴い、ますますこれから地域の要になると思います。それぞれ個々の場における活躍はされると思いますが、このチームが目指す内容は、おおいに注目され、実践を期待されるものです。

卒塾後は、より専門的な「プロ軍団」として活動しようとする想いを共有できるメンバーとの実践と「付かず離れず」のメンバーと自らを知り区別するところからスタートしていけば個々の関わりもはっきりする。

高島郡の合併協議会においても他の地域と違う特性の一つに「若者がひきつけられるあらゆる分野のプロフェッショナル」を少しぐらいお金がかかってもやっていこうとする方向性が出てきました。

「子ども感動体験研究会」

☆「子どもの感動」を演出するのは、「大人の感動」

「大人が本当に純粋な感性を発揮する場面や研修」をセッティングするリアル体験が必要研究会に来られているメンバーは多かれ少なかれ子どもと共に「感動体験」をすでにされてこられた方々だと思います。

対象となる主役の「子ども」と共に体験する実線プログラムをメンバーに提案していただき、GTチームメンバーもその感動を「実感」してこそ「研究」になると思います。



	○ 氏 名	大槻 英理
	○ グループ	ハートアンドハート
	○ 在住地	甲西町
	○ 3分類	EARTH
	○ 動物占い	コアラ（子守熊）

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私は、大学の4年間でまちづくりについて学び、その後3年間地方公務員として働きましたが退職し、現在大学院で建築設計について学んでいます。どれも、やりがいがあり、楽しく過ごすことができましたが、なぜ建築設計について学ぶことに決めたかという、やはりまちづくりを学んだ時も行政にいた時も、そのまちに住んでいる人はまちをデザインするノウハウを持っていなくて、実際にデザインする側（設計者、コンサル等）はそのまちに住んでいなくて、その間にどうしても生まれる溝のようなものが、いつもまちの理想的な発展を妨げているように感じたからだと思います。建物というのは、設計者が自分の感性で自由になる部分が多くあり、その知識とまちづくりの知識、そして地域住民としての立場を併せ持つことは、まちの発展により貢献できるのではないかと考えたのです。



現在の建築は、時代を必死で先取りしようとはがんばっていますが、例えば、人間の快適な住まい方を提案した最先端の集合住宅に人が住みつかなくなったり、と、すこし実際の生活とずれたところが見られます。私は、雑誌を賑わすようなあつと驚く建築ではなく、その地域をよく知って、地に足をつけながら地域に提案できる、「地域の建築家」の方が、本当は今求められているのではないか、と思います。私は、そのような立場に少しでも近づけるよう、現在勉強しています。

プレゼンテーションやワークショップ等、そのために必要な知識はたくさんあると思います。少しでも、この未来塾で学ばせていただけたら、と思っています。

◇ 卒塾にあたって

未来塾卒業、ということですが、「本当に卒業できるのか？」と焦って活動しているところなので、最終的な方向はまだまだ見えていないというのが実情です。

しかしこの未来塾で、いろいろな世代、考え方が人が集まった中で過し、「まちづくり」というものの難しさや楽しさを、前より身近に感じたような気がします。

それまでも、まちづくりについて少しは勉強したつもりではいましたが、それはあくまで「知っている」だけであって「実践する」ということでは無かったのです。

三期生には本当に個性豊かな人材が溢れていて、考え方やそれぞれの常識というものがバラバラだったのではないかと思います。

「忙しくて出席できない」「どう動いて良いのか分からない」「電子メールが活用できない」「メンバーのやりたい事と違う」…。でも、いろんな人がみんな前向きに力を合わせて進んでいくのが「まちづくり」なのですよね。そこで、いかにお互いの長所を出し合い、譲り合い、短所を補い合えるか。講義でも学びましたが、その実践の場として、本当に身にしみました。

私は普通の会社員ですが、これからはここで出会った意欲的な人々と、「まちづくり」にかかわって行きたいと思いますし、私自身も磨かなければ、と思います。

入塾時は「知識を学ぶ」ということに重点を置いていましたが、それは学生だった私の受身的な考え方だったと、今振り返っています。



	○ 氏 名	川尻 良治
	○ グループ	グリーン・ツールズム
	○ 在住地	守山市
	○ 3分類	SUN
	○ 動物占い	ライオン

◇ 入塾時応募原稿より 「おうみ未来塾において、今後、取り組みたい活動」

1 守山市まちづくり研究会の活性化

守山市まちづくり研究会は、市民と行政が協働して地域課題の解決やまちづくりの実践活動を行おうとするものであり、パートナーシップ型行政を目指す守山市の提唱により、1998年に市民の参加を募るとともに市職員を加えて発足したものである。私は、発足2年後の2000年8月に参画したところであるが、この半年間の活動を振り返ると、その目的とするところとはかなり大きな乖離があったといわざるを得ない。



その原因を私なりに考えてみると、①市民と行政との協働関係を十分理解し、市民活動の組織化と行動計画の樹立および実践活動をリードできる人材が不足していること ②市民活動の拠点となる施設がないこと ③市民活動を支援するための財政的な裏付けがないことなど、協働型行政の前提となる市民活動の基盤整備が不十分であることに起因することが大きいものと考えられる。

ついては、こうした市民活動の組織化に関するノウハウを未来塾において学び、守山市まちづくり研究会の活性化とパートナーシップ型行政の確立への貢献に向けて努力をしたい。

2 地域における市民活動の組織化

かねてから自己の住所地で地域課題をテーマとする市民活動の実践ができないものかと考えているが、今日までその機会を得ることなく過ごしてしまった。当地は琵琶湖をはじめ自然の風物に恵まれており、自然環境保全活動や近隣福祉施設との交流活動など、思いつくテーマは多くあるが、なかなか仲間づくりや活動のきっかけが作れない状況にある。また、近隣地域は自治会組織や親戚・地縁組織など伝統的なムラ社会の風習が色濃く残る農村地帯であり、なかなか課題ごとの住民活動の組織化が難しい地域でもある。そこで、この機会に農村地域での市民活動の組織化のノウハウを学び、地域での実践活動に結びつけることができないものかと考えている。

◇ 卒塾にあたって 「おうみ未来塾で過ごした2年間」

おうみ未来塾生として過ごした2年間の中で、得た最も大きなものは、人との出会いではなかったろうか。三期生の皆さんとは、ともに過ごしたいろいろな場面が思い浮かぶが、この2年間、同じ時間と空間を共有してきた同志との想いがある。出会った当初、県内各地にこれだけ個性あふれる猛者や淑女がいて、各地域で活発に活動していることにまず、感服をした。それがこの2年間の勉学と議論、体験を経て、どれだけ成長したのかは、今後の地域での活躍が示すことになるものと思う。また、講義を受けた先生方や未来塾の先輩諸氏の幅広く深い知識には、毎回、新鮮な発見と感動を得た。県外の方々との交流もまちづくりのモデルを見るようで大きな刺激を得たところである。

ここで入塾に際しての抱負を読み返すと、ある程度、所期の目的を達した点と依然として課題のまま残った部分がある。プラスの点だけを取り出すと、「守山市まちづくり研究会の活性化」については、その端緒が得られた。とくに市民活動の拠点となる施設の設置について、まちづくり研究会のテーマとすることができ、また、施設面でも展望が持てる状況が出てくるなど一定の進展がみられた。ここでは、活動の主体となる市民サイドの参画が欠かせないことから、新しい会員を募ることとなったが、幸いにも、その中に市内の未来塾の卒塾生、現塾生の数名の参加を得ることができ、現在、活発な議論が展開されている。皆さん、市民活動の知識経験に加えて、熱い未来塾スピリットを持った人達ばかりであり、心強い味方でもあり、ちょっぴり怖いお目付役でもあるが、なんとか市内のNPO活動の活性化に向けて努力していきたいと思っている。

最後に、私的なこととはいえ、この2年間のうちに職場環境が変わってしまい、未来塾生なのか事務局職員なのか判然としない状況が生まれてしまい、ご迷惑をおかけしたのではないかとということが気にはなるが、いずれにしても淡海ネットワークセンター事業の中でということでご理解をいただきたい。





○ 氏 名 桑 昌見

○ グループ てんしょく

○ 在 住 地 甲賀町

○ 3分類 EARTH

○ 動物占い 狼

◇ 入塾時応募原稿より 「―「食」「農」を通じたまちづくり」

私は、社会人学生として、立命館大学の経済学部で、環境と農業について学んでいる。地球環境問題は、21世紀の人類の課題であるが、日本の農業についても、同様に感じている。

「農は国の本なり」と言われている。「医食同源」という言葉があるように、食べ物が体をつくっている。そのように人間の「生きる」源である食を提供する農業は、最も重要な産業だと思う。また、農業以外の産業はエネルギーを消費するのみであるが、食物だけが炭素を固定し、エネルギーを生み出せる。だから、それに携わる農業こそが、基本産業だということである。だが、その農業が今や危機に瀕している。現在、日本の食糧自給率は40%を切った。また、穀物自給率については、30%以下といわれている。その他に農業後継者不足問題、農薬や化学肥料による土地の疲弊問題、水質汚染や、中山間地の荒廃など数多くの問題を抱えている。しかし、農業や食に対する問題意識はそれほど高くないように感じる。スーパーには、季節感のない野菜があふれている。また輸入品も増えてきた。加工品は添加物だらけだ。世界中のあらゆる食べ物が手に入る飽食の時代であるが、一方コンビニ弁当ですますという事も少なくない。本当にこのような食でいいのだろうか。このまま日本の農業が衰退していったいいのだろうか。今一度、「食」と「農」について考える時期なのではないかと思う。「食」についてであるが、もうひとつ「身土不二」という言葉もある。これは、身体と土は二つでないということで、その土地のその季節の物を摂ることが体にあっているということを意味している。また、地場産のものを食することができることは、新鮮であるし、輸送などにかかるエネルギー消費も少ないという意義もあるだろう。それぞれの地域に根ざした農業があるはずであるし、それを応援しながら、「身土不二」を実践できたら、こんな素晴らしいことはないように思う。



私は、そのような観点から、「食」と「農」という視点をもって、「まちづくり」が図れないだろうかと考える。大量に長期に出す「産地農産物」でなく、細々でも農業を続けている人達を支援しつつ、人々に「農」を考えてもらいながら、安全な「食」を提供できるシステムをつくれないだろうか。そして、廃棄物についても考慮し、循環型社会へ向けての足がかりを考えていければと思う。

◇ 卒塾にあたって 「未来塾に入って思うこと」

私は、98年に立命館大学に社会人学生として入学し、大阪から滋賀に転居してきました。大学では、経済学部で農業や環境について学んでいました。大学4回生の時、卒業後の進路は未定のまま、このまま滋賀にどっぷり浸ろうとだけ決めて、未来塾に入塾しました。卒業後は、やっぱり農的な暮らしがしたいと思っていたところ、甲賀におくどさんもある古い町家を借りることができました。そして、下宿「すみれ荘」から、「ままや」に（勝手に屋号をつけた）に移り住みました。ちょうど、入塾2年目にあたり、グループ活動に入る時でした。グループ「てんしょく」のメンバーに出会え、私のテーマ「農」と「食」についてみんなで追求する体制に入れたことはとてもラッキーだったと思います。その時は、友人の田畑を手伝っていたので、メンバーには何度も、畑や「ままや」に来てもらいました。「ままや」では、コンサートや餅つきをしたりいろんなことをみんなで体験しています。そういう活動や数多くのメールの交換をしているうちに、多彩な背景のメンバー6人の心がしだいに通じていきました。今、各々が自分の持ち味を生かしつつ、楽しく活動できていることをとても素晴らしいと感じています。

「てんしょく」は現在、
地産地消・身土不二・温故
知新の理念を実現する。そ
して、そこでコミュニティ
が広がる、こだわりの「ご
はん屋さん」を作ろうと活
動中です。そして、私の住
んでいる「ままや」ででき
る農的な体験を含めての



ままや



おくどさん

「食」にたいしての全般的なことを提供したいという
方向で進んでいます。今は店舗を探し始めたところ
で、卒塾後からがコミュニティビジネスの実現に向け
ての本当の活動になるだろうと思います。未来塾に入
って、多くの人と出会えたことは本当に幸せだと思
いますが、特にこの6人と深いつながりがもてたこ
とは、これからの人生の糧になるとと思っています。

あー未来塾に入ってよかった。滋賀はこれからもっ
と面白いぞ。

心からありがとう。



	○ 氏 名	児島 馨
	○ グループ	グリーン・ツーリズム
	○ 在住地	彦根市
	○ 3分類	MOON
	○ 動物占い	黒ひょう

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

いわゆる「住民参加」の一つの形として、近年、自治体の定める「総合計画」や「マスタープラン」策定の場面において、審議会への一般公募委員を登用したり、一般公募の市民も参加したワークショップを開催するなどのケースが多くみられる。そうした手法について、社会的には一定の評価を与えているようだが、僕自身は、その意義を理解しつつも何かすっきりしない感じを受けている。つまり、そういった手法が真の「住民参加」を実現する手法なのか、という素朴な疑問を感じる。僕自身は、その疑問に対して、2つの仕組みをつくることで、答えを導き出せないかと考えている。一つ目は「市民活動団体」の地域（市レベル）でのネットワーク化、二つ目は各地域（校区レベル）において、地域の短期から中長期のソフト・ハード両面の課題に継続的に取り組むことのできる体制（ex. まちづくり協議会のようなもの）づくりを進めることである。これらは、行政の関与が不可欠の分野であるけれども、これらのことを「市民」の側から、また、この2つの仕組みにより「好縁」「地縁」の両面から市民活動の活発化を図れないかと思う。現在、彦根において、「ひこねコミュニティステーション」（4月22日発足）を立ち上げ、この場を中心に実践を通じて進めていきたい。また、実家が農家であることもあり、「田畑」というフィールド、「生産活動」「生産物」「生産技術」等のツールを最大限に活用しながら、多様な人的交流（世代間・地域間の交流、ノウハウの継承等）を進め、環境保全、生涯学習（ex. 生産活動、技術の提供）、雇用促進（ex. リタイア世代の参加）、福祉活動（ex. 給食サービスの提供）等の可能性を探ることにも挑戦したいと思う。これらのことを、未来塾の場を通して、問題発見力・政策形成力・実践力を磨きたい。とりわけ、最も自分に欠けていると思う実践力をを学ぶことができればと考える。また、様々な考えの人との関わりから、自分自身を高め、今後の地域活動へとつながるものを発見したいと思う。



◇ 卒塾にあたって 「卒塾を前に思うこと」

今改めて、「今後、取り組みたいと考える活動とその理由」を読み返し、ダイソレタコトを書いたもんやと思う。この2年の間に、目標の一つであった「市民活動団体」の地域（市レベル）でのネットワーク化は頓挫し、もう一つの各地域（校区レベル）において、地域の短期から中長期のソフト・ハード両面の課題に継続的に取り組むことのできる体制づくりには全くの手がつけられなかった。ひとまず、今後の楽しみを取っておこう。

グループ活動も、参加することもままならず、迷惑をかけることが多かったように思うし、与えてもらったチャンスを活かしきれていないようにも思う。しかし、幸い、歩みはどうやらまだスタートしたに過ぎない状況にある。自分の力を活かせるときにその力が発揮できればと思う。

社会人になって5年、ずっと自分のやりたいこと（まちづくり）を仕事としてやりたいと思ってがむしゃらにきたけれど、最近、ちょっと力が入りすぎていたかもしれないと思う。いろんな人に出会って、関わり方もいろいろあるし、もう少しリラックスして関わられたらと思うようになってきた。ただ単にモチベーションが下がったのか、大人!?になったのか、今はよくわからないけれど、無理はせんとこうと思う。長続きしそうにないから。

最後に、お世話になった皆さん、ありがとうございました。
そして、これからもよろしくお願いします。





○ 氏 名	澤 九麻男
○ グループ	グリーン・ツーリズム
○ 在住地	栗東市
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	虎

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

里山は身近に残された自然豊かな場であると同時に、人が自然を管理しながらくらししてきた場である。自然と人間との関係について話をするとどうしても自然が残っていることがいいことだということになる。

しかし自然が残っていた時代は、不便なところそこから脱皮し、または破壊したことにより社会は進歩してきたが自然をそのままにしておくのがよいか、それとも人の手をいれることにより自然と環境の調和がとれるのか。



私はここ5年ほど前から里山や田んぼの減反地を生かし、こどもから高齢者が楽しめる場づくりをしてきたが環境教育の場だけで終わってでは本来の目的が発揮できない。もともと棚田は人の努力の結晶で、山の木は先人が植えものでそこに人を集め遊びの場の提供をするだけでなく、自然と人がどのような心で接したら環境を守れるか。開発が進めば産業は発展するが公害が残る。差引勘定をすればマイナスになる。



これからは里山が生活の産業の場となり、また子ども達の教育の場となり、さらには高齢者の働く場または人生の体験発表の場になると信じ、これから農山村と都会そしてびわこがどのような共生できるか実践したいと考えています。

◇ 卒塾にあたって 「卒塾を前に思うこと」

「里山を生かしたNPOについて」

地域と源風景である里山や田んぼを生かした住民の手づくりによる自然体験学校の創造にむけて、ここ数年多くの人々の協力とご指導により、目的がほぼ実現できたと感謝しています。地域住民の郷づくり事業として、町道にコスモスを定植し、さらに地域の上流にある九品の滝整備を行い、現在では「コスモス街道」と名付けられ、九品の滝は町の観光シンボルとなりました。荒れていた里山や田んぼの減反地はこの世の桃源郷となり、世間では「こんぜ桃源郷」と賞するようになりました。今までの里山や農地は生産が目的であったが自然体験の場所に提供してから大人や子どもの遊び場となり、山は美しく清掃され遊びどころで植えた水仙が田んぼのあぜ道に咲いており、山の空間ではシイタケを取ったり、タケノコ狩りをしたり、田んぼの周辺ではワラビ取りをしながら田植えの体験をしました。このように農家の人のお手伝いが体験となり、農家の人にとっては生産が目的でなく遊びどころが生産に結びつくことを発見したものである。

自然体験学校は、今後子どもや大人の遊ぶ場所にとどまらず、この里山や減反地に何が出来るか里山を愛するボランティア精神のある関係機関に提供するものである。また、行政区の郷づくり事業により地域は活性化されたが、これからは花火のような一時的ものでなく「こんぜ桃源郷」は、お金のかからない活動として取り組み、さらに自然にあるものを有効に利用することにより、里山保全と自然体験ができることを確信しました。この一年四季を通じて色々実践してきましたが成功した秘訣は、親子の参加と組織団体の利用が多く、また、完成した施設ではなくこれから造り出していく夢とロマンがあったからではないかと思います。そして、里山や田んぼが個人の所有地であったことで案外と目的が達成できたのではないかとと思われる。管理においても公共施設、公共の土地でないことで管理責任が行き届いたと思われる。さらに、参加された人々はこれから築く桃源郷であるため、自然を破壊しないし、ゴミもしない。これからの農山村は子どもから大人までの自然体験道場となり、そこには農山村と都会の交流をお手伝いしてくれる自然案内人が必要となってきます。それでは、その自然案内人はだれがするかとなると里山を愛する人となる。昔から「子どもは親の背を見て育ち成長する」などと言われるが、その時に感じられなくても、いつの日か思い出すような忘れられない何かを親、大人がともに学べる自然体験学校の創造にむけて、イメージ図を作成し、里山を愛する有志による、今以上の里山環境整備と自然案内人の養成をしたいと考えています。現在NPOの活動を総合的に支援している「淡海ネットワークセンター」が滋賀県の大津市にあります。今回もその中の未来塾三期生のみなさんにより活動のお手伝いをしていただき、また、県外のよく似た里山の仲間とも交流をしています。

大きな施設はないが農的文化の歴史と自然の遊び場がある。このように自然と共に親子が遊べる夢づくりこそ里山保全であると信じて夢を追いかけていきたいと思っています。

	○ 氏 名	菅 邦子
	○ グループ	ハートアンドハート
	○ 在住址	守山市
	○ 3分類	EARTH
	○ 動物占い	虎

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

「湖辺に咲くハマヒルガオを守る会」は、現在、行政からのまちづくりと並行した形で活動しています。しかし、まちづくりの役を退いた人達（おおむね3年程）が、続けて積極的に活動していく場合には遠慮があるように見受けられます。また、純粋にボランティアだけで維持管理してゆくことには多々問題があります。（人数の確保や資材の提供等金銭的な面等）



守山市内では、このように行政の補助をうけながら様々な活動が行われています。速野学区だけでも「地球市民の森」や「木浜内湖」などこれからの大きな事業があります。

そのような事業が、地域に住む住民にとって有意義な空間であるために、地域の人達の声を生かしながら、行政と地域で頑張る人達との間にたてるような仕事したいと考えています。また、公民館の社会教育指導員という立場をいかしながら、自分の住む河西学区でどんなことができるのか、どんな形で取り組むのが良いのかを学んでゆきたいと考えています。

未来塾で学びたいことは、地域の特性を活かし、こどもたちや、高齢者が楽しみながら、生きがいつくりにもなるような事業の立ち上げ方や、維持管理していくための方法や多くの人達を巻き込んでいくやり方を学びたい。指導員の仕事を通して、相談されても、どのような形で具体化してゆけばいいのか思案する事がよくありました。皆で何かすることの楽しさを学び、広げてゆきたいと思います。

◇ 卒塾にあたって

平成13年6月9日に第3期生の開講式があり、事前に担当の天川さんより皆のプロフィールが送っていただきましたが、私が本当に参加しても良いのか迷いながらちょっと不安な気持ちで出席しました。けれども、2期生のグループ発表やオリエンテーション等を聞いて、私同様、仕事や遊び以外に何かをしたいと考えている人たちが、ここにはたくさん集っているんだと心強く感じました。

7月の岸田眞代さんのコミュニケーションセミナーで、名前の順番に座った仮グループの中で1年目の運営委員を引き受ける事になりました。正直、仕事柄、夜の会議や土・日の事業等とのかねあいでもどこまで積極的に参加できるのか疑問でしたが、とにかく時間のゆるす限り出席しようと思いました。また、個性の強いメンバーの積極的な自己アピールは聞いていて心地よい刺激になりました。現地研修も楽しく参加しました。

しかし、1年目は講義・サブ講義等あまり参加できず、今思えば残念な事でした。また、せっかく色々な資料等も送ってきてもらっていたのにしっかりと目を通さず、後でまとめて読もうとためてしまって、現在読んでいる始末です。反省しています。

2年目のグループ分けに向けて、自分が何をしようとしているのか他人に聞いていただき理解してもらって共通認識を探していく作業は、大変でしたが、自分の思いがけない欠点や長所を見つける良い機会でありました。限られた知識や過去の経験だけで解決するのではなく、もっと本を読み自分で調べ、色々な人の話を聞く事の大切さを改めて感じました。

2年間という短い期間でしたが、ここで知り合った未来塾3期生の仲間が、今後何かに挑戦したり活動しているのを見たり聞いたりして、これからの自分の活動への励みとしていきたいと思います。皆さん、ありがとうございました。





○ 氏 名	田中 義郎
○ グループ	てんしょく
○ 在住地	大津市
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	コアラ（子守熊）

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

□活動経験

高島町「びれっじ」のきっかけをつくった。

95 年「高島商人塾」の講師を務め、商業と市街地再生とまちづくりの関連を訴え、大溝文化保存の大切さを提案した。

□塾で学びたいテーマ

マネジメントの手法をまちづくりや行政、介護、NPO 等のジャンルに活用すべきだ。

その学習をしたい。

□今後、取り組みたいと考えている活動とその理由。

コミュニティビジネスに取り組みたい。出来れば起こしたい。

なぜ、コミュニティビジネスか。理由は2つある。

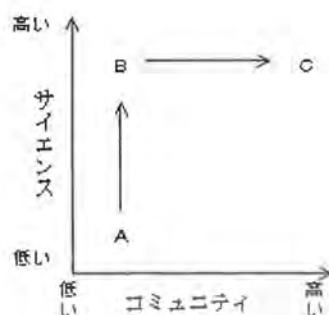
コミュニティビジネスをとおり、21 世紀型マネジメントの規範を示したい。

今までの企業はサイエンス（注1）だけを追及していれば良かった。より良い商品をより安く提供することが企業存続の条件であった。

（注1）サイエンス…マネジメント、マーケティング、組織、リーダーシップ等を総称してここではサイエンスと表現する。

しかし、21 世紀は顧客から信頼され愛される企業のみが生き残る時代になる。

今までのようなサイエンスだけを振り回しては、顧客からそっぽを向かれてしまう。企業にとって顧客とは消費者、生活者、住民である。顧客に信頼され愛されるためには、住民、地域に対する働きかけ、つまり、コミュニティについての配慮が不可欠になってきた。これからは次の図の「C」に到達すること。このことが繁栄企業になれるか否の分岐点と考えられるからである。



2つめは、少子高齢化社会を迎え、公共性、非営利性の高いサービスや商品の市場をどのように育てればよいのか。イメージとしては、産業コミュニティのような市場をつくり上げられないものか。このような市場が形成できれば、地域起業家づくりにも貢献できる。

◇ 卒塾にあたって 「コミュニティー産業づくりを目指したい」

少数の超繁栄企業と多数のじり貧企業。

行列のできるお店と閑古鳥が鳴くお店。

日本は今、経営パラダイムの大転換期を迎えている。

量の拡大が望めない時代になった。

量の拡大の時代には、効率を高めることが中心課題であった。

効率を高めるための中心課題は、オペレーション能力を高めることであった。いかに安く、いかに高性能につくるか。換言すれば、ハウツー(How to)思考であり、方法論や手段先行型のマネジメントが展開された。

これからは、経営の品質をいかに高め、変わりゆく市場構造にいかに迅速に対応するか。

そして、いかに顧客の支持を得るか。いかに顧客に役立つか。

企業の目的や存在理由が直接問われる目的先行型のマネジメント(注1)がこれからの中心課題になる。

(注1)目的先行型マネジメントをここでは21世紀型マネジメントと表現する。

コミュニティービジネスを興したい。そして、コミュニティービジネスをとoshi、21世紀型マネジメントの規範を示したい。

この思いは「てんしょく」の立ち上げという方向で今、進んでいる。

「てんしょく」のコア・コンピタンス(注2)は米、ごはん。本物の食を提供しながら食縁で人を結び、意欲のある中高年者に雇用機会を提供する。

21世紀型マネジメントの導入により、持続可能な事業に仕立て上げる。

(注2)コア・コンピタンス…他社にない自社独自のノウハウ、技術、スキルなどの強み

21世紀型マネジメントを企業経営だけでなく、行政、教育、NPO、介護等、公共性や非営利性の高い分野にも、もっともっと活用すべきだ。

少子高齢化時代、量の拡大が望めない時代を迎え、これらの分野を近い将来、「コミュニティー産業」として育て上げ、新しい社会ニーズに対応できる受け皿にしなければならない。

「てんしょく」はその一里塚としての試みである。「てんしょく」の成功は、コミュニティー産業づくりに風穴を開け、みんなが幸せを享受できる新しい社会秩序を構築する、そのきっかけになるに違いない。併せて、地域起業家も育成したい。

あっという間の2年間だった。でも、ぼくたちの仕事は、まだ始まったばかりである。



	○ 氏 名	田淵 久美子
	○ グループ	てんしょく
	○ 在住地	草津市
	○ 3分類	EARTH
	○ 動物占い	猿

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

地域に根ざした高齢者施設づくり、施設というよりも最近増えてきたグループホーム的なもの。さらに、そこには高齢者だけでなく子ども、障害者、地域に住む人すべてが行き来できる開放的なホーム・・・そんなものが作れば。

私は現在、高齢者福祉施設（老人保健施設）でケアワーカーとして働いています。大学を卒業してすぐに現在の施設で働き、かれこれ2年が経ちました。



自宅から毎日車で30分。通勤している者からすると近い距離。でも、もし近所のお年寄りがうちの施設に来たら・・・その距離は「おば捨て山」にも思える果てしない距離？ 「知り合いがいないから帰りたい」とおっしゃる方は結構います。

歳を経るほど自分の住んでいるところが良くなってきます。家族や知り合いに囲まれていれば最高だけれども、そうでなくとも、地域には今までに築いた何らかの繋がりがあります。どんな障害があってもその繋がりが保てる暮らしができるように、地域に力をつけていきたいというのが私の思いです。

地域に根ざした小さなホームに高齢者も子どもも、介護をしている人も育児をしている人も集える、そしてボランティアができたり情報提供ができたり・・・そんな活動を小地域で始めていけたらと思います。

◇ 卒塾にあたって

2年間お世話になった方々、本当にありがとうございました。あまりにも早すぎて何がなんだかかわからないうちに2年が経ちました。

1年目、私はこの場においてふさわしいのか・・・不安と焦りと期待と。2年目、自分の目指すものが少しずつ変化、今は「てんしょく」の活動に本気になってきている・・・不安と夢と希望と。この先が楽しみ。

私たち「てんしょく」の活動はこれからが本番！！ 今までも内容は濃かったけど、これからはさらに濃い活動をしていきます。私の人生もきっと濃いはず。

お楽しみに！





○ 氏 名 名田 陽一

○ グループ てんしょく

○ 在住地 大津市

○ 3分類 MOON

○ 動物占い ひつじ

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私は、これからの食のありかたを、地域社会の中で正面からとらえていきたいと思います。

私は京都市に生まれ、住宅を購入して大津市に移り15年が過ぎました。いわゆる新興住宅地に住んで大阪に通勤する典型的なサラリーマンであり、「おうみ」は私自身にとって「ベッド・タウン」以上の何ものでもありませんでした。

30代前半に「抽選で敗れて」自治会長を経験した時も、子どもを得て近くの里山に触れるようになった時も、妻がボランティア活動を始めた時も、何度も「地域居住者である私」について考える機会があったのですが、ビジネスでの自己実現を再優先にしている私にとって、それはプライオリティの低いテーマでありました。

そのビジネスの現場で食品メーカーの経営企画を担当していて、近年大きな出来事がありました。それは我々がついに成熟社会に入ったこと。現代の飽食の中では、ヒット商品はとおり一遍のリサーチ結果から生まれることなどありません。生活者の支持を得られる商品企画は、開発者が心から自分で欲しいと感ずること、つまり「消費者である私」に問いかけることから始まります。昨年以降我々を震撼させた食品の品質管理問題もあり、こうして急速に「消費者である私」と「生産者である私」は、私の中で整合してゆきました。

そして、こうして「食べる自分」を主体においたとき、次に見えてくるのは「人の中にある自然」の問題でした。例えば、「里山で生み出されてきた食べ物」という一点を見据えても、食に携わってきた私が「地域居住者」である私と整合できるのではありませんか。さらに言えば、これこそ企業人であることを優先して内なる三重の断層(生産者・消費者・地域居住者)を抱えたまま過ごしてきた私が、主体的に「おうみ」に関わり、本当の意味での自己実現を目指すアプローチではないか、と考えます。(了)



◇ 卒塾にあたって 「卒塾を前に思うこと」

「まさかここまでくるとはね。」これが今の正直な感想です。

県外から転居してきて、大津のニュータウンに住み、大阪へ通うサラリーマン。食品メーカーに勤め、作ることと食べること、地域で生きてゆくことの「内なる断絶」に乾いていた私。

そんな私が、未来塾に来て、有機無農薬の畑で汗をかきました。商店街の空き家探しに歩きました。ほんの少しですが、野菜やお米、発酵食の本当のおいしさを知って、食べるものも変わってしまいました。そして何よりも、新しい仲間、年令も抛って立つところも多様な新しい友人と一緒に、今「おうみ」の地を駆け回っています。

「これからの食品産業は、家庭食の代替化傾向と同じだけ、食の自然回帰傾向に目を向けなければなりません。それと、NPOって組織も良く分かりませんね。私が見て来ます。」職場で小賢（こざか）しいことを言って未来塾に来た私を、「おうみ」は自然体で迎えてくれました。そして、いつの間にか私は変わりました。おまけに、来春の新製品「お米のピザ」を開発するきっかけも与えてくれたのです。これで製法特許出願、マス・コミに露出し、発売を前に問い合わせが相次いでいます。ついでに昇格までしてしまいました。

「まさか！」は続きます。今夏、私の会社の扱う加工原材料から、報告されていなかった違法食品添加物を発見しました。このとき問われたのは、企業のエゴを捨て、食べる人の立場に立って敢然と行動できるか、でした。危機管理委員会の一員として、躊躇なく情報開示・商品回収が出来たことも、ここへ来て、自分が変化したからであったような気がします。対処出来なかった企業が、その後社会の指弾を受けて倒れてゆきました。まさか、ここまで。食の世界が激変しています。

「本物の食を提供して、新しい食縁を結ぼう」。未来塾の仲間たちと話し合ったことが少しずつかたちになりつつある今、私の「内なる断絶」が繋がってゆくのを実感しています。おうみ未来塾での出会いに心から感謝します。感謝を込めて、私がここで出来ること、それは明らかです。産業人であること、食のプロであることの強みがあれば、それを提供すること。2年間、本当にありがとうございました。（了）





○ 氏 名 西村 ますみ

○ グループ 駄菓子探偵団

○ 在住地 守山市

○ 3分類 MOON

○ 動物占い たぬき

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

今年の2月、県の県民文化課よりNPO法人ゆうらいふが委託を受け、社会貢献団体実態調査をいたしました。地域は湖南2市3町です。ボランティア活動をしている団体からNPO法人化している40団体を選択して聞き取り調査を行いました。その調査から市町村によってボランティア活動に格差があることがわかりました。



ミニコミ紙に関わっていた8年間に、色々なボランティア活動や文化教室の開催、コンサートや映画会など活発な活動をしている人物を200人以上インタビューしてきました。その時に私が聞いたことばは「個々にボランティア活動をしている人がいるが、個々で終わってしまっている。地域にボランティアセンターや交流センターがなぜないんだろうか、もっと後押ししてくれるリーダーがいれば・・・」ということでした。そして今年調査に携わって、やっぱり「リーダーがない」とか「場所がない」という声を聞きました。いまだにボランティア活動のリーダーや場所がない？ちょっとショックでした。しかしその中でも草津市は、行政がパートナーシップ推進課があることやボランティアの交流センターがあり多くの活動団体がここを利用しているということでした。どこの市町村でも社会福祉協議会がありボランティア連絡協議会などを作って交流しているようですが、草津が一番充実しているように感じました。

私の住む守山もボランティアが生き生きと活動できる場所やリーダーやが欲しい。ボランティアが育つ環境を作りたいという思いが沸々と沸きあがっています。私が今、所属しているNPO法人ゆうらいふが地域ボランティアの核になれば・・・。また私の夢、地域に根ざした交流の場「西の村」を実現するためにも地域プロデューサーの資質を身につけ街づくりに貢献したいと思います。

◇ 卒塾にあたって 「みらい塾の感想」

あっ！と言う間の2年間でした・・・「地域プロデューサー」という言葉に誘われて・・・ちょっと不安でしたが、思い切って応募して良かったと思います。

本当に色々なことを学ぶことが出来ました・・・私自身が、成長できた2年間でした。

未知の可能性を感じています・・・地域に帰って、地域でまた自分自身の夢やネットワークを広げていくというワクワクした気持ちと勇気をみやげに卒塾することができます。

27人の塾生と出会えたこと・・・これが私の宝物になりました。ひとり一人の個性が、本当にステキできらきら光る輝きを持っていることに気づきました。みんな楽しいこと大好きな人ばかり。

「可塑性のあるプログラム」・・・先日、みらい塾の運営委員・北村裕明先生が、一期生に向けて講義をされたブックレットを読ませて頂きました。日本では、初めてじゃないかといわれる「可塑性のあるプログラム」(自分たちで講義内容を決める1年目、研究テーマを決めグループに分かれて研究2年目)を経験しました。

与えられるだけでなく、自分たちで地域の問題や課題を見つけて活動を進めていくというやり方を学ぶことが出来たことは、卒業にするにあたった大きな成果だったと思っています。自分自身の自主性を自らが引き出すことができたこと、周りの人々をも巻き込んで活動を進めていく方法など、この2年間の学びをどのように地域に生かしていくか。私自身は、地域で「西の村」をどのように確立していくかという大きな課題をかかえていますので大変参考になり、ステップアップにつながったと確信しています。

駄菓子探偵団・・・本当に楽しい研究です。一年間笑い、激論し、イベントも行いました。1年間の活動で終わらずにこれからも探偵団の活動を継続したいという思いがあります。駄菓子って本当にすごい！駄菓子で「コミュニティ再生」人と人をつなぐことが出来るのですから・・・。これからも駄菓子探偵団は不滅です。





○ 氏 名	西山 順子
○ グループ	駄菓子探偵団
○ 在住地	野洲町
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	狼

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

抱負を語るにあたり、まず私が先日大学に提出したゼミ論文の冒頭を引用させて頂く。

「私は、ここ滋賀県野洲郡野洲町に引っ越してきて4年半になる。年齢から言っても我人生の終焉の地となろう野洲町を知りたくて、町広報紙を情報源に、生涯学習講座や委員会、ボランティアにいくつか参加した。それらのどれでも感じたのは『この町には文化がないのか』と言いたくなるほど『野洲らしさ』が見えてこない」とことと、『町行政がやっていることはどこかおかしい』ということだった。その答えを見つけるためには、正しく見る目を養い、的確に評価・批判する能力が必要と考え、政策科学部へ社会人編入したのである。



その中の高田昇教授の授業で、『魅力的なまちづくりには、若者・よそ者・ばか者が必要である。』という話を聞いた。これは『常に次の時代を作り情熱にあふれる若者のパワー、よそ者のようにまちを見る客観的な視点、一見すればばかげているような斬新な発想力』これら3つの要素が起爆剤となり、まちづくりは潤って興っていくことだそう。40歳をとうに過ぎた私は、若者には入らないかもしれないが、元気なシルバー世代から見ればまだまだ若輩者であるらしく、ボランティアに参加するたびに『もっとがんばらなければ』と奮起する。地元生まれの人から見れば、4年半住んだだけではいまだによそ者であることに変わりはない。だからかえって気付く事もある。斬新かどうかはわからないが『そんなことに何で熱くなるのか』としらける人達を前に『力を合わせればもっと大きな事ができる』と説く、いわばばか者である。ならば、私でもまちづくりの起爆剤になれるかもしれない。そんな思いが今の私を支え、動かしている。移り住んだことを誇りに思えるような町で暮らしたいなら、自分から動かなければならないのだ。」

まちづくりというあまりにも範囲の広い課題を自分に背負わせたわけだが、野洲町のまちづくりにおける住民参加の問題は各活動グループの横つながりがいないことであり、それぞれの意識をどう高めるかがポイントになると考えられる。そのきっかけを模索する中で、自分はどう動くべきかを知りたい。きっかけは、一村一品的な特産品作りやイベントなどの従来からのやり方しかないのだろうか。環境問題や福祉の問題は理解しやすく、住民の目にも付きやすいが、土台のまちづくり全体のことはあまり語られず、ぼんやりとした雰囲気だけで、先に進まないことに悩むうちに、滋賀県全体で考えてみるのも発想の転換ができるかもしれないと思い、入塾を思いついたのである。

◇ 卒塾にあたって

未来塾に入って、早や二度目の春を迎え、慌しく過ぎた二年間を振り返る時となってしまった。この二年間、私個人としては、通学・仕事・団体活動・事故・病気の発見とかなりの変動があり、参加できた研修・訪問もわずかであった。感想を述べるには塾生として体験不足であるかもしれないが、未来塾の魅力はやはり「人」につきると思う。熱き思いを抱いた人達に出会えたことが私に大きな収穫を与えてくれた。

そのひとつは、遊び心で楽しんで活動することを教えてもらったことだ。貧乏性な親に育てられた私には遊び感覚に後ろめたさが付きまとい、肩の力をぬけずにいた。でも、それでは豊かな発想もうまれてこないし、続けるのが苦しくなってくる。

もうひとつは、多彩な人達と接し、相手に自分にはないものを見つける時、自分で気付いていなかった自分の姿を知ったことである。私は野洲町で色々な活動をしているが、誠意を持ってやろうとするあまり、ドブプリとはまり込み、自分自身を追い込んでしまう。それを、真面目に活動する良いやり方だと思い込んで行動していたことに気が付いたのである。それでは、独善的で周囲の人の発展を妨げることになってしまうこともある。私一人が走り回るのではなく、メンバーの力を見い出し、進展が遅くとも手分けして活動を進めていくことでお互いに育ち合っていく・・・それがグループ全体の成長となる。今後は、そんな活動を目指そうと思っている。

そういった関係は活動団体と行政との間でも今必要とされ、多数の市町村で摸索がなされており、わが野洲町でも新たに取り組んでいるが苦勞している。「協働」、この言葉に立ち戻ったわけだが、二年前の途方にくれた私ではない私が今ここにあるのは、未来塾の皆さんとおうみネットワークセンターのスタッフが支えてくださったおかげだ。感謝の意を表すとともに、今後ともよろしく御鞭撻の程、お願いしたい。





○ 氏 名	久泉 和久
○ グループ	ハートアンドハート
○ 在住址	草津市
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	猿

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私は、仕事を離れ、自分のできることは何があるのかを最近考えるようになりました。私は、厄年を迎え体の変化に気づき、これまでの自分とは違った面を感じたのです。特に神事を信じている訳でもありませんが、同じ厄年のものが、神社に集まり厄払いをしました。そこでは、中学校を卒業以来、二十数年出会っていないものと出会い、久しぶりに話をし、それぞれの人生の変化を語ることで、人生



の節目に関して共感するものがありました。そのころ偶然、わたしは、体の変化に気づかされていました。若いときはなんともなかったのに、少し体を使っただけで「あれ、何で体が痛むのかな」と、病院通いをする羽目に陥っていたのです。厄年を契機に、無理をしないことの大切さに気づいたのです。今考えると、これまでは、与えられた仕事をこなすことで精一杯でした。仕事をするのが、生き甲斐のように考えていました。一生懸命仕事をするので社会に貢献できていると確信していました。私は、草津の旧来の農村部に住まいしておりますので、住んでいるだけで地元の奉仕作業や、農作業があります。だから、仕事でも、地域でも、社会に貢献できていると思っていました。しかし、今は、職種が変わったこともあり、少し外に目を向けるようになりました。時代を読むなんておこがましいことはできませんが、おうみ未来塾が言うように市民と行政の関係は変わってきていると思います。最近、私は、市民活動を始めました。市民活動というと聞こえがいいですが、仕事を離れて、何のしがらみもないところで自由にやろうと思っています。市民活動にどっぷりつかり、自分に何ができるか、発見したいと思います。同時に、同じ思いで集まる塾生にも、期待しています。

◇ 卒塾にあたって

入塾からはや2年が過ぎました。入塾式のときのあの初々しさは、いまだに印象的です。入塾式という晴れ舞台で少々緊張気味な熟成の顔ぶれを見たとき、同期のみなさんはいかにもつわもの揃いで、堂々とした趣がありました。やはり、学生の入学式とはずいぶんと違うもので、年齢も重ねた大人の集団ともなると、これからの時代を切り開いていく気概に溢れた頼もしさを感じました。また、同時に自分も武者震いしたものです。

1年目は、研修プログラムにより地域プロデューサーとして活躍できるように理論と実践の講義を何回か受けました。ピアザ淡海の研修室で昼食をとるほど長い1日コースの研修を受けました。もっとも、研修内容については、深層心理の中に丁寧に仕舞い込んでしまいましたので、直ぐに具体的に思い出せなくなってしまいました。いずれその講義内容は、実践の舞台で役に立つことと、信じていますが、

講義以外のアトラクションは、今でも鮮明に脳裏に焼きつきます。晩秋に奥琵琶湖でカヌーに挑戦しました。このときは、天候が悪く小雨の降る寒い日となりました。ところが、小雨が参加者全員に感動を与えてくれました。カヌーに慣れて湖面に出て行ったこのときに、桜で有名な海津大崎にかけて目前に二重虹が架かったのです。この光景は私にとって生涯忘れることはないでしょう。

2年目は、いよいよグループ研究です。4月にグループを結成しました。まったく異質のメンバーが同じ目的に集まり、対等な立場でリーダーを中心にまとまっていきました。最初は、会議の持ち方もずいぶんと戸惑いました。通常仕事上の会議では、議論を進めながら、結論を導いていくことができますが、グループで会議をすると、まったく予想だにしない方向にフラリフラリとするのです。このフラリフラリが実は最も大事なことで今思っています。グループ研究に入りたてのころ2期生の方をお招きし、同じことをおっしゃっていたことを思い起こします。これから、卒塾して、市民活動を進めていく中でいろんな場面に遭遇すると思われますが、その時、グループ研究の進め方は随分役立つと思っています。市民活動のようにフラットな関係では、お互いの主張を認め合いながら徐々にまとまっていこうとすれば、このフラリフラリが、実は息の長いゴールに向かっての近道になるのではないかなと思うのです。



	○ 氏 名	藤井 伊佐美
	○ グループ	ハート&ハート
	○ 在住地	長浜市
	○ 3分類	EARTH
	○ 動物占い	狼

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私は、虎姫町役場に勤務して三十年、特に企画、財政、同和対策等の勤務が長く、特にまちづくり（地域の活性化）に感心があり行政、地域住民の仕かけ人として、いろんな組織づくりに取り組んできましたが、基本的な勉強をしておらず我流で進めてきました。



四月から人事異動により、教育、同和対策の調整役的な仕事を担当することになり、時間も自由が取れて、近い時期に退職を想定されます。この時、地域プロデューサーとして勉強し、行政と住民の役割分担、住民主導のまちづくりに打ち込みたいと考えています。第一期塾生に応募しましたが、残念でした。今回、年令も高くなりましたが、現在、長浜市内を中心に「ハートフルプラザ」（誰にもやさしい町づくりを進める会）」（五十二人）のお世話をして、障害者と共に障害者対策についてのボランティア活動をしています。いずれも、行政と住民の役割の重要性は理解できますが、運営については、課題にぶちあたっています。NPOとパートナーシップ、企業、行政、住民が一体となった地域運営について、専門に感心のある人達と研究したく応募しました。

書きたいことは一杯ありますが、公務外生活のけじめの時、この二年間、しっかり、勉強し、自己を高め協働して地域活性化の仕かけ人として、楽しく今後生きたいと考えています。

◇ 卒塾にあたって 『地域（ひと）の再生を目指して』

私達の住む町には、様々な人々が集まり暮らしています。障害を持つ人、若くても、高齢者でも、男性でも女性でも、誰にもやさしいまちであることを、身近な問題として認識し、障害をもつ人や高齢者等、老若男女が「誰にもやさしい町づくり」の推進に関心をもち、そこに住む人々が自主的に輪になり課題解決に向けた行動をする時と考えます。

戦後の混乱と廃墟から立ち上って50数年間の今日の日本は、いつのまにか、物質文明といわれ、豊かさゆえに自己本位となり、権利のみを主張し、義務を忘れ、自然環境を破壊しつつあり、行政も企業も激変する社会背景に即応した体質に努力されていますが、そこに住む人々の意識の改革も大切と考えます。バリアフリーから今やユニバーサルデザインという表現がなされていますが、人から人へのやさしさが伝わり、さりげなく人の心をつないでいく、そんな誰にもやさしい地域活動を実現したいものです。未来塾の活動を通して、各種分野で活動されているリーダーの情報収集を通じて、障害者、高齢者が住みやすい環境づくり、子育てに悩む人の輪づくり、生涯学習に挑戦した人々、ボランティア活動をしようと考えている人々が地域でたくさんおられる中、行政主導でなく、地域課題を住民主導で解決する環境づくりが私達の使命と考え、幅広い窓口とした「まちづくりサポートセンター」を立ち上げたいと考えています。目的をしばった活動方法もありますが、少々時間がかかっても、地域に根ざした活動が出来る拠点として設置したいと考えています。地域（ひと）の再生に向けて今一度考えなおさないといけないという人はたくさんおられます。地域プロデューサーとしての使命は、今ほど大切な時と考え、この二年間の未来塾の経験を生かして卒塾後活動したいと考えています。未来塾の先輩や塾生の交流の中、自信を持って進めたく今後とも、ご指導、ご協力、ご支援をお願いします。





○ 氏 名 藤田 充宏

○ グループ てんしょく

○ 在住地 彦根市

○ 3分類 MOON

○ 動物占い こじか

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私は、自分の住みやすい環境を作りたい。それは自分一人だけという意味じゃなくて、沢山の人たちが満足していて、その内の一人として自分がいる。そんな「まち」を作りたい。そのためには日本を変えなくちゃいけない。だけど私には、地位も金も抵抗するだけの力もない。でも、私とおんなじコトを考えている人はこの世の中にたくさんいるはずだ。その人たちみんなが手を組めばなんとかなる。こう、私は考えます。加えて私



の売りは旺盛な好奇心と、それに伴う行動力です。ところが、自分でも歯痒いくらいその思いと武器がうまく結びつかない。自分はなにかしたい、今すぐにでも行動を起こしたい。だけど何をどうすればいいのか、わからない。大学に入る以前の、高校という小さなワクの中ではそれは成功していました。しかし大学という、ワクもなにもない平地から行動を起こしたとき、無惨な結果に私は自分自身の無知を痛感しました。でも、自分についてこれだけは断言できます。私は無知ではあるけれども、無力ではない。

この時期に、なにかのめぐり合わせで訪れた今回の応募というチャンスを生かすことができればと願います。

◇ 卒塾にあたって

入塾するきっかけは大学に入学してすぐに入った国際ボランティアサークル「アイセック」を6ヶ月でやめたことでした。ボランティアの活動領域は行政と企業が入ることのできない所にまで入っていくことができ、社会にとって非常に大切な役割をになっていることはいうまでもありません。しかしながら、活動は個人の献身的な努力に依存せざるを得ないのが実態であると感じました。そしてこの「気持ち」が途切れたときに私は自分が払った犠牲に対して「なにか得る物があるだろうと」思っていたのが、この組織の中では「ありきたりな物しか得られない」と判断し、組織を離れました。また、私が体験したことは、多くの人が経験していることであり、このような組織員の考えの変化が組織がうまく機能しなかったり、崩壊していく主な原因ではないかと思いました。

この半年後、ダメ元で応募したのが未来塾3期生でした。そして、わたしが直面した問題を解決する糸口が見つかればという願いを込めて入塾しました。そしてNPOという存在について、学ばせていただいたり、自分自身についてもより深く知ることができました。しかしながら、NPOにおいても未だ上記の問題を解決するに至っていないのが現状であるという考えに行き着きました。

そして、今から私がチームとして取り組んでゆくのがNPO的要素を持った一般企業です。利潤追求のためだけに活動するのではなく、ヒトと自分たちのために活動する集団です。ここでNPOと違う点は、お金という最も強いインセンティブで個人と組織を守るという点です。コミュニティービジネスというこの形態は「ボランティア→NPO」という流れの次に来るものとして私達がその先行事例として作り上げていきたいと思っています。





○ 氏 名	藤丸 昌弘
○ グループ	駄菓子探偵団
○ 在住地	水口町
○ 3分類	SUN
○ 動物占い	チータ

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

中央省庁から地方自治体への大幅な権限委譲を伴う地方分権化の推進とこれに呼応した広域行政（市町村合併）の論議が各地で話題となっています。

しかし、その内実には行政主導と国からの合併優遇処置（補助金等）を目的としたものであり本来の主役である住民主体による住民の視点に立った住民のための議論からは、程遠い感があります。

このような状況ではありますが、地方分権と広域行政への各地域の取り組みは戦後 50 年以上を経過した我が国における民主主義の成熟度を試すための絶好の機会と言えます。

このため私は、今後の①分権・広域行政に関する議論の場や②合併後の各地域で抱える多様な課題に関する議論の場（都市マスタープランづくり等）において、オピニオンリーダー的な活動を通じて、多様なまちづくりの分野において住民主体の活動に貢献をしていきたい。



◇ 卒塾にあたって 「私と未来塾」

○ はじめに

いよいよ卒塾…月並みですが、長いようで短い期間でした。

少し寂しく、ちょっぴりホットしているのは、私だけでしょうか？

以下、2年間を振り返りその感慨を述べます。

○ 研修を通じて

日高塾長をはじめ多彩な講師の方々、多様なフィールドを持つ同期生との出会いは、大変刺激的なものでした。まず、月1回ペースでの講義は、机上の空論ではない各講師のフィールド経験に裏打ちされたものとして迫力と臨場感のある内容でした。また、県内研修では、好きなことを実践している方々の多様な活動を垣間見て刺激を受けるとともに、NPO等の活動は理屈抜きで“好きでないと続けられないものだ”と実感もしました。

○ グループワークについて

いよいよメインイベントのグループワークです。多様な分野に関心をもって集まった塾生が、限られた研究テーマに分かれて活動することは、大変な作業です。表面上、スムーズにグループ分けができてその中で各人の思いにはかなりの温度差があるものです。

活動の一つのベクトルにまとめ進めていくことは、グループワークでの“学びの最大テーマ”だと思います。これを円滑に進めるには、まず初期の段階にしっかりとメンバー間で“活動コンセプトの共有化（ミッションの共有化）”をしておくことが不可欠であると実感しました。（せんえつながら、この教訓を4期生に送ります。）

○ 今後の抱負

さて、未来塾で学んだことは、この卒塾とともに完了するものではありません。

むしろ、そこからが実践という新たな学びの出発点となるのでしょう。それは、私にとって身近な地域を取り巻く“羊の毛”のようにもつれた日常の課題の解決に向けて私自身が主体的に取り組む新たな出発点であり、このことを再確認できたことが取りも直さず未来塾で学んだことの一つではないかと思います。21世紀の我が国は、新しい市民社会の時代といわれています。そこは、自分たちの身近な地域課題を従来の行政に依存した“お任せ民主主義”ではなく、行政との適切なパートナーシップのもとに、住民が解決に向け自ら知恵を出し合っていく“創発的な自己責任社会”へのパラダイムシフトの時代ではないでしょうか。このような認識を踏まえて、今後は私自身も微力ながら市民活動のフロントランナーのひとりとして自負と意志を持ち続けたいと思います。最後に、お世話いただいた事務局の方々並びに同期生の皆さんありがとう！各々の熱き思いが充実した活動として今後も広がっていくことを祈願します。



○氏名 前川 重和

○ グループ グリーン・ツーリズム

○ 在住地 びわ町

○ 3分類 MOON

○ 動物占い 黒ひょう

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

前巻のチリパナ卒園生

びわくまちづくりぐるーぷ 前川 幸和 maejin@beach.ocn.ne.jp

○貸か「未来型」に入った組

入塾時に提出した。小論文は、そんなわけ、入塾するための「小論文」みたいなのを一つ書いてもらった。そしてそのおかげで、いよいよ「カッパ」という「東洋橋」であります。個人別とUPしたものを、お茶なうとして（読者のみせへんすまそ）やりにはないです。

2年前のある日の夕方にさむねの父親、町職員のH君が、みらい塾
の底を覗き込んでみて

にん なひ あつ まあよ。

金魚屋と一匹のアロアローカードと?！ふんふん、おひみ・ネットワー
センターや果物の物のNPOとつなげるにはいいがもしね。誰か
どかせよう。

全員「お前のハ=A-1」(この辺で天才バカボン風に読んで一発)

「直ぐ行くんであつてもよかろ」

全名「わかち、きん局長」ト云ふ人(おちうた) 白官業で断向の糸
 袴のある前甚のバカ旦那と云ふ若旦那が「い」と云ふ
 前名以外「ハンタンのサンデー」

— というくろりのいり加減で入った。おとも。安直かつモエ
バージョンの作い三期生さん。

○卒熱にあたって

子供おいて、まあさん以下、ソムバーのみが主には、Xバ(+)た
ったX-ワクのかげとおしてあります。まあさん。

○今我の身の揺りお一笑一

あーっ、自治体の役員改選で、執行細名の交付おいてやりこい、夜
くらってしまった。いまままだとキムラ執行なんて、両方互らっ
て田んぼの掘削と維持しているのが早稲——まあこの失とうする。ア
イフン、H17年、今の国の国子する津島政策は強引。この田国厚保
さとう掘削していくか？ いや、国の国長をバカリ、市町村地区部の
強引さか、自治体の自由になつたら、バカリの、厚厚保、みたいは
そのをどおしていくのが、決断の要人である。

私たちが、D-カルニチンに植物子よした、日本の農林の発展に

◇ 卒塾にあたって

信が来る外国人が、日本を去り、京都87.町並みの電柱にも興がのしたり、どこかの馬場と同じ国になつてしまつたり。—— みるゝ型に来る時、学生時代に、それまでの歌謡になつた個性が、うしかわれ、1947年10の行方になりつつあるのを本意と見て、定まる50のこの一書。

1200年くらい前からある。川沿の皇族のゆかり。陸奥や蔵のある
高松や、豪族のゆかり。おんたに2x4の窓がはまっている。まじま
じみ。これについてやうさの家のうさぎうさぎ。太一。席にや
るなうさぎ(輝)だんだん。湖上の私鉄銀行のうさぎの出来か
い。うさぎうさぎ。うさぎ。

そんなにも古きヨーロッパ文化に誇り、支けしの田舎家より、
利権者のいびきとめる。しかし、それと一い出した、同じ方向
往く勝算した。都心の新しい高層ビル群(2004年問題の)の
方へ有利でし。

都市の利権性に対する非利権性の戦略 — その地の根ざりオリビ
リテのあるものを、（つまりやりくりして）街づくりを考へてい
く—— という。と、この趣意を書いていると、ネット上の有名な
Webは「ハウス・マニヤス」の確証を与えている。ターミナルと
ハウズビー商品の紐解きの、ページ—— おお！ UOJとUJO
（中江十郎—ローザ入札）の確証となつたわけだ。さうやって子孫傳
説も出てくるのは——（ギョク）

で、この三期生のかおおたには、その土地に根をすその(トキエ、キーワード、地産地消)とか、子供に、バーチャル——アルファエのせめつとく——で、これにふれる。接する事による。活動体験とかせ、遊びやれ子供が知ったよ、に思います。

成物なにもとまりで、インターネット上のサイバーで一足では、そこへ生さぬにも、「フリー・ゾーン」にあるしかない。商国が全世界にありあから、現実世界のように、東洋の有名なイタリヤ料理店に比べて競争強くなってもうける。そこにはなほない。

たぶんケローパリスムのおかき。その地獄を生か延び。つらさー
としていくためには、オノリーフニな。空をな。地獄のキルクワ。地
獄が。切り落とさるのては。地獄の。その。ような。言。越。め。た。ま。せ。短
つて。お。り。ま。り。他。地。獄。事。の。幼。想。と。さ。う。の。て。は。な。く。私。を。私。て。あ。る。こ
つ。の。道。が。い。ま。さ。る。こ。と。地。獄。が。地。獄。て。あ。る。こ。と。地。獄。果。が。地。獄
早。て。あ。る。こ。と。な。——

行く巻と おらみの人に 懐しみし 道熊

そう云えば、彼の墓 墓トワーリセリ一坊の葬付寺でしと。

——卒業文集に、手書コピーの作られた——
21日のオリソン



	○ 氏 名	松石 敏治
	○ グループ	ハート&ハート
	○ 在住地	草津市
	○ 3分類	MOON
	○ 動物占い	虎

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

という言葉で表したい。

1 結論

International と Internet をキーワードとして、国際化が進みつつある地域の問題を抽出し、その解決のための方策を導き出し、そのための運動や事業を興すトリガーを、この“おうみ未来塾”で見出したい。



2 詳細

- (1) かつて旅行先で 1988 年版 World Almanac を購入・試みに日本の項を見て少し驚いた。日本人 100% と思いきや 99.5% が Japanese とあった。もともと非日本人と暮らしていることになる。また滋賀大学をはじめ湖国には留学生も多くなった。わが勤め先においても僅か 10 年ほど前から急に外国人の出入りが目立つようになった。明らかに近年湖国においても外国出身者が増えつつある。
- (2) 人口構成の変化や労働人口の偏りなどから、好むと好まざるとにかかわらずやがて 10% 以上を外国人労働にあてにしなければならないという。ますます外国人との共生が現実の問題になる、あるいは既にその域に達しているかもしれない。
- (3) 外国人との共生は良い面だけではなく問題も有している。まず日本人自身が自己を良く知ること、そして他をよく知ることを通して双方を認め合える状況が必要と考える。これらの事象をグループ活動を通しあるいはレクチャーを通して積極的にまとめていけたら幸いである。

3 総括

これらの実現のためには、積極的に外国人との関わりをもたねばならない。直接人々と、また間接的にインターネットを介して、また地域に入ってあるいは外に出て人々と接することになる。グループという少人数での活動をベースとして、その範囲にとどまらず幅広く接していくことは緊張もあろうが得るものも多いと考える。

◇ 卒塾にあたって

いくつかの漠然とした構想や期待を暖めているときおうみ未来塾の存在を知って喜んだのは2001年春ころです。待ち遠しい開講式でした。

当時の北村裕明運営委員長のレクチャーでおうみ未来塾における活動で重要な要素としてつぎの3つを挙げられています。①ミッションの共有、②研究で新しい発見、③そして活動化計画へ。これらのことを折に触れ意識していたのですが必ずしもこの図式にのれない事態に出くわしています。しかし実際はこれらがシークエンシャルに進まないと構想が完成しないことになります。特にミッションの共有ということはおうみ未来塾のような自由度の大きい活動では意外と難しい課題だったと感じます。

このような中で中間発表会における「駄菓子探偵団」グループや「てんしょく」グループのプレゼンテーションは感動的でした。入塾する以前に抱いていたイメージに添うものです。コンセプトの実現に当っては厳しい現実と対峙するということになるかもしれませんが塾における活動のバースタブルとして学ばさせてもらいました。

会社人間としてこれまでに数10回外国へ出かけたものの、滋賀県をトータルで見ることが少なかったのですが湖南地域を離れて今まで訪れたこともないしがけを発見したのは収穫です。人との出会いのほかに、湖北で湖上から見た絵に描いたような虹、そして湖東でみた文字通りの堂の乱舞、これらは影像には残せませんでしたが今も強く我がメモリーに残っています。

将来の地域プロデューサーへ向かってのこのおうみ未来塾での学習は、1500人もの人々が一挙に会社を去っていくというサリマンとして思いもよらない厳しい現実の中で少しづつ影響を受けないわけには行かなかった2年間でもありました。

いろんな情報と機会を与えていただいた淡海ネットワークセンターに感謝します。これまでの活動を活かし徐々に動き出しています。今後も強いご支援を賜りたいと思います。

2003年1月





○ 氏 名	松田 元
○ グループ	グリーン・ツーリズム
○ 在住地	草津市
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	コアラ

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

去る3月24日におこなわれました、「夢〜舞めんと滋賀・であい宣言」に出場させて頂きました。他の団体の方々と一緒に自転車をこぎまして、人間自身が生産を産み出すことは大変なことであり、さまざまなひとやものの手助けがあって初めて現在の自分がある、ということを感じて参りました。さらにこちらの塾長である日高敏隆先生がおっしゃっておられました、「売り手よし、買い手よし、世間よし」という近江商人の哲学に心を打たれまして、現在の自分自身に足りない部分が数多くあることを再認識しました。

私は現在まで、自分の勉強してきたことの成果と社会人経験を生かす為、現在の居住地である草津市を中心として、ITに関する機器導入アドバイス、トラブル解決、押入れに眠っているパソコン発掘と使用法指導など、個人的にさまざまな活動をして参りました。しかし個人のできることには限界があり、所詮個人は個人でしかなく、数多くの人々が協力して成し遂げる仕事にはかなわないということを感じざるばかりでした。さらに個人ですと信用してなかなか任せて頂けない、という日本独特の風潮にも何度も突き当たりました。

そこでNPO法人格を取得して活動してみようと思い立ったのですが、まず滋賀県ではどのような市民活動がおこなわれているのか、その現場に飛び込んでみました。その現場とは、「湖国21世紀記念事業 びわこ・お太陽基金」です。こちらで活動なさっているかたがたの熱意に心打たれ、私が現在持っている技術を提供しながら、私にできますところからお手伝いをしている次第です。

連絡手段として、まだまだ電話やFAXなどしか使用できないところも数多くあり、逆にそのかたがたにIT導入を強制的におこなっても、今までと同じように「お蔵入り（押入れ入り）」が繰り返されるのではないかと感じました。現在情報リテラシーの格差について叫ばれていますが、それならば、我々がその差を埋めるべく、活動していけば良いのではと閃きまして、現在に至っています。

ゆくゆくは、ITを導入したければそのお手伝いをします、導入する余裕が無いとか能力開発が困難であるならば、我々にお任せ下されば、こちらでITを駆使して情報提供をおこないます、という方向に進んでいきたいと考えています。事業として成功したいならば、ビジョンを持たねばなりません。NPO法人として登録し、大企業様が手の届かないような小規模なところを、インターネットのように横のつながりでネットワーク化をはかりつつ、地域密着型でフラットな組織化を目指して支援していく団体に育てあげていきたいのです。その為にも、この「おうみ未来塾」で学びたいことが沢山あります。是非とも、この2年間、しっかりと目を見開き、県内外を問わず、積極的に実践力を磨いていきたいと考えています。そして、「ひととひととのつながりの大切さ」を学ばせて頂きたいと思っております。

◇ 卒塾にあたって

未来塾のみなさま、未来塾を運営してくださっているかたがたに、心よりお礼を申し上げます。今の私があるのは皆々さまのおかげです。自然に、全てのひとに、生かされている、という感謝はいつまでも忘れないでいます。

カタ言言葉で卒塾を迎えてしまいましたが、あっという間の2年間でした。

ワタシはナニをしていたのダロウ・・・と振り返ってみると、本業の仕事に精を出していたとしか言いようがありません。思えば2年前、ふとしたことからNPOに関わることになり、これがまた、昔から経営者が青年団やJ Cの事務局などに手を出して会社を潰してしまうことがあった（あ、今も。）というのと まーったくおんなじだなやあ と素直にそう思いました。

昨今の不景気は強烈で、世のほとんどの中小企業を直撃しています。利益を出せているところはほんの一部、損益分岐点を割りこんでいるところがほとんどです。大企業なら人を減らしてリストラできるかもしれませんが、それすらできない環境に最初からある場合、解決策は、もはや廃業という選択肢しか無い。社員は数人しかおらず、社長、社員の全てが重要な役割を担っている状況で、経営者は廃業を本当に選択できるのか？そういう状況を何度も見てしまいました。

ただ、そういう企業とお取引をさせていただき痛感したことがあります。それは私自身のことと共通なのですが、自分のことも十分できていないのに、他人の手伝いをしていて本当に幸せなのか？ということでした。そう、今の自分は幸せかもしれない。しかし人生をトータルで考えた場合に、子種、あ、いや、子孫すら残せないような、そんな生き方でいいのだろうか？

さらにもうひとつ考えさせられたことがあります。他人の手伝いをしているうちにトレーニングされるかもしれないし、若い人にJobトレーニングが必要なのは自明である。だったら、Jobトレーニングのできる環境をどんどんつくっていかなければならないのではないのでしょうか。それも政策として。このままでは若い学生のなかには、就職に失敗したからといって、NPOをこころざす人が出てくるかもしれませんし、現実にそんなお人にもお会いしました。しかし現在のNPOにとって、Jobトレーニングの受入先としてはまだまだ難しい部類に入りますし、「不景気×非営利＝即戦力にならない人間は不要」というスタンスで採用していることが多い、ということもわかってきました。

そこで私自身のことに戻ります。大学入学時に夢見ていた、卒業までに何らかの事業を立ち上げる、という目標は達成できましたが、NPOを立ち上げるという目標は達成できませんでした。しかし在学中に作ったたくさんのコネクションが、今、仕事に大いに役立つようになりました。ただ、このコネクションは地域のプロデュースに役立つかというと、まったく異なる方向を向いているのかもしれない、と感じるようになりました。私にはまだまだ地域をプロデュースするなどという力量は無いのだということもわかりました。そう、これからももっと訓練をしていかなければならない、ということがわかっただけでも未来塾へ来た甲斐がありました！



	○ 氏 名	松田 直子
	○ グループ	駄菓子探偵団
	○ 在住地	京都市
	○ 3分類	EARTH
	○ 動物占い	虎

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私はこの4月からシンクタンクで仕事を始めました。学生時代は環境政策を勉強していたこともあって、政策立案・提言に関わる仕事をしたいと考えていました。まだ社会人になって何日間かですが、日々いろんな発見があるとともに、勉強不足を痛感する毎日です。仕事では役所とのつながりは深いですが、地域に住んでいる方々やその現場の方々、本当の意味での“地域づくり”の担い手との交流はさほどないようです。私自身、この“地域づくり”とは何かあまりわかっていません。これから多様な価値観を持ついろんな人とつきあいながら、いろんなことを吸収していきたいです。



私は森林問題や環境問題に関心があり、これらを切り口に新しい生き方や価値観の模索をしながら、自立した個人・地域をどのように創造できるか、また森林や環境に限らず様々な社会問題を追求し、問題解決のために知恵を集結していける方策を考えていきたいです。将来的にはおうみ未来塾や京都自由学校などを通して、みんなで一緒に問題を考え、共に歩んでいける“場”づくりをしていきたいと思っています。

おうみ未来塾にぜひ参加させていただきたいです。よろしくお願い致します。

◇ 卒塾にあたって

あっ！という間の2年間でした。私自身、就職・結婚と大きな環境の変化の中での2年間でした。生活のペースも崩れ、あまり参加できませんでしたが、皆さんから大きくて暖かいパワーをいただき、いろんな意味で刺激的かつ楽しい時間を共有できました。

この間に何が変わったのかというと、うまく表現できませんが、ほんの一步だけ前進したような気がします。地域プロデューサーは一朝一夕にしてなれるものではなく、これからの長い道のりのスタートラインに立ったのではないかと思います。地域を思い、地域との長いつきあい、そこには多くの人との出会いがあり、その関わりの中でネットワークが広がり、プロデューサーとして育っていく。

私は、昨年6月に知人と共に森林（木質）バイオマスをテーマに活動する「薪く炭く KYOTO（しんくたんくきょうと）」という団体を立ち上げました。入塾の時に、塾で学びたいテーマとして書いた「森林資源（森林バイオマス）を活かした地域・まちづくり」ことを少しづつ実現する方向にいます。淡海未来塾に出会い、少し頑張ってみる勇気をもらい、背中をあと押ししていただきました。まだ始まったばかりで、これから本番です。焦らず、無理をせず、かつ粘り強く、地道に息の長い活動が続けていきたいです。

グループ活動に関わった駄菓子と紙芝居は、とても興味深いテーマで、目指している方向さえ明確であれば、どのような切り口でも地域コミュニティの活性化につなげていけることを学びました。団長の家の守山市播磨田で紙芝居を上演し、多くの子供とお年よりの笑顔が蘇ってきます。これからも探偵団員として頑張っていきたいと思います。

最後に、淡海ネットワークセンターの皆さん、幹事・編集委員の皆さん、そして淡海未来塾生の皆さん、お疲れさまでした。これからもどうぞ末永く宜しくお願ひします。





○ 氏 名	松宮 孝明
○ グループ	駄菓子探偵団
○ 在住地	大津市
○ 3分類	EARTH
○ 動物占い	狼

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

21世紀の時代は、明らかに地域発信型になっていくべきであると考えます。そのキーワードは、「パートナーシップ」であろう。「連携」という言葉は今までからあったが、それがうまくいかなかったのはどうしてでしょうか。その答えを見つけるために受講したいと考えています。その形を「パートナーシップ」という言葉で表したい。

今まで、小学校の教師として、その学区の保護者や地域の方々との連携を模索してきた。開かれた学校を目指す中で一定成果を上げてきた部分もあるが、継続的で自立したものになっているかという点と不十分なところがある。草津市では、「地域協働合校」という考え方を広めようとしている。その「協働」とはどうあるべきかを考えたい。

また、本年度、行政という立場を初めて経験し、イベント開催に向けていろいろな立場の方と連携して事業を進めてきたが、より望ましいかわり方というものを知りたいと思っている。



このような経験をもとに、就学前の子どもたちとその保護者へのかかわりについていろいろな側面から考えていきたい。各学区で、小学校を核にしたアプローチも考えられるし、環境学習についても小学生以前の子どもへのアプローチも考えられるのではないだろうかと思う。

今回受講することで、今まで経験してきたこと以外の新たな視点をもてたら素晴らしいことだと思い、期待している。



◇ 卒塾にあたって

あっという間の2年間というのが、正直な感想です。そして、何より印象深いのは、グループ「駄菓子探偵団」で具体的に進めていけた活動です。1年目の様々な研修では、いろいろな立場の方々との交流から新鮮な考え方に触れることができ有意義でしたが、もう一つ身を引き出してというまでにはなれませんでした。でも、「地域適正サイズ」という考え方っていいなと今でも強く覚えています。つまり、自分たちがやろうとしていることはどれくらいの規模を想定してやるのかということを見定めてやっていくことが大事。エリアとしている地域などの大きさに見合った活動を展開することが大事だということだと考えました。これは、今後、仕事でも、それ以外でも参考にしていきたいと思っています。

2年目に入って、合宿をしてグループ分けをしました。何とか決まり、私は、その中の1つ、「駄菓子探偵団」に入れてもらえることになりました。それからの活動は、一つ一つがとても魅力的で有意義なものでした。グループの活動の詳細は研究報告に譲るとして、自分たちがやりたいことを実際に計画し、分担して渉外に当たり、困難を乗り越えて進めていくのがこんなにおもしろいことだとは知りませんでした。やみつきになりそうです。

ただ、3期生全体をみていて感じたことは、「2年間でグループ研究としてまとめる」ということが大前提なら、そのような意識をもって共通理解する。そのために必要な、適正な人数のグループに分かれ、リーダー等の役割について意識し、協力して取り組むという演習的なものも1年目に必要ではなかったかと思います。また、テーマについても、期間的にも規模的にも適正な内容という考え方をしなければならないと思います。批判めいてしまいましたが、今後の課題であろうと思ったので、述べました。すみません。最後に、「駄菓子探偵団」のすばらしさを披露して終わります。

だ・・・だれもが役割分担に対して主体的で、積極的なのはびっくり！

が・・・がんばるもんね～、紙芝居の絵、手作りの台（わく）、台本、のぼり、衣装・・・し・・・しらんぷりしてられないっていうのが、こういう活動の第1条件でしょうね。

た・・・たいへんだね～からはじまる会話なんて1度もなかった。休日集まっても、平日の夜に集まっても。

ん・・・うんてんしゅもかって出てくれた、画伯！ありがとう。

て・・・てをつないで結婚式をした娘がいるんですよ～、私たちのメンバーには。

い・・・いいもんですね、それぞれが自分の持ち味を出し合うのって。また、それが調和するのなんのって！たまりませんわ！最高！

だ・・・団長（ますみさん）のリーダーシップもすごいし、それに乗っかっていくこの協調性！

ん・・・うん、決めた！細々とでもいいから、この活動を続けるぞ～、ライオンとして！

縁の下の力持ちとして支えて下さり、グループ活動にも参加して下さい、天川さんや木村さん、ネットワークセンターの方々に感謝します。



○ 氏 名	森嶋 利和
○ グループ	グリーン・ツーリズム
○ 在住地	蒲生町
○ 3分類	SUN
○ 動物占い	ペガサス

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私は日野川（日野町の綿向山を源流として近江八幡市から琵琶湖に流入する河川42、2キロメートル）の中流の蒲生町に住み日野川流域の農地5、200ヘクタールにかんがい用水を供給する仕事をしています。



このことから日野川やその支流の河川及び琵琶湖に関心を持ち、受けている恵みに感謝すると共にその恵みを次の世代に引き継ぐためには今どんな努力が必要か考えてみたいと思っています。

現在下流から進められている河川改修の「日野川みらい会議」にも応募し現在は「日野川を見守る会」に改組されNPOをめざして活動しています。

また、近年農業排水が公共用水域の汚濁負荷の一因と指摘されており農業用水の送水前には農家の代表者の方に再三に渡り排水管理の徹底と濁水の防止をお願いしているがゴールデンウィークに日野川の河口に立ってみると茶褐色の濁水が琵琶湖に入っています。

日野川流域には多くのため池があるが一部のため池の水質の悪化が見受けられ、調べてみるとその流域の開発が要因でないと推測し、これを農業用水に利用することにより水質を浄化している機能も有しているのではと考えています。

現在の農村を取り巻く状況は混住化の進展、農業者の減少に加え農業も米価の低迷、転作の増加となお一層コスト削減を迫られています。単純にソフト的な取り組みだけでなくハードの提案と同時に「日野川流域みずすまし推進協議会」の活動にも参加し農地の面原負荷削減にも取り組みたいと考えています。

◇ 卒塾にあたって

2年前に付いて行けるかなと心配しながら入塾しましたが、早くも卒塾の時が来てしまいました。

入塾した年の10月下旬、思いも寄らぬ病院でベッドに横たわる事態に翌年の3月下旬まで仕事も未来塾も自治会も日野川の活動もすべてストップ。

3月下旬から仕事も含めてすべての活動を少しずつ再開しました。

グリーンツーリズムGも皆さんもそれぞれに熱い思いがあり、色々な意見の中で「子ども感動体験学習」の方向が出てきました。

卒塾後も日野川と子ども感動体験学習をつなぐような活動が出来ればと思っています。

あまり参加できませんでしたがグリーンツーリズムG、3期生の皆さん、また、ご指導いただきました先生方や事務局の皆さん大変お世話になりありがとうございました。

今後ともよろしくお願いします。





○ 氏 名 山口 吾往子

○ グループ てんしょく

○ 在住地 京都市

○ 3分類 MOON

○ 動物占い こじか

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私が取り組みたいのは、在日外国人の援助、ことに教育・医療関係の言語的・精神的ヘルプをする活動です。今考えているのは、医療機関、教育機関で必要になる日本語会話をサバイバル・ジャパニーズとしてハンドブック化し、同時に、他言語が通じる委員などをイエローページ的に掲載したり、日本人の医療関係者、保育士、学校教諭などにも、必要となる外国語の語彙をまとめた他言語単語集を配布したりすることです。



こういう活動に興味を持ったきっかけは私の生育歴にあります。私はいわゆる帰国子女でした。滞在したイギリスでは、Non-native speaker のための特別英語教育制度があり、また、学校全体としても、英語の分からない子を援助しようという努力がなされていたので、非常に楽しく過ごせました。一方、日本に帰ってきてみると全く異文化的なものを受け入れる体制ができておらず、非常なギャップを感じたものです。大学を卒業して社会人となってからも、日本における在日外国人への援助が立ち後れている現状を見聞きする機会がありました。ことに私自身が出産し、子供を保育園に預けて大学（京都外大アラビア語聴講生）に通い初めてからは、在日外国人で子育てをしている人々に対する社会的な援助、ことに、子供や、外国人本人が病気になったときのサポートが足りないのではと思うようになりました。

私は語学が好きで、英語以外にフランス語を2年半、イタリア語を1年ほどかじりました。現在アラビア語を1年ほど勉強しており、これも続けようと思っています。また、それとは別個に、日本語教師養成学校にかよいはじめました。貴プログラムに参加することによって、勉強してきたことを活かし、自分でやりたいことを形にする方法を見つけられればと思います。

◇ 卒塾にあたって

改めて卒塾にあたり、入塾の際の小論文を読み返してみて、複雑な思いにかられました。もちろん、おうみ未来塾に来られた方々全て、自分の成長、変化を感じられていることだとは思いますが…。

個人的なことにはなりますが、この秋、正式に日本語教師として420時間の教育課程を終了し、日本語教育能力検定にも合格しました。ですが、私個人の人生の選択として、日本語教師として就職することは、現在の時点で選択しないことにしました。ボランティアとしては現在プライベートレッスンで日本語を教えています。

何故か。「てんしょく」という出会いがあったからです。未来塾2年目のグループワークで、自分自身の進路そのものが変わるなどと、4月の時点で、誰が予想したでしょうか。農業に真剣にたずさわっている方々との出会い、食をめぐる状況と闘いつつ何らかの貢献をしようと努力し続ける方々の存在、そして、理念先行ではなく、採算のとれるコミュニティビジネスを真剣に目指し、指導して下さる方との出会い。それは私個人の思惑をはるかに越えた、時代の流れに触れることでもありました。

「死んだら、栗の木の下で、かぶと虫の餌になって、畑の栄養に」そう語られた、甲賀町佐山の、橋本さんの言葉、姿、声、畑の風景がいまも生々しく蘇ります。40年という長きにわたって、他人のために、自分のために畑を耕し、道を切り開かれてきた一人の女性が、生きている。人間の小さな思惑をはるかに離れた、宗教的ともいえる悟りの境地に達しておられる方と、出会えた幸せ。その幸せを静かにかみしめながら、私も何らかの貢献をしていけたなら、たまさかに頂けた幸せへの恩返しとなるのでしょうか。

あらためて、貴重な出会いの場を授けてくださった、おうみ未来塾に心から感謝します。そして、これから4期の方々、5期の方々にも、幸せな出会いがたくさん待っていることと信じて、心よりエールを送ります。がんばれ！





○ 氏 名	吉見 精二
○ グループ	グリーン・ツーリズム
○ 在住地	大津市
○ 3分類	MOON
○ 動物占い	黒ひょう

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

おうみ市民活動交流会・2001」～2001/3.3～に始めて参加し、分科会では「地域に根ざした NPO 活動とは」の事例発表を聴きました。そこで、様々な分野で自主的な活動に取り組む団体やグループの存在を知り、その真摯で情熱的な活動の中身に触れて感動しました。

なかでも、番場の歴史を知り明日を考える会の発表テーマ「郷土の資産を活かしたまちづくり」には、大いに興味を惹かれました。これからは、まちづくり、町おこしに市民自らの活力で取り組む時代の到来だと痛感しました。そして、私にもまた、今までの経験を活かす場があることに気づきました。私が取り組みたいのは“まちづくり”のなかでも、観光まちづくりです。



いま、地域住民と行政が協働して取り組む福祉や環境など、いろいろな“まちづくり”に関心が集まりつつあります。なかでも、観光まちづくりに対する期待が大きいのは、貴重な自然、歴史的な資源など地域の良さの持続的な利用を進めることで、人々が、ふるさと意識を高め、生きがいを深めることができるからです。また、観光は地域活性化の点からも期待は大きいはずです。一方、来訪者は新しい魅力を見せつけてくれる観光地の登場を期待しています。つまり、地域の良さを資源として生かし、新しい資源の掘り起こしと活用を進めて行くことが大切です。行ってみたい、住んでみたい魅力ある観光地の実現が求められています。その実現のためには、観光によるまちづくりの推進のための関係者の合意形成や人材育成、組織づくりが肝要です。

推進にあたっては様々な組織の総合調整や連携も大切です。また、ボランティアや NPO の活動への参加は重要な要素になってきます。これらを全般に亘ってコーディネートする役割を果たす存在が求められているのではないのでしょうか。まさにプロデューサーが必要なのです。

ビジョンを実現するために、具体的な成果を構想し、その設計に従って実現すること。ビジョンへの共感と賛同でまわりを引っ張ることが出来、なによりも熱意が旺盛でなければなりません。知事は、21 世紀は心の時代、癒しの時代と言われ、観光への取り組み強化を力説されております。また、湖国 21 世紀記念事業「夢～舞めんと滋賀」の新しい取り組みのなかには多くの NPO の参加で盛り上がりが見られます。このような潮流のなかで、私も おうみ未来塾で学習を深め「地域プロデューサー」として、地域社会に貢献したいと決意いたしました。

◇ 卒塾にあたって

卒塾を2ヵ月後に控えた1月24日、私たちのグリーンツーリズム・グループは「子ども感動体験学習研究会」の第1回目会議を開いていた。私たちの呼びかけに県内のNPOのメンバー、教員、県教委の職員ら13名に参加してもらって、NPOと子どもの体験学習を結びつける研究会を発足することが出来たのだ。グループ活動の一つの通過点を誇いだ記念すべき瞬間だ。この約1年の間、8人の個性豊かなグループが紆余曲折のプロセスを経て辿り着いた活動の成果だ。もちろん、この先も研究会設立の趣旨にそったコーディネート、そして子どもたちおために感動体験プログラムを用意してゆかなければならない。だから、これは始まりの日なのだ。確かに、おうみ未来塾でのグループ研究は卒塾までに一定の研究を完成するという考え方もある。研究会発足だけでは成果の形が見えないという声もあるだろう。しかし、われわれのグループは将来につなげてゆかなければならないプロジェクトを起こしたという点では、あえて責任の重いことを選択し、夢を将来に繋いだのだ。つぎに、われわれ3期全体の特徴について省みてみると、3期生の塾生幹事会は、最初の1年足らずの間は塾生間の交流を深めるためのイベントを盛んに企画した。時には、未来塾の卒塾者や一般の人を招いたりもした。仲間の活動を学習する塾生訪問も実施した。そして、単なる研究に終わらせないで、あわよくば事業に結びつけられるものを志向する雰囲気を作ることにつとめてきた。現に4つのグループともそういう方向に進んだと思う。これは、3期生の特徴といえるのではないか。だから、それぞれのグループ活動の今後の成り行きにも目が離せない面白さがある。追いかけて見守ってゆく楽しみがある。また、グループ分けにも時間を掛けた。1人1テーマ出しを促し、個人からでてくるまで気長に待って、最後は口頭だけでもとみんなにテーマを語ってもらった。8つのグループがやがて4つに絞られて行くが、多数決などといったことは一度もなかった。その後も2ヶ月以上の間、グループ間の出入り自由の形をとって幅をもたせた。現実には多くの人が移動した。思いというのは複雑な要素があるのでよい方法だったと思う。私のグループの場合は一匹狼の強者が集まった形になった。ある人を遠くに訪ねて勧誘に行ったこともあった。あとで、この集団はいろいろ大変なことにもなるのだが。それがよかったのだ。考え方や事情の違いを理解することを学ぶことが出来た。私はまとめ役として、いつも日高塾長が言われた「混ぜご飯とチャーハン」の話しを例にグループ運営の基本姿勢に据えていた。つまり、無理に一体化することは決してしないで、それぞれの個性を活かした集合体を創ることに努めた。だから、合意形成といってもその範囲のことと思っている。そこに留まっていることより先に進むことを考えて行動してきた。新しい経験の機会を得たのだ。

最後に、この2年間人生の中でも貴重な経験をした。今後の人生を大きく変えてゆくだろう。人々の興味や関心は分散している。そんな中から課題を見付け、アイデアを紡ぎだし、これを実現させる。私は、このたびの貴重な体験を活かしてソーシャルマネジメントが理解できる地域プロデューサーを目指して活動してゆきたいと決意している。





○ 氏 名	岸本 眞理子
○ グループ	ハート&ハート
○ 在住地	大津市
○ 3分類	MOON
○ 動物占い	こじか

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

私は、現在老人保健施設のケア・ワーカーとして働いております。介護保険施行の元で、「在宅復帰」を目標にケアプランを作成するわけですが、家族の希望と本人の希望が一致しないことが度々あります。本人は勿論在宅を希望するわけですが、家族は家庭で見るのは無理だからと、特別養護老人ホームを希望します。両者の思い・言い分はよくわかります。

私自身、長生きして家で死にたいと思っていますが、両親が介護が必要な状態になった時、現在の社会資源を利用しても在宅で見るのは不可能だと思っています。自分の家・家族・親戚だけでみるのは、家族の崩壊に繋がります。昔からある「向こう三軒両隣」「遠くの親戚より近くの他人」の人間関係を地域に復活させなければなりません。「在宅復帰」は「地域復帰」だと考えます。「自分の家」ではなくても、住み慣れた街への「在宅復帰」が宅老所でありグループホームであるとかんがえます。「○○さんちのおじいちゃん、施設から戻ってきたけど、家にはおらんみたいや。そやけどすぐその△△宅老所にいったら会えるで。◎◎さんちのばあちゃんもそこに昼間はおるわ。呆けとるから昼間は一人にはしておけんてあそこの嫁さんが言うtotた。」「そうか、ほな△△宅老所にいったら、老人会の案内もいっぺんに渡せるな。」「今度の老人会のお楽しみ会は△△宅老所でひらかか」今は、ちょっと有閑老人中であっても社会の一員ですし、元気なお年寄りと同等に扱って欲しいと思っているはずです。

現役バリバリの老人・次期老人・ボランティア・入所老人の家族・地域の役員・近くの学校の小学生・中学生・園児・作業所の障害者・婦人会等…皆が誰でも気楽に集まれるような「宅老所兼サロン」を作りたいと思っています。

「サロン」に来れば触れ合いがあり、和めてその上に、最新の情報があり、ネットワーク化されている。皆で「古い」を怖がらず楽しく歳をとること皆で思考する。入所の老人をも含めて皆で「協働」できれば最高だなあとと思っています。





○ 氏 名	谷村 節子
○ グループ	ハート&ハート
○ 在住地	長浜市
○ 3分類	MOON
○ 動物占い	たぬき

◇ 入塾時応募原稿より 「今後取り組みたい活動とその理由」

市の図書館にて、「おうみ未来塾」の案内に触れ、自身の未来をも重ね合わせてみたいと思った。

平成11・12年度と、「淡海生涯カレッジ」を受講して、学びの楽しさを体験させてもらおうと共に。自身を取り巻く事象を思うとき、もっともっと学ぶことの必要に気づかされた。

昭和25年生まれ、50歳となった。18才の娘は、事あると「死にたい。一緒に死のう」と言う。「何言ってるの。お母さんは100才まで生きるつもり」とつい言い放ってしまう。

平成8年1月に実父（72才）が、癌闘病1年5ヶ月であっけなく亡くなった。70才を過ぎて尚夏場の葉刈り（造園業）に精を出していた矢先、「どうも食が進まん」と通院したと思ったら、「9分通り癌です。それも末期。手術しても2年もつかどうか」と医師からの呼び出しだった。「何でこんな事に…。何も悪いことをした覚えはない…」と言う嘆き、否定、苛立ちからやがて受容し、家族に葬式の指示をして亡くなっていった父親を誇りに思う。

それから10ヶ月たった頃、今度は当時中学2年生の娘が神経衰弱様の病みを現した。母親である私は、3ヶ月の介護休暇をとり、娘も休学し、クリニックへ通院の日々が始まった。1年経ち、2年経ち、娘は天津の単位制通信高校生2年目となり、アルバイトをしたいの思いを強めるが、現実とのギャップの中で、母批判をしたりで、とうとう入院させることとなった。それをきっかけに20年間勤めてきた養護学校教員を退職した。

退職後、県女性支援センターのホームヘルパー2級技術講習で啓発され、現在、市の社協でパートのホームヘルパーとして、週3日程の活動をしている。あくまで、娘のヘルパーであることを中心にである。80年、90年と生きてこられたお年寄りの話が貴重である。公的介護保険制度や施策について、或いは娘を取り巻く現状から、家庭や社会での生活実践を高めたいと思う。

先生ありがとう、お世話になりました！ ——

日高敏隆先生へのインタビュー



① 地域プロデューサーの必要性について先生のお考えは？

私が以前、県立大学の学長をしていた時に、ある学生が自分は環境をやりたいくてこの大学に入学したが、教授の教えてくれる環境とは違うような気がするので大学を辞めたいと相談がありました。実は、私も、18才頃の時、動物学者になりたいくて大学へ入ったのですが、彼と同様、自分のやりたい動物学の講義ではなかった。とても不安であり、不満であった。時代は違っても、人間のもつ遺伝子は、18才という年齢になると何かしたい、何かやりたいという様に働きだす気がします。

それに対して社会は上手く対応しているのか疑問です。何をしたいのかわからない時に、それを示唆するプロデューサーが必要だと私は思います。

② 地域プロデューサーとしてグループワークや講義等で学んできた私たちですが、これから地域プロデューサーに求められるものは？

人間は、遺伝子のプログラムにより受精から始まり、胎児、赤ん坊の時代、子どもの時代、若者の時代、老人・死というように決まった発達をしています。それは、遺伝子たちの複雑なプログラムの働きです。しかし遺伝子のプログラムは大筋しか決まっておらず具体的なことは、学習していかないと働かないものがたくさんあります。

人間の子供も達は昔から、まわりの様々な大人を見て生活してきました。話しかた、ものの頼み方など大人になればあすればいいのかという事が具体的に見える環境で育っていました。ところが、文明が進むと、家庭だけの生活になり、大人の見本としては、たった1人の身近な父や母しか接することが出来なくなってきました。一般的な男として、女として生きるお手本としては接する数が少なすぎます。

もっと家庭や兄弟、学校、地域で、大人も子どもも一緒になって、積極的に何かを体験して、様々な人間と接することが、遺伝学的にも人間の成長としてとても大事なことでと私は考えます。どうすれば皆の集る様々な楽しいあつまりができるのかを考えるのが、地域プロデューサーの使命だと思います。また、プロデューサーは経験を持っていて、必要な時にしかるべきアドバイスのできる人。自分がルールを敷いて回りの人間の遺伝子をくすぐるようなものを与えるのが、大事な役目だと思います。人間は、遺伝学的に楽しいこと、快樂的なことであれば積極的に学習していきます。

また、子ども達に接する時に、特に注意することは、決して知っていることを全て教え

るのではなく、共に体験していくことだと思います。

③ 3期生に向けて励ましの言葉を！

遺伝的プログラムを大事にしてください。ただし、悪用しないように。

北村裕明先生へのインタビュー

① 3期生について印象に残ったこと（1期生と2期生に関わってきて社会性時代性などの背景による違いがあれば・・・）

3期生は、タレンティッドな人が多くて、リーダーがいっぱいいるって感じですね。去年までと比べての特徴じゃないでしょうか。

3期生の方々をみていると、おうみ未来塾も県内で市民権を得はじめていると感じます。自分たちのやっている市民活動をもう一步深めてみたいと思ったときに、未来塾に来て、色々な人と交流して、グループ研究が大事だということを今までは、理念として言ってきた訳ですが、卒塾生も出ましたし、ようやく実際にという評価を頂けたのではないのでしょうか。



② 未来塾の内容・・・可塑性のあるカリキュラムって凄いですね。（塾生自らが考えていく講義・研究内容・日本で最初の内容）

私たちは、日本で一番良い学校にしようと思いました。近江という小さな地域ではあるけれど日本の一番良い契機を作り出そうと。ここを出ればバージョンアップした活動が出来るリーダーを育てられるように、と思ってきました。教師から与えられるだけでなく学ぶ意欲のある学生も一緒になってカリキュラムを開発するとか、座学に終わるのではなく実際に活動に結びつくようなものやっいていこうじゃないかと思った訳です。

3期生は、1期・2期との交流ありましたよね。また、塾生活動訪問（桃源郷・西の村）もありましたが、1・2期生は、色々試行錯誤していたわけですし、3期生は、非常にうまくいきましたよね。これは大きかったと思いますよ。学校としては、バージョンアップしたと思います。

③ 地域プロデューサーとして学んできた私たちですがこれから地域プロデューサー求められるものは？

やっぱり自分の地域で新しい事業、たいしたものじゃなくても「ことおこし」をしていくってことじゃないでしょうか。

21世紀社会は、色々なレベルで「ことおこし」がでてこないはずだと思います。地域づくりの3つのキーワードは「参加・安心・創造」です。

地域プロデューサーというのはまさにその、地域の「参加・安心・創造」の担い手であってほしいですね。たとえば、地域のコンサート。地域でもこんなに色々な音楽が安心して聞けるとか、また、それが創造のシステムに変わるかもしれないという可能性もありますね。当然、自分ですので行政依存ではなく参加ですよ。

だから、そういう活動が日本の色々な地域で起きてくるということが、21世紀の未来を明るくすることなのであって、地域プロデューサーというのはそういう活動をする人だと思っています。

④ 3期生に向けて励ましの言葉を！

「とにかくやってみよう」ということですよ。足を踏み出すということが大事じゃないでしょうか。今の時代、不透明で不安ですので、立ち止まって見るのも大切ですが、必要なことのために一歩踏み出すってことが安心のシステムを作り、不安を解消し、希望の持てる社会への鍵なんじゃないでしょうか。

個々では、限界があります。色々な人との関係、未来塾、ネットワークセンターの関係、そのネットワークを広げながら足を踏み出すことが大切なんじゃないかな。

日本の社会は、霞ヶ関から発する縦型垂直的な活動、キャッチアップ型でした。21世紀は、非常に目標も多様化しています。横のつながりを大切にした、対等な連中が情報交換しつつ、支えながら一番成功したところにある面では力を注いでいくというフロントランナー型になりつつあります。いま地域社会とNPOを結ぶ作業をしていますが、個々の力というよりは、横にネットワークを広げながら踏み出して、そういうネットワークを地域で支えるシステムを作っていって欲しいですね。

未来塾運営委員の先生へのインタビュー

インタビュー：編集委員 西村&山口
運営委員：織田直文・藤井絢子・岸田眞代・辻川作男

2月13日、運営委員会が開催された時間を40分頂いてお話を伺った。

インタビューををすると言うより運営委員の先生方も委員会の中で「塾のあり方がこれでもいいのか」という課題があるようで、塾生として逆に質問を受ける場面もあった。

①1～2期生に関わり、3期生の活動を見てきて印象に残ったことはありますか？

辻川：1期生でしたので、経験的に言うので正しいかどうか別として・・・形を上手く表現している研究が多かった。1期生は、勉強から入るグループが多かったが3期生は、コミュニティビジネスやイベントなど地域にプラスしていこう、システムを生

んでいこうとしている大きな特徴があったと思う。

藤井：1～4期どの期も凹凸があります。お二人は、

地域プロデューサーである前に好奇心が強く、

中に置いとくんじゃなくて外に打ってでたいという意欲がある。パフォーマンスが非常にいいですね。それぞれの期にすべての凸になるのは難しいですが…。

岸田：私は、中間発表を見てないのですが、3期生ってすごく個性がある方が多いんじゃないですか。一つにまとめるのは難しくてぶつかりあったんじゃないでしょうか。

織田：私は、4期生からでしょ、1～2期は分からなくて、3期生のパフォーマンスがいきなりデビューで。想像以上に実践研究を取り込んでやっているという印象でした。

②3期生は「可塑性のあるプログラムってすごい」と感じています。塾の運営に関わってきた先生方の思いをお聞かせください。

可塑性のあるプログラムについて塾生がどう思っているのか反対に質問を受けた。

西村：あまり意識していなかった。今思うとこういう風にすればもっと成長できたのに、など反省点が多い。塾という守られた世界でなく地域に出て私たちの力が生かせるかどうか…。

藤井：メンバーがきちっと課題を持って参加しないとどんなテーマも深められない。概念で終わってしまい、実際のところまでおりていかない。そこの差が出てしまってい



るなと思う。

岸田：だから私たちから言っても生かしきれていないかなって思う。せっかく2年間のプロセスをどれだけ生かしたかっていうことを私たちから積極的に取り組んでというイメージがありましたね。



織田：今までのプログラムは、研修のシステム、勉強の仕組みをお膳立てしたものに参加する圧倒的でした。このプログラムがすごいなって思うのは、色々な研修を受けた人は、体験する中で気付かれることはあると思う。相対的には良いことをやっているが、絶対評価で言うと充分生かしきれているか、不十分だと私たちは問題意識をもって悩んでいる。

③地域プロデューサーとして学んできた私たちですが、求められるものはなんでしょう。

辻川：塾にお入りになるとき、地域で何かやっているとか、問題意識をもって入られたんですか？

山口：自分のしたいことをどういう風に形にしていくなか、わからなかったの…。

藤井：本当に見えなかったの？

山口：漠然とした「夢」としてあったんですが、ゴールとして10年後こういうものを立ち上げるという意思が2年間参加させて頂いてみえてきました。

藤井：その漠然とした夢が大切なのよ。

織田：それがメッセージのひとつだな。

藤井：映像があるということ。その映像を自分たちで自立してプログラムを作りながらそこに近づいていくことを体験しながら、非常にエキサイティングになっていくのがわかる。



織田：地域プロデューサーっていうのは、「想像力」。ああしたい、こうしたいというイマジネーションともう一つの「創造力」、クリエーションというのか。これをたゆまずやっていくのが地域プロデューサー。異文化のものを上手く協同というか、ある意味では、コーディネート力というか。

岸田：夢でもなんでもいいんだけど、塾が良かっただけで終らず、それをどう、地域に持ち帰るってことが大切な要素でしょ。

藤井：未来塾での成果は、そこの地域にどのくらいのパワーを持ち帰られるか。それが、地域プロデューサーに求められるものでいえば、そのパワーが大きくあってほしい。チームでやったとき、議論で終わらないで花開いてほしいと思う。

岸田：そういう人が27人積み重なっているわけだから

藤井：地域の暮らしの場やその感覚を掴んでね。行政はたまたま福祉、環境、産業とか縦割りになっているけど、地域というのはぐちゃぐちゃでしょ。その混沌とした地域

の感覚を形にして発信していく。それを形にして行くパワーは、女性ですよ。だからこそ男性も一緒に。

岸田：そう、それが一つなのと、やっぱりごたごたを楽しめるということ。そこから始まるって言うくらいのつもりでやるところに私は地域プロデューサーの意味があると思う。

辻川：いま、かなりNPOにしても公的な整備ができつつある。措置から計画とかいろんなシステムが自立を前提としてきている。ある意味では、活躍する場所でもあるかわりに自己責任が多くなってきていると思う。

④卒塾にあたり3期生に励ましのお言葉をお願いいたします。

織田：いま切り込み始めているのは、圧倒的に女性だね。いわゆる不満というか、問題発見力というのが鋭い。でも、地域プロデューサーとしてまだ色々なものが備わっていないのが実情だから、どんどん走っていった挫折もある。そのときショックで潰されてしまう可能性もある。だからこそたくましく生きていこうと。クリエイティブな力とかプランニング、多様なネットワーク、専門性というものは、この2年間の塾だけでは、完結しないと思うので。地域プロデューサーというのは単発の事業、イベントをやるということではない。地域を作っていく、地域を魅力化していく仕事だから一生の仕事ですからね。私の人生ここから、芽生えた瞬間から死ぬまでやったろうという女性がたくさん出てきたらものすごいことになる。

藤井：でも、切り込みは女性だけど仕事は男性と一緒にやりましょう。

織田：もちろんそう。ネットワーク力とか、組み合わせを恐れずにね。10年たったらこの卒業生が、地域の中核を担っているってことになったら、そのとき、初めて評価されるだろうと思う。

辻川：地域では、嫌なこと、自分では思わないような事もやらないといけない。でも夢があるわけですから、それをどう叶えていくか非常に面白い。当然挫折もあるわけですが、やっぱり仲間が背中を押してくれると思うんですよ。3期生だけでとどまるのではなく、せっかく塾で地域プロデューサーを学んだもの同士が力を出し合うそういうこともやって頂けたらありがたい。やっていきましょう！

織田：みんな同志なんだから。

西村：運営委員のみなさま心強いお言葉を頂きましてありがとうございました。

事務局からのメッセージ

皆さんお疲れさまでした。未来塾の2年間で出会った人の数は何人になりましたか？たくさんの方があったはずですが、想いを伝え共有することは実に難しいものですが、そこから新しいものが生まれることの楽しさ、おもしろさを感じていただけたのではないかと思います。この2年間はいろんな人と出会って刺激し合う練習です。これからは皆さん自身の「おうみ未来塾」を創っていきましょう。楽しみにしています。

天川隆男

おうみ未来塾 3期生のみなさんへ 木村光一

ご一緒に活動する機会はわずかでしたが、出かけていって触れあえた地域の人々との思い出を大切にしています。研究グループのメンバーが、みんな熱心に議論しながら課題解決に向かい、お互いの意見を尊重しながらこんなにも熱くなれる皆さんを羨ましく思いました。その中で私自身も学ぶこと、気づくことができました。そして、そのことを生かせる機会もありました。これからも互いに学び合い、刺激し合える関係でいたいと思います。

十分なサポートは出来なかったことを心苦しく思いますが、いつも暖かく迎えていただいていたありがとうございました。

皆さんと初めて会ったのは約1年前、後半のグループ活動が始まってからでした。一応「てんしょく」担当ということになっていましたが、十分な関わりが持てず、その代わりハートアンドハートのキャンプ、駄菓子探偵団の地蔵盆紙芝居、グリーンツーリズムの研究会など各グループ活動に” いっちょかみ”。おいしいとこ取りでしたね。すみません。

この2年間の塾活動はいかがでしたか。私はネットワークセンターで仕事をし、未来塾の塾生や他の人たちに出会っていく中でとても刺激を受けましたし、自分のこれまでの価値観が変わったことも多くあります。いろんな属性を持つ人たちが可塑性のあるカリキュラムと一緒に作り上げていくのは、ハードな課題で、それを終えやれやれといったところですが、皆さんの活動の本番はこれから。ますますのご活躍をお祈りします。

私も負けずに頑張るぞ！！

(笹山 衣理)

編集後記

吉 見：ほんと！おうみ未来塾…あっという間の2年間でしたね！

西村：はい！毎月第2火曜日に幹事会を行ってきましたよね。一体だれが幹事で、編集委員が…分らない状態でスタートしていますが…！

菅 : 1年目は、講義内容や県内・県外研修内容を決めたり、3期生にお知らせする作業を淡海センター事務所の片隅でさせて頂きました。

山口：私は、子どもを預けて…京都から通いました。子どもを連れて来たこともあり
ました。1年目の後半は、グループ分けについてどんな方法でしょうか…議論しま
したネエ。

吉 見：2年目の後半からは、編集会議のため、1ヶ月に2回の会議と家に宿題を持って帰って……。皆さん本当にお疲れさまでした。

川尻：私は、塾生でありながら事務局という立場と両方になりました。

松田：ぼくは、幹事と最後の追い込み編集の入力をさせて頂きました。

西村：私は、入塾時に「編集委員をします！」と宣言したばかりに……大変な事になったとホホホ……。編集会議も人が集まらずに作業が滞って天川さんから催促されるし、原稿は出ないし…。でもどんなに忙しくてもどうやってやり遂げるか。今回の編集担当させてもらって限界への挑戦が新たに出来ました。

山 口：はい！私は、先生方へのインタビューをさせて頂いたり、そのテープおこしや初めての経験で大変楽しく勉強になりました。

児島：僕は、幻の編集委員でしたあ。

西村：ほんと！なにやってたのよ（ブン・ブン・）
ふぞろいの3期生ですわね！

吉 見：まあ！まあ！怒らないで！

そう言えば僕と山口さんは、ラジオFM滋賀の「湖岸通り77番地」に生出演しました。おうみ未来塾3期生の活動について語ってきましたが、みんな聞いてくれたのかなあ。

山 口：生だからドキドキしたけど新鮮な経験で楽しかったですよね。

吉見：この報告書も、なんとか編集できましたね。

菅：この報告書が届く頃、皆さんはどんな想いでページを開くのでしょうか。思い出がぎゅっしりずっしり詰まっていますね。

吉 見：今後は、この報告書表紙絵の「3つの林檎」という名前で3期生同士の交流を深めていくことになります。本当に、遊び、飲み、語りあうことが大好きな3期生ですからますます交流が深まる気がしますねエ。

塾生会幹事の方は、これからもヨロシクお願いします。



お疲れ様でした！ 幹事及び編集委員

西村ますみ・山口吾往子・菅 邦子・松田 元・児島 馨・川尻良治・吉見精二

3期生塾生会名：3つの林檎

(表紙絵：浅居 浩 画伯)

これからもよろしく！ 幹事

田中義郎・藤井伊佐美・西村ますみ・吉見精二

－添付資料－

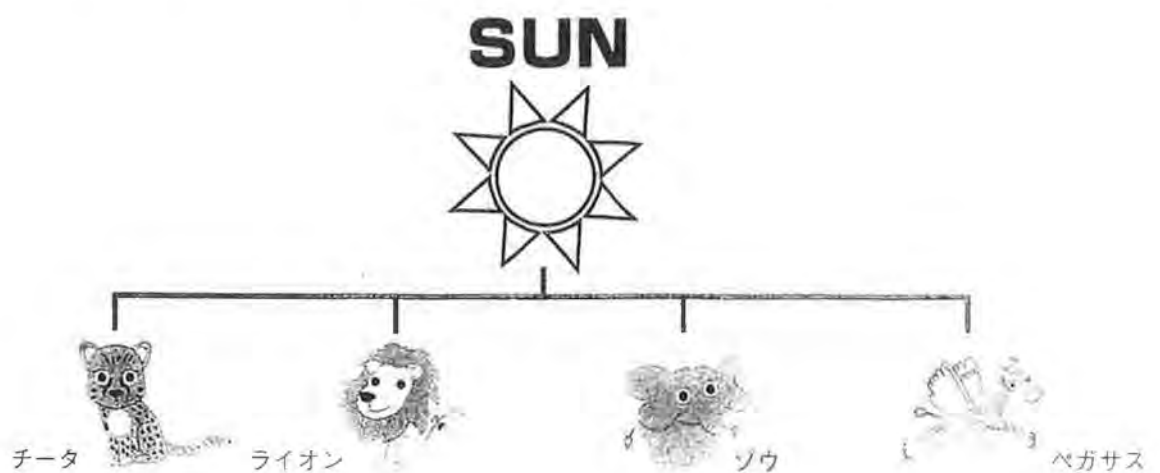
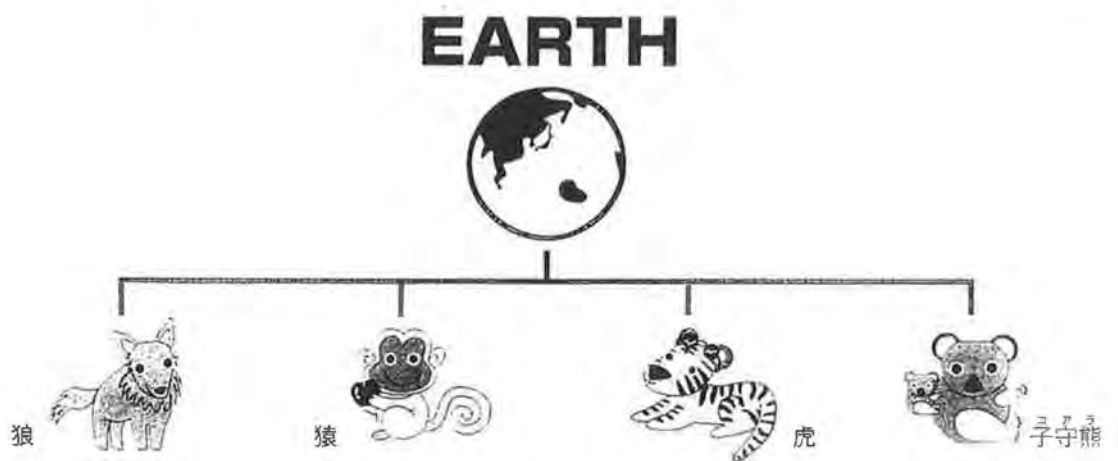
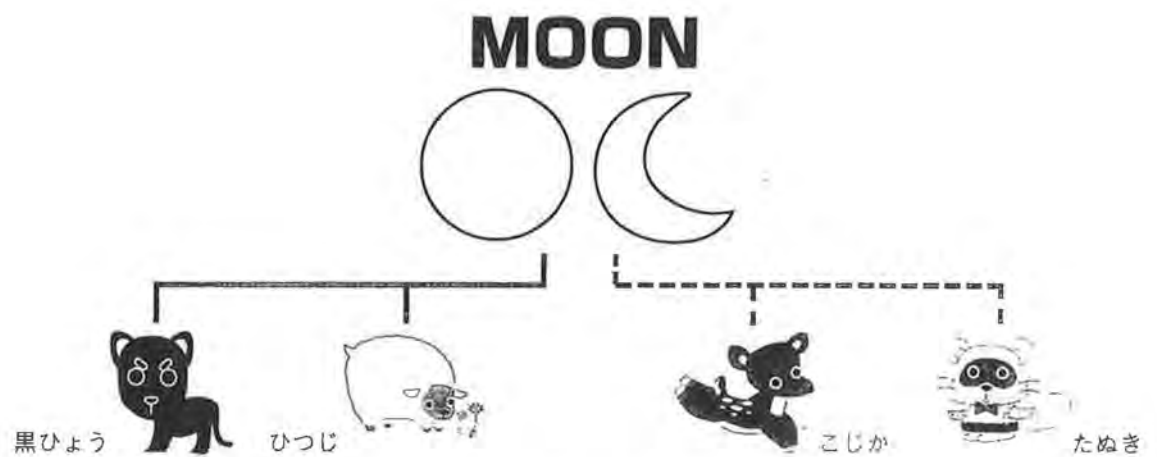
個性心理学では、その人がどういう性向の人なのかを把握し、人間関係をより円滑にしてゆくことをめざしています。

まず、誕生日と時間で、人の性格を3つに分類します。それが、MOON と EARTH と SUN。これで、その人となりの大わくがわかります。その上で、12の動物に分類します。これから動物占いができます。これで、その人の性格までわかるのです。

3 分類の比較

MOON	 ・ ケンカしたくない ・ 人間らしく生きたい ・ 目指すは人格者 ・ 信頼関係を築いていくことが必要 ・ 人との関わりを大切にする ・ コンセプトを考える ・ 「なんで～?」「どうして～?」 ・ ムダが多い
EARTH	 ・ ペースを乱されたくない ・ 自分の世界を大切にしたい ・ 目指すは財産家 ・ 夢を具体的に実現できるものが必要 ・ 自分の夢を大切にする ・ 形をつくる、表現する ・ 一所懸命、納得 ・ ムリをする
SUN	 ・ ワクにはめられたくない ・ いつも元気で光り輝いていたい ・ 目指すは成功者 ・ 可能性をすぐに実現できるものが必要 ・ 可能性を大切にする ・ 世の中に広めていく ・ すごい、絶対、面倒くさい ・ ムラがある

基礎理論 7 (3分類から12分類)



来
未 夢 創
遊

2003年3月

編 集：お う み 未 来 塾 3 期 生

発 行：(財) 淡 海 文 化 振 興 財 団

〒520-0801 大津市におの浜1-1-20

TEL 077-524-8440

FAX 077-524-8442

印 刷：(株)ス マ イ 印 刷 工 業

禁無断掲載

3つの林檎